
東方超銀河伝説 ウルトラギャラクシーサーガ

A G I T

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方超銀河伝説 ウルトラギャラクシーサーガ

【NZコード】

NZ8930X

【作者名】

AGIT

【あらすじ】

東方英雄光 NEXUS、ダークザギとの戦いから半年、八雲カズキはウルトラマンネクサスとして幻想郷を守り続けていた。だが多元世界となつた地球の幻想郷に様々な異変が外の世界をも巻き込み起きようとしていた……

これは東方英雄光 NEXUS の続編です、詳しく読みたい方はそちらを優先して読んだ方がよろしいかと。

あと練り直したため途中から違つ話となつてあります。

EPISODE 01 新たなる始まり（前書き）

続編がスタート！

今回は活報で募集し名前が出た怪獣の一体が登場します。

登場怪獣

宇宙怪獣ベムラー

プロブタイプビースト ペドレオン

登場

EPISODE 01 新たなる始まり

「ん……あ、もつ朝か」

和室の中で金髪の青年が起床し布団から起き上がるうとしたが何か布団の中に違和感を感じる、更に何かに引っ張られてる感がし掛け布団を捲るとその中には。

「つー」

黒く丁度良い長さの髪の毛の少女が白い寝巻の和服を着てるが少し乱れて眠っていた。

「あわあわあわ……」

青年はやっちはまつたああ的な感を醸し出していたがいや、そんな事あるはずないと昨夜の記憶を思い出していた、確かに一人で寝たはず、考えてみたらこの少女の布団は隣だから寝呆けて入ってきたんだ、色々推測していると少女は目を覚ます。

「…………カズキ？」

青年の名前を聞いたり聞かなかったり。

「おはよ寝夢」

少女の名前を激しく動搖しながら呼ぶ。

「ふわあ～…………私確か…………夜中に起きて…………トイレ行った
はず…………」

ここで青年は何も間違いは起きていないとホッとして息を吹く。

「どうかしたの？」

少女は寝ぼけていたため今の自分の状況がわかつておらず。

「まいいわ…………」

「おわっ！？」

少女に飛び付かれ後ろへ倒れる、まるで押し倒されたよう。

「靈夢…………ちよつと…………ちやんと起きるよ…………朝だぞ
朝…………ん？」

少女は頭が覚醒し今の自分の服装の乱れと向をしているかに気が付く。

「あわわわわあああああああああああああああーっ……………」

大きな声で叫ぶのだった。

「なんで言つてくれなかつたのよ！」

「お前が抱き付いてくるからだろ！」

そして布団を仕舞い洗顔をすませ朝食の支度をし居間の丸いテーブルで朝食を食べる。

だが先ほどの事があり少々喧嘩氣味。

「靈夢はもう少し巫女の自覚持つた方がいいんじゃないのかな？」

青年の名前は八雲カズキ、普通の人間ではなく妖怪と宇宙人の間に産まれた妖怪。

「カズキこそもう少し男だつて自覚持つて行動したら？」

彼女は博麗靈夢はくれい れいむ、この博麗神社の巫女でその巫女服が紅白で脇が出ているのが特徴、人間だが空を飛ぶ程度の能力、靈氣操る程度の能力という不思議な力が使える。
だがこの幻想郷では珍しくない。

この幻想郷では人間や妖怪、幽靈が共に暮らしている一つの空間であり、日本のある場所にあるのだが普通の人間では出入りはできない、博麗大結界というシールドみたいな物で被われており見る事すらできない。

だが普通の人間にも入る方法はあつたりするがかなりまれ。

「なら靈夢もむづかし女の子らしくしたらうへ朝から昼寝しないで

れ」

「アンタだつて縁側でお茶飲んでるだけじゃん！」

「残念、俺は藍の所に行つて毎日弾幕の出し方や空を飛んだり隙間の開き方を習つたりしてゐる、靈夢が寝てる間に」

ああ言えればこいつ言つとそんなやり取りが繰り返され拉致が開かないと思ひきや。さあ

「あら朝から仲がいいわねえ～」

「紫」

「母さん」

空間に亀裂が入るように開いたスキマから上半身をだけを出して部屋に入る金髪で紫の服の女性が、彼女はハ雲紫やくもねかり名前から察つせらること通り彼女こそがカズキの母親だ。

幻想郷最古の妖怪。

「まあ喧嘩するほど仲がいいって言つし～」

「それで、用件何?まさかからかいに来ただけつて言つんじゃないわよね?」

結界を管理するものがもう一人の結界を管理するものの所に来たのだ、だが自分が言つた通りの事だと思っていた。

「そうよ、仲がいい一人をからかいに來たのよ

「やつぱり」

すいへ眞面目といつわけでもないため日常茶飯だが。

「まったく、冬眠して起きたと思つたらいきなり」

「よかつた、そこは繋がつてなくて」

人間ではなく妖怪である紫は冬眠？までするため冬の間は会えないのだが。

「だけど早く起きちゃつたのよね～地球温暖化？」

3月までぐっすり、と行きたかったらしいがなぜか気温が高く1月に目覚めていた。

因みに今は1月の下旬、まだまだ寒いがすごく寒いわけでもない。

「今日も来るカズキ？」

「もちろん」

「ならお菓子用意して待つてるわよ～」

そしてスキマの中に入り出入口を閉じた、この能力は境界操る程度の能力を使い開いたり閉じたりしているのだ。

「確かに最近変よね、もうアレから半年ぐらいはたつたのに」

「ダークザギは倒された、だけど怪獣とビーストの生き残りはまだ

沢山いるからなあ」

半年ぐらい前、幻想郷を脅かす宇宙からやつてきた妖怪、異星獣スペースビーストが現われ人々を襲つていた、更には怪獣といつ巨大生物まで出現するようになつていて、それらはダークザギが呼び寄せていたものだつたがカズキは光の巨人ウルトラマンネクサス、ウルトラマンノアに変身しザギを倒したのだったが、

元々はネクサスの世界にある幻想郷だつたのだが、ある宇宙人の計

画により時空が歪みネクサスの世界ではなくなり様々な世界が融合した多元世界となってしまった。カズキがいたネクサスの世界は遠い過去のものとなってしまったのだが幻想郷だけはそのままだった。

「まあ何が来ても俺がこの幻想郷を守るぞ」

「や、そう」

その言葉は嬉しいのだが本当にそれだけらしいのか、そう感じていた。

（だけど…………ずっとここに閉じこもったままじゃ…………）

少し不安だった、自分の傷を隠すためにここから出ないのでは、幻想郷から出ないままになるのではと。

「カズキ」

「何?」

「…………なんでもない」

だがそれを言つ興気はなかつた。

「変な夢」

「ん? アンタに変なんて言われるなんて心外ね」

「それはどういう意味かな?」

「言葉の意味よ」

味噌汁をすくーっと飲み先までの雰囲気は薄くなつていつた。

「せつと食べて掃除して昼寝するわよ」

「はーはーことその前に」

カズキは白く真ん中に青いクリスタルが埋め込まれ、赤と青のラインが流れる短剣エボルトラスターを取り出すとそれはゆっくりと点滅していた。

「朝っぱらから不粋ね」

「じゃあ……行つてくるか」

腕を回しながら立ち上がり神社から出て鳥居の前に立ち。

「ネクサス……！」

鞘を強く握りエボルトラスターを振り上げるとそれを持った右腕を大きく回し頭上高く挙げると赤い光が放たれカズキは包み込まれるとの場から姿を消した。

この幻想郷で人間が多く住まう人里の近くにある魔法の森の中、そこにナメクジのような両手が鞭を束ねたような触手で頭部に一本の触角が生えた巨大生物、プロブタイプレビースト・ペドレオン（グロース）が現われ人里を目指していた。

「ギシャアアアアツ！……！」

魔法の森はあまり人が入らないため怪獣やビーストが潜伏していても気付かない場合がある。

「おいおい朝からこりゃないぜ」

その森に住む金髪で白黒の魔法使いのような服を着た少女、霧雨魔理沙が森の中に建っている霧雨邸から出てきた。

彼女は主に魔法を使う程度の能力があり魔法を使う事ができる。

「しかも気色悪いペドレオンなんてなあ」

「そんな事言つてないで」

そこに同じように森に住むやはり金髪の少女、アリス・マーガトロイドがやつてくる。魔理沙は人間だがアリスは魔法使いで元人間に分類される。

「だけどよ～やっぱりあんな不気味なの朝から見るの気分悪くならね？」

「ん～確かにそうよね…………」

ペドレオンは聞こえていたのか大きな鳴き声を上げ頭部の一一本の触角の間から火炎弾を放つ、森に当たれば火事となり大惨事になりかねないのがその火炎弾を宙で爆発させる赤い光が現われ巨人の形になる。

「さつそく来たみたいだぜ」

光が消えると胸にY字の赤いクリスタルが付いた銀色の巨人、八雲カズキが変身したウルトラマンネクサス・アンファンスが現れた。だがこのネクサスは本物ではなく本物の分身である、ネクサスの本当の名はウルトラマンノアで次元を司る神でありその一部の光を授かつたカズキはその光でネクサスに変身しているのだ。

「ショアツ！」

左腕を曲げて後ろへ引き指を真っ直ぐ伸ばし右腕を伸ばし拳に構える。

ペドレオンはネクサスを見ると怒りが込み上げ闘争本能が向上すると火炎弾を放つがネクサスは両手を前に伸ばし円形の青い光の壁サークルシールドで防ぐ。

「キシャアアアツ！..」

ペドレオンは更に怒り突進していくが回し蹴りを繰り出し頭部を攻撃すると横を向きそこに足を上げて曲げてから勢いよく伸ばしてキックを炸裂し遠くへ蹴り飛ばす。

「フツ！」

両腕には鋭い切れ味を持ったエッジが付いたアームドネクサスが付いておりその左腕をエナジー・コアの前に構えるとアームドネクサスが青く発光、

左腕を下ろすと全身が搖らぎ頭から金色の光に包まれ徐々に変化、光が全身を包み込むと光は消えネクサスは銀色だけではなく上半身は力強い赤に、下半身は素早い青に色が変わり胸にはエナジー・コアだけではなく青いクリスタル、コアゲージが付いておりその左右には炎の翼を描いたような金色のライン、ファイヤーシンボルが流れた姿、

ウルトラマンネクサス・ジュネッスブレイブにスタイルチェンジ。

「ディヤツ！」

このスタイルは力、素早さ、技が向上された姿である。

ネクサスはこの姿になりパンチを繰り出すとペドレオンのその体は凹み苦しむ。

こういう体が柔らかい生物はダメージを和らげる事ができるがネクサスの攻撃の威力が高く受け流せなかつたのだ。

ペドレオンは腕の触手を振るつが。

「セアツ！」

アームドネクサスのエッジが光り、それでアップーをするように右腕を振り上げその触手を切り落とす。

ペドレオンは体の一部が切り落とされ痛みに悶えるが片手の触手を叩き付ける。

「グアアア！？」

前のめりになると更に背中に触手が叩き付けられ膝を地面に付く。そのままペドレオンは縦長の大きな口でネクサスを丸呑みにしようとするが。

「シヨアツ！」

その口の中に青い手裏剣光線パーティクルフェザーを打ち込むと口内は炎上、すぐに口を閉じるとネクサスの反撃を食らい吹き飛ばされる。

「ハアアアア……フッフッ！」

両腕を下げ腹部の前でクロスするとアームドネクサスは金色に発光ゆっくりと拳が上に向くように曲げるとその間に金色の稻妻が走り素早く腕を擧げるとアームドネクサスは強く光りゆっくり腕を左右

に伸ばすように下ろし皿の前に金色に輝く無限の字が浮び上がり。

「シヨアアアアアツ！…………！」

「字に腕を組むと右腕から金色の光線が発射される、必殺技オーバーブレイ・シユトロームを炸裂した。

「ギシヤアアアアアアアアツ！…………！」

起き上がったと同時に光線を浴びるペドレオンは大きな断末魔を上げる、光線が止まると青白く体が発光し粒子となり飛び散りペドレオンは倒された。

ネクサスは両手を挙げその場から飛び立つと赤い光に包まれ高速で飛び去った。

「飯の途中だつたか？」

「普通はそうよ」

外の世界、幻想郷の外は日本であり、その日本の東京、この時代ではメトロポリスと呼ばれている時代……

竜ヶ森の湖、ここは昔、地球で初めてウルトラマンと怪獣の戦いが

記録された場所である。

その湖の水面は大きく揺れており水中に何かが潜んでいそうだった。

「ここか……行方不明者が多発してゐる湖は」

そこにカズキと年齢^{マドカ・コウイチ}が変わらない茶髪でメガネを掛けた青年がやつてきた、名は円光一^{マドカ・コウイチ}、大学生だったがある事情で休学していた。光一が言うようにこの竜ヶ森の湖で釣り人が何人も行方不明になつてゐるらしくこの時代の防衛チームのスーパーGUTSも調べているのだが何も手掛かりが掴めていなかつた。

「湖の中に何かいるのか……？」

田を瞑ると誰かと話しているように口を開く。

「そうか、わかつた、ありがとう」

誰かに礼を言うと光一は白と金色で金色のラインが四対流れるカバーが付いたアイテムのスーパークレンスを出しそれを持った右腕を円を描くように大きく回し頭上高く拳げるとカバーが開き中にあつた発光体が強く光り光一は白い光に包まれその光と共に湖の中に飛び込んだ。

湖の中には魚が居るのだが何かから逃げるように泳いでいた。水中には魚ではない黒く巨大だが手が短い宇宙怪獣ベムラーが潜んでおり魚を食べていた。

「グワアアアアン！！」

ベムラーは自分の巣にしていた湖に侵入者が入ってきたのに気付いた。

目の前に光り輝く巨人が現われ光が消えると胸に金色のラインが流れるプロテクターはスパークレンスのカバーに似ており赤と青紫と銀色、額に菱形の宝石、ティガクリスタルが付いた巨人、光一が変身したウルトラマンティガ・マルチタイプが現われた。

「ヒュッ！」

右腕を伸ばし指を伸ばし左腕を後ろに引き拳に構える。

ベムラーは先制攻撃で口から青白い熱線を吐くが水中の中とも関わらず素早く動いて攻撃を避けると青い手裏剣光線ハンドラッシュを放ち攻撃をする。

それから飛ぶように水中を泳ぎ腹部にパンチを繰り出すベムラーはゆっくりと後ろへ吹き飛び。

「グワアアアアー！！」

だがその状態で熱線を放ち左胸に当たりティガは腕を上げて藻搔くように後退り岩に足を引っ掛け転ぶと後ろに倒れベムラーは泳いで接近し踏み付ける。

ティガはこのままではいけないとティガクリスタルが赤く輝くと。

「ん〜〜〜ハツ！」

額の前で両腕を交差してから腕を下げるとき紫の模様も赤くなり素早さを犠牲に力を向上させた姿、パワータイプにタイプチェンジを

じベムラーの足を掴みそのまま立ち上がり持ち上げると投げ飛ばす。

パワータイプは水中戦に適した姿である。

「テヤツ！」

ベムラーに近付き力強いパンチを叩き込んでゆくティガ、だがティガはまだ気付いていなかった、ここが竜ヶ森の湖ではなくなっているのに。

（やつぱり動きにへい……！）

ベムラーを飛行機投げするよつに持ち上げるビジャンパンチを田指し飛ぶと同時にティガクリスタルが紫に光る。

「ふわあ～……ポカポカしたお昼寝日和ですね～」

幻想郷の霧の湖の中心の島に建つ紅い屋敷、紅魔館の門番の妖怪の女性、赤い髪の毛で緑の中華風な服装をした紅美鈴がうとうとしていた。

「！」のままお昼寝しちゃおうかな？」
「何言つてゐるのよ」

背後に銀髪のメイドの女性が急に姿を現した。

「ち、咲夜さん！？」別に私はお昼寝なんてしようつとせ……」

名前は十六夜咲夜、紅魔館のメイド長である。

「嘘おつしゃい！」

「ひえ～！」

咲夜はナイフを出してお仕置きしようとしたら湖から水濺きが急に立ち何事だと思って空を見上げると。

「う、ウルトラマン！」

それは力を犠牲にし素早さを向上させた青紫の姿、スカイタイプにタイプチョンジをしたティガがベムラーを持ち上げたまま空に飛び立つたのだ。

「タアアアアアアアツ…………！」

ベムラーを高く投げ飛ばすと腕を左右に広げ手にエネルギーを貯めてから上に挙げて手の平の間にエネルギーを圧縮し青い光の球が生まれ腕を下げ手裏剣のように青い光の矢、ランバート光弾を放つ、矢はベムラーを打ち貫き、ベムラーは断末魔を上げる間もなく爆発し倒された。

「つー！」

ティガは回りの景色がさつきまで違うとわかり動搖を隠せず地上に降りると同時に光に包まれ紅魔館が建つ島の地に降り光が消えると光一の姿に戻る。

「……」は一体…………僕は竜ヶ森の湖に居たはずなのに…………うわ
っ！？

辺りを見渡し後ろを向き紅魔館が建つており驚くと足を滑らせ湖に落ちてしまつ、泳ぎは上手いのだが先ほど疲れが残つており溺れてしまう。

（ヤバイ…………疲れてて泳げない…………）

スパークレンズを出そうとするが空回りして出せない、このままで命が危ないと感じていたが意識がだんだん薄れ手放そうとしていたら腕を掴み引き上げるものが現れ、そのまま身を任せ意識を手放した。

To be continued:

EPISODE 01 新たなる始まり（後書き）

ベムラーが竜ヶ森の湖に現れるのはお決まり？
次回出す怪獣は決まっていたり、1月に冬眠から目覚めた原因の
一つでもあつたり。

次回予告

光一

「幻想郷？」

レミコア

「…………多分時空が不安定で…………」

美鈴

「それにしても最近ポカポカしてますね」

ファイヤーゴルザ

「グゴオオオ……！」

光一

「ゴルザだと！？」

咲夜

「レイが逃がしたって言ってたのかしら？」

メルバ

「クオオオオオオオオオン！－！－！－！」

光一

「メルバまで……！」

次回【EPISODE 02　光を継いだもの】

EPISODE 02 光を継いだもの（前書き）

今回はティガで早速強敵が出現します。

登場怪獣

超古代竜メルバ

宇宙転鉄怪獣ティノゾール

超古代怪獣ファイヤー・ゴルザ

登場

EPISODE 02 光を継いだもの

紅魔館の一室、光一はメガネを掛けっていない状態で眠っていたが目を覚まし起き上がり。

「メガネ…………メガネ…………」

お決まりな事を咳きながらメガネを探し隣にあつた棚の上に置いてあつたメガネに気付きそれを着眼した。

「…………」

辺りをキョロキョロし窓から外を覗くと霧の湖が見えていたが霧が出始めていた。

「霧…………」

時間は昼食の時間を過ぎた辺りだらうか、何も食べてないなと思うと腹の虫が鳴り響くとすぐに扉が開き中に咲夜がワゴンを押して入ってきた。

「気が付きましたか？」

「貴方は？」

お決まりの言葉を吐くと咲夜は自分の名と職業を紹介。

「僕は円光一です、助けていただきありがとうございました」

「湖に足を滑らせた時は驚きましたよ」

それを聞き顔を引きずる。

「…………見ました？」

「確實に」

ティガからその人間の姿に戻るのを目撃されていた。

「まあ…………大丈夫ですよ、同じような人を何人も知っていますから」「同じような？」

その言葉に疑問に思つとまた腹の虫が。

「お昼過ぎてましたからそろそろお腹空いた頃だと」「重ね重ねありがとうございます」

ワゴンに乗せていたのは食事等々だつた。

「外の世界から来たのですよね？」

「外の世界？」

考えてみたら幻想郷の事を説明していないため一から説明して数分、食事しながら聞いていた。

「なるほど…………妖怪とかね…………でなんですか？」

「あ、いや、外の世界はどんな風に…………」

「どんな風について……」

光一も説明した、怪獣が現れてスーパーGUTSがそれに対処したりメトロポリスが昔東京と呼ばれていたり人類が外宇宙に進出していたりと。

「そうですか……」

それを聞いて前にある人物から聞いていたのとは違うなと思つていたため“ナイトレイダー”といつ名前知らないか聞いてみた。

「確かに100年か150年ぐらい前に地球を守つていた防衛チームですね」

それを聞いて少し複雑な気分となつていた、その人物がいた時代では本當になくなつていた、この事を伝えるべきか。
なぜ聞かれたのかは興味本位と思つていたが別の真意があるとはまだ知らなかつた。

「（）ちうそりさま、美味しかつたです」

「ではこの紅魔館の当主の元に案内します」

「よろしくお願ひします、咲夜さん」

「咲夜でよろしいですよ、光一さんはお客様なのですから」

「じゃあ僕も呼び捨てで呼んでいいよ、咲夜」

光一はベッドから降りて立ち上がり咲夜の案内の下、当主のいる部屋へ誘われる。

その頃、人里では。
ある家から黒い髪の毛の青年が出てきた。

「 もひの匂過ぎやか~」

両手を挙げて背伸びをする、この青年の名前はモロボシ・ジン（漢字表記 諸星 刃）、カズキと同じくウルトラマン、ウルトラマンゼロである。

「 今日もいい天気だなあ~」

ジンはゆっくりと歩き始めた、夕飯の買い物を兼ねて。

（今日の夕飯どうするか……）

歩いてくると里の人々が騒つくるのに気付いた、なぜかと思つて
いると。

「あ、ジンさん」
「よひ早苗」

緑色の髪の毛で青と白の巫女の服を着た少女、東風谷早苗ひがみや わなえが話し掛けってきた。

「 なんでみんなこんなに騒々してんだ?」
「ジンさんまた寝てたんですねか?」
「朝早いから、事を済ませたら寝まつんだよ」

朝が早いのは本当である、戦い方が格闘といった拳法中心のため毎朝の鍛練だけは怠つていないが眠いため朝食食べたらまた寝てしまうのだ。

「朝ペドレオン出たのは？」

「それは知つてゐる、カズキがもつ出てきたからぐっすり寝たけど」

「じゃあその次に霧の湖に現れた怪獣とウルトラマンは？」

その話には深く食い付いた。

「な、ナンダツテホー！？それは本当かい？」

「わざとらしいですよ、ええ、黒い怪獣と一緒に霧の湖から出てきてその怪獣を倒したみたいですよ？」

「どんなのだつた？」

聞かれると思い妖怪の山に住む鴉天狗の妖怪、射命丸文しゃめいまるあやが発行している新聞、文々。新聞を出して見せる。

「文さん、ちょうどペドレオン戦の後に来ていたみたいでちゃんと写していたみたいですね」

記事の一面には新しく現れたウルトラマンの事が書かれており写真はちょっと突然現れたからかブレていたがちゃんと何かわかるぐらいの写真だった。

「これは……ウルトラマンティガ！」

「ウルトラマンティガ？」

「いつからか知らないけど光の国に名が知られるよつになつたウルトラマンだ」

恐らく最初のギャラクシークライシスにより名が知られるよつこなつたのだろう。

「3000万年前の光の巨人らしい」「3000万つて……ダンさんやゲンさんよりすこく年上じやないですか！」

「ティガの血縁は途切れる事なく現代まで続きその現代の血を引くものがティガになつて戦つたらしい」

不真面目な部分があると思ひきや結構真面目であるジン、少し驚いていた。

「霧の湖だよな……チルノは確か」「旅に出てますよ？まあ幻想郷の中ですが」

氷の妖精チルノ、闇を光に変えた妖精でダークザギの配下のダークメフィストの闇を光にしウルトラマンブリザードとなり戦っている、ザギの決戦の後、もつと強くなるために旅を、幻想郷の中だがしている。

「しようがね、行つてみるか！」
「じゃあ私も着いていきます」「じゃあ行こうぜ！」

この半年間、ジンもカズキもウルトラマンでなくても普通に飛べるようになつていた、二人は一緒に飛び立ち霧の湖を目指した。

「ヒヒがそうです」

紅魔館では光一は当主の部屋の扉の前に来ていた。

「お嬢様、例の方が」

「入れてちょうだい」

扉を開けてから光一が部屋に入る、咲夜は入らず扉を閉める。

部屋の奥の椅子に座っていたのは背中にコウモリのような羽根、青っぽい髪の毛に赤い瞳にワンピースみたいな薄い紫っぽい服と帽子を着た少女、吸血鬼のレミリア・スカーレットがいた。

「貴方がさつきの光の人ね」

「はい、アレはウルトラマンティガと言います、僕の名前は円光一、あなた方が言う外の世界の人間です」

やはり外の世界という言葉を聞くと少し顔を引きつる。

「私はレミリア・スカーレット、この紅魔館の主人で吸血鬼よ」

先ほど幻想郷の事を少し聞いていたためさほど驚きはしなかった。

「ティガ…………ある国の言葉で3といつ意味ね、といつ事は3つの姿があるのかしら?」

「お察しの通り、ティガには3つの姿があるので……」

言葉を詰まらせた、3つの姿だけではないと察した。

「3つだけではないのね、それとなぜ貴方はウルトラマンに?」

「それは…………三ヶ月ぐらい前の事です」

三ヶ月前……

光一の自宅、屋根裏部屋の整理をしている時だった。

「確かこれ…………」

荷物の中に木箱がありそれを自分の下へ近付ける。

「ダイゴさんが僕にくれた」

これは親戚のおじさんであるマドカ・ダイゴからもらつた木箱であり、本人からは困った事があつたらこれを開けて中身のものを使えと言わっていたらしい。

「…………」

光一は興味があった、中身は一体何なのか、これで何ができるかが。木箱の蓋を開けて中身を見ると中にはスパークレンズなのだが金と白ではなく黒と銀色のブラックスパークレンズと手紙が入っていた。手紙の内容は「君がこれを正しい心を持つて使うのならば闇は光へと変わる」と書かれていた。

「ダイゴさんの字だ」

光一はすぐにダイゴの物だとわかつた、手紙の裏を見ると白い制服を着て戦艦のブリッジの前に六人の男女が写った写真が貼られてあつた、これはスーパーGUTSの前の防衛チームのGUTSの戦艦と制服だつた。

「正しい心、一体……」

恐る恐るブラックスパークレンズを握る、だが何も起こる気配がないと思いきや突然地震が起きた。

「なんだ！？」

光一はすぐに屋根裏から降りて家の外に出ると皮膚がメタリックブルーで首が長く眼が四対で赤く丸い点が首に並べられた鞭のような尻尾を持つた宇宙怪獣、宇宙斬鉄怪獣ディノゾールが地上に降り立つたのだ。

「怪獣……！」

怪獣が現われ人々は混乱し狭い道や大通りに入つりして一緒の方向へ逃げ出す。

その人混みに光一は流されるように走りだす、ブラックスパークレンズを握つたまま。

そして避難所に到着、その場から街の映像が見れるため見ているとディノゾールと赤と青と黄色の戦闘機が合体したスーパーGUTS

の大型戦闘機ガツツイーグルが駆け付け攻撃を開始する。

だがディノゾールは怯む事無く街を破壊する、その映像と一緒に見ていた他の人々は騒ぎだす、自分の家が破壊されたなどと、自分の居場所がなくなり笑顔が消える、その連鎖が繰り返されており重い空気になってくる。

ガツツイーグルは三機に分離しフォーメーションを組んで前から攻撃を仕掛け後ろへ後退させようどビームを放つていくが結果はあまり見られていない、

このままでは街は壊滅してしまつ。

(こままじや……)

ディノゾールは赤い機体、号を撃墜してしまつ。

光一はそれを見ると体が勝手に動きだし避難所から出て人気がない林の中に自然と向かってしまう。

ブラックスパークレンズを見ると勝手に振り上げてカバーを開いて起動してしまうと一瞬金と白のスパークレンズになった感じがしたが光一は気付くことなかつた、そして黒っぽい光に包まれその場から姿を消すとディノゾールの前に黒いウルトラマンティガ、ティガダークが現れるが黒からすぐにマルチタイプになる。

「つ！」

ティガにいきなり変身してしまったため驚きを隠せず手の平を見て回りを見ると建物が小さく見えていた。

自分が驚いているわけがなく数年前に姿を現しあるウルトラマンと共に怪獣と戦つてすぐに姿を消したティガがまた現れたことに驚きと喜びを人々は露にしていた。

(僕がウルトラマンに……)

だがその隙を、ディノゾールが逃す事はなく細く長い舌の断層スクリューティザーを振るいティガを攻撃しダメージを与えるとその傷から火花が散る。

「グワア！？」

ダメージに膝を地面に付くが立ち上がり、ディノゾールに向かつて走つていくがスクープティザーの速さに為す術なく近付けなかつたがスーパーGUTSの援護により攻撃は止まり接近してパンチやキックを繰り出し攻撃をしていく。

「ハツ！」

長い首を腕で締め頭にパンチを数発食らわし腕を放すと胸部を蹴り、吹き飛ばすとトドメを射そうと腕を後ろに引いてから前に伸ばし交差するとゆっくり腕を広げ白い線が走り、L字に組み白い光線、ゼペリオン光線を放ち、ディノゾールを倒しその場から姿を消すと光一は元いた場所に戻り倒れた、先の戦いで体力を消耗していた、だがそれだけではなく闇を無理やり光に変えて戦ったため必要以上に消耗をしていたのだ。

そして現在……

「それから怪獣と何度も戦つて黒かつたスパークレンズは金になり、ティガダークにならずマルチタイプに直接変身できるように、

「力の使い方を自然に覚えていったのね

「僕にはまだ……」と自信無さそうに言つがレミコアは。

「だけど正しい心を持っていたから力に呑み込まれる事無く戦えたのじゃなくて?」

「もう言わると少し照れます……」

頬をポリポリ指で搔く仕草を見せる。

「すぐに外の世界に帰りたい?」

「親は幼い頃に怪獣災害で亡くして親戚のおじさんは宇宙で研究していますから……スーパーGUTSもありますから、少し幻想郷に興味が

「あら、そう、けど幻想郷にも出るわよ?」

出る、普通なら何がだが先の話をしていたためすぐに怪獣が出るとわかった。

「半年前に色々あつてね、怪獣が現れたのはそれからもっと前だけど」

「もうだつたんですか……」

すると突然ポット等を乗せたワゴンと咲夜が現れた。

「お嬢様、紅茶の時間です」

「あらもうそんな時間」

光一は間が抜けた表情に、なんで、どうして咲夜がこここと。

「私は時間を操る事ができるので時間を止めてここに入つて来たんです」

そう、咲夜は時間を操る程度の能力があり時を止めて気付かぬ間に部屋に、時間を遡る事はできないが時を止めて様々な仕掛けができる。

レミリアは運命を操る程度の能力があり他人の運命が見えたりする。

「すゞーーー（陸あつじが聞いたらすゞく食い付くな）」

友人の名を心中でボソッと呟く、咲夜は紅茶を淹れる準備をしようと。

「こなんにちけー」

早苗が入ってきた、門番は何をしていると聞いた所外を見てと言われ窓から覗くと。

「ジンさんー今は私が勝利をもらいますよー」

「そんなのー万年早いぜ！」

門の前で格闘バカ二人が決闘していた、その隙に入ってきたのだ。

「美鈴……」

頭を抱える咲夜、後でお仕置きと思つていたが。

「それで貴方は何しに来たの？」

「まさしづめティガの事を天狗の新聞で知つて來たんでしょう？」

「言わなくてもわかつてゐるじゃ ないですか」

早苗も自己紹介する。

「ティガはそこの人間よ」

あつさり教えてビックリする光一だが。

「外の世界から来たんですか！？」

「ただけど……」

さつきから外の世界と三回も聞かれて疑問に思いながらも今がどんなものか教える。

「私も外の世界の人間なんです」

「そうなの？」

同じように自分の世界から来た人間がいたことに驚くのだが早苗は小さく「今の外の世界ではないのですが」と哀しげに呴いていたが聞こえなかつた。

「本当はジンさんが行こうと言ったのですが本人がアレなんで……」

早苗にも紅茶を出し再び外を覗くとジンと美鈴がドーボー ボール並みの戦いを繰り広げていた。

(まさか…… 美鈴さん…… 一)

ある考へが過つていた。

(ジンさんと手合わせがまだできてよかつた)と美鈴は心中で付く。

「オラアアアアツ！」

ジンが飛び蹴りするがその足を掴み壁の方に投げ飛ばしたが。

「甘いぜ！」

壁を蹴つて突撃、すれ違いざまに腕を掴んで。

「ヤベツ！」

「キヤーツ！」

掴んで投げようとしたが勢い余つて湖に落ちた。

「あの格闘バカ一人は放つておきましょう」

それがいいと全員同じ考え方で外を見るのやめようとしたら霧が晴れ陸地が見えるとその陸が盛り上がり地底から巨大な姿を見せた。

「怪獣……！」

「アレは……ゴルザ！」

だが光一が知っているゴルザではなくファイヤーマグマエネルギーを蓄えてパワーアップを果たした、黒く赤い血管のような模様が入った筋肉質の体に頭部が硬い甲羅に包まれた超古代怪獣ファイヤーゴルザが現れたのだ。

「まさか……レイが逃がしたゴルザかしら？」

レイとは怪獣を操る事ができる地球のレイオニクスだが今はこの星

にはおらず宇宙にいるためファイヤー・ゴルザはリベンジする相手がない。

「ガゴオオオオオツ…………！」

ファイヤー・ゴルザは目の前に紅魔館が見えたためそれを破壊しようと歩きだす。

「ここち向かつてゐわね」

「向かつてますね」

「そんな悠長な」

三人が向いた先には光一が。

「わかりました」

この場で変身しようとスパークレンズを出すが。

「待つた……ここで変身しないで……ウルトラマンの光は日光と同じだから私灰になっちゃう……」

吸血鬼なため日光はおろかウルトラマンの光は言語道断。

「あ、はい！」

光一は部屋から出て庭に入るとスパークレンズを持った右腕を伸ばし起動させると金色の光が発生し右腕に左手を組み両腕を回してスパークレンズを掲げて光を解放すると光一はティガ・マルチタイプに変身し徐々に巨大化してジャンプしファイヤー・ゴルザに飛び蹴りを放ち吹き飛ばし奇襲に成功。

「ハツ！」

腕を構えるとファイヤー・ゴルザは立ち上がりティガを見ると大昔の記憶が甦つたのか大きな咆哮を上げ怒りを見せる、大昔からゴルザはティガ等の超古代の巨人と戦っているためか同族の記憶があるのだろう。

ファイヤー・ゴルザは額からオレンジ色の光線、超音波光線を放つがティガはジャンプして避け空中で捻るように回転して背後に立つと背中にパンチを連続で食らわすがびくともせず。

「グゴ？」

「グウウ！？」

尻尾で吹き飛ばされてしまった。

「ハツ！」

ハンドスラッシュを放つがファイヤー・ゴルザはそれを吸収すると額から超音波光線を光弾として放ち攻撃、ティガは右に飛び込むように避けて転がり込み立ち上ると額の前で腕を交差し下へ下げるヒーラータイプにチーンジ、力強いパンチを繰り出すが受け止められる。

「つ！」

左手でも繰り出すが受け止められそのまま持ち上げ腕を曲げティガを苦しめるが。

「タアツ！」

胸部を蹴りファイヤー・ゴルザから解放されると両腕を大きく回して「し」字に組んで黄色いゼペリオン光線を発射し誰もが決ましたと思つていたが。

「ガ、ゴオオオオオオツ！……！」

「嘘……？」

「まさか必殺技まで吸収できる体なんてね、あんな筋肉質の体で」「まったくですね」

ファイヤー・ゴルザは必殺技のゼペリオン光線さえまで吸収してしまい超音波光線をもつと強力にして放つてしまいティガはそれを浴びて大きく吹き飛ばされてしまった。

「ジンさんは何してるんですか！」

早苗は外に出て湖の近くでジンを探し回る。

「咲夜、貴方も探してきてちょうだい、あのバカ門番もついでに」「かしこまりました」

咲夜はすぐさまその場から消えジン達を探しに出掛けた。

「…………つ……！」

レミコアはティガとファイヤー・ゴルザを見て表情が変わる、『運命が見えたのだ。』

「まさかこの後に…………」

すると鳥の鳴き声みたいな声が響き紅魔館は揺れる。

「また怪獣……！」

早苗はその空を飛ぶ怪獣を目撃した、それは赤い体に竜のようだが嘴があり両手は鉄のような鎌で翼を大きく広げ大空を切り裂くように飛ぶ超古代竜メルバが来襲したのだ。

（メルバ……！）

ティガ＝光一はかつてメルバと戦つた事がある、その時にゴルザも現れ二体同時に戦い苦戦した記憶がある。

「クオオオオオオン！！！！！」

メルバは眼から赤い光線メルバニックリイを放ち攻撃。

背中に光線を食らい膝を付く、前はゴルザが逃走したためスカイタイプになり倒せたが今はパワーアップしたファイヤー＝ゴルザがいるためスカイタイプでは力負けしてしまい苦戦をかなり強いられる、作戦を一瞬で決めなければならないがその一瞬させ怪獣は与えてくれない。

ファイヤー＝ゴルザの超音波光線、メルバのメルバニックリイが同時に放たれ円形の光の壁ウルトラバリヤーで防ぐがいつまで保つか分からない。

「ジンせーん！」

「見付けた！」

早苗はまだジンを探していた、そして。

水面を大の字で浮いて流されてるジンと美鈴を見付け取り敢えず助ける。

「ジンさん起きてくださいー寝てないでー。」

バシンバシンと頬を叩いてるとジンは目を覚まし起き上がる。

「アレ?俺何してた?」

「何言つているんですか、怪獣がウルトラマンと戦っていますよー。」

「マジで!?

その方向を見るとティガが一大怪獣に苦戦しているのを目撃。

「これはヤバいな

左腕に嵌められている三つの菱形の青い宝石が埋められた金のブレスレット、ウルトラゼロブレスレットからメガネのようなレンズがオレンジのウルトラゼロアイを出し。

「デュアッ!」

それを着眼、すると回りに一つのブームランが乱舞して頭から姿が変わつていき二つの眼に緑色のビームランプ、銀のプロテクターにカラータイマー、赤と青に銀色のラインが走りブームランが頭に装着されると腕を曲げて巨大化しウルトラマンゼロに変身を完了すると同時にファイヤーゴルザとメルバに炎を足に纏つた飛び蹴りウルトラゼロキックを炸裂し一大怪獣を蹴り飛ばす。

「君は……」

「俺はゼロ、ウルトラマンゼロー・セブンの息子や」

「ウルトラセブンの……！」

ウルトラセブンはかつて地球を守っていたウルトラマンでかなりの実力の持ち主、ゼロの父親である。

「それはいい、アイシラを倒すぜ！」

「うん！」

ティガは体勢を立て直して腕を構えるとゼロも左腕を伸ばし手の平を広げ右腕を拳にし後ろへ引く拳法の構えをするように構える。

ゼロはメルバ、ティガはファイヤーゴルザに挑む。

「デリヤアアアアッ！…！」

まずゼロはメルバに飛び掛かり取つ組み合いとなり左手で首根っこを掴み右手で殴り付けていく。

「デュアッ！」

手を放し腹部を右足で蹴り、そして左足を高く上げて回し蹴りをメルバの頭部に決める。

「クエニーニッ！？」

横を向くと左腕を両手で掴み背負い投げの要領で投げ背中から地面に落とすとその腹部に踵落としを叩き込むと首を掴み体を回転しじヤイアントスティングを繰り出し再びメルバを投げ飛ばし、投げ技で攻めていく。

「ハツ！」

ティガは飛び掛かり勢いの付けたチョップをファイヤーゴルザの右肩に、そして右左とロー・キックを筋肉質の太い足に食らわしていく。

「タアアアアアアアツ！……！」

そしてファイヤー・ゴルザの胸部にエネルギーを拳に貯めて放つティガ・電撃パンチを打ち込み火花が散ると更に足にエネルギーを貯めて炸裂するティガ・電撃キックを繰り出しましたもや火花が散ると。

「ハツ！…」

ティガ・電撃キックを回し蹴りで使用し頭部に食らわしファイヤーゴルザは横に倒れ立ち上がるが前めりになつていて頭部にウルトラかかと落としを肩に打ち込むと顔面から地面に激突。

「フウウウウン！……！」

そこでファイヤー・ゴルザを頭が下になるように持ち上げ、一気に地面に叩き付けるウルトラヘッドクラッシュヤーを炸裂！

ファイヤー・ゴルザの頭は地面に埋まってしまい足と手をばたつかせる。

メルバも逃げようと翼を広げ飛び立つが、ゼロはカラータイマーの左右に頭に付いたブーメラン・ゼロスラッシュガードを装着し青白く光りだし両手を左右に平行に広げるとそれから青白い光線が放たれる。

「逃がすか……よつ！……！」

必殺技ゼロツインショートを発射、光線はメルバを捉え一直線に向

かつていき、メルバを光線が貫き、空中で爆散した。

「ハツハアアアアア…………！」

両手を広げ手の平に赤いエネルギーを貯めていき大きく回し胸の前でエネルギーを圧縮し左腕を拳にし曲げて右腕を伸ばし赤いエネルギー光線、デラシウム光流を放つ、光線はファイヤー・ゴルザの腹部を貫き、命中した場所から火花が散り、ファイヤー・ゴルザは大爆発した。

「デヤツ！」
「ハツ！」

ティガとゼロは空へ飛び消えていった。

「ジンさん、格闘バカ過ぎますよ？」
「すみません……」

先の対美鈴戦で遅くなったり探したりするのが大変だったため怒られてる。

「貴方は仕事サボって何決闘してるのよ
「『』めんなさい」

こつちは決闘で仕事忘れてまんまと早苗に入られので怒られてる。

「取り敢えず貴方どうする？幻想郷にいるなら紅魔館住む？」

「いいんですか？」

「ええ、貴方仕事できそつだから咲夜の補佐してもらいたいのよ」

レミリアの目には狂いがなかつたり、光一は一人暮らしが長いためバイトも色々こなしており大学にも通える頭のため人並みに働けるぐらいの能力だった。

「そしたらお言葉に甘えて……」

いつして紅魔館にお世話になる事になったのだった。

To be Continued...

EPISODE 02 光を継いだもの（後書き）

ファイヤー・ゴルザとメルバの組み合わせは大怪獣バトル ウルトラ
アドベンチャーからです。

次回はあのバカが登場するのですが変身者がオリジナルで原作ダイ
ナなのですが。

次回予告

スバル

「ネオ・マキシ・マオーバードライブの領域、越えます！」

ダイナ

「アレは……ゼロドライブ航法じゃねえか……！」

映姫

「近くまで参りましたので」

紫

「それはどうも」

小町

「四季様、アレ……」

スバル

「見たかあ！俺の超ファインプレー！」

次回【EPISODE 03 もう一つの光】

EPISODE03 もう一つの光（前書き）

今回はえーきさまが登場～、説教されたいなあー（笑）
そしてあのバカも登場！

登場怪獣

超合成獣ネオゲランダ

登場

外の世界の宇宙、太陽系外の外宇宙の宇宙開発に積極的に関わる組織ZAP SPACYとスーパーGUTSが協力して小惑星に設置された宇宙ステーション、イカロス³。

そこではネオマキシマエンジンに変わるエンジンの実験を行つている。

そして今も、その実験機のテストパイロットが宇宙を駆けようとしていた。スーパーGUTSに入隊するため訓練学校に通つていたのだがZAPから引き抜かれテストパイロットをやつている頭にバンダナを巻いたジングウジ・スバルはその実験機は動物でいうイカに形が似た灰色で青と赤のラインがコツクピットに沿いV字に流れ真ん中辺りから後部に掛けて尾翼が付いた機体ガツツウイング・ゼロの可変翼が展開されているのを閉じスタンバイモードとなつたのに特殊なブースターを後部に装着したスノーホワイト・ゼロに乗り準備をしていた。

「これがこうしてこうなつて……」

整備士の技術もかじつているため機体のシステムのセッティングをするのは馴れていた。

【スバル】

「あ、ムサシ」

モニターにスバルと同い年の茶髪で青を基準にしたZAPの制服を着た青年、春風ムサシが映し出された。

「どうかしたか？」

【出撃前にアレなんだけど……光一が行方不明になつた】

光一は一人とは幼なじみであり仲がいい。

「なんだって！？」

【悪い、だけどこれは伝えておかぬきやいけないと思つたから】

ムサシは昔から宇宙に携わる仕事に就きたいと夢を見てZAPの訓練学校に、成績は優秀だったためすぐにイカロス3のZAP隊員となれた。

「サンキュー・ムサシ、だけど見送りは可愛い娘が良かつたなあ～」

【相変わらず女の子好きだなあ……】

「まあな～」

ゲラゲラ笑いながら返すと出撃の時間となり。

「じゃあそろそろ行くわ

【ああ】

スバルはヘルメットを被り酸素マスクを装着しコックピットを閉め整備員の指示に従い機体を移動させカタパルトに着くと機体を固定させる。

整備員は退避するとスバルはシステムを一つ残してすべて起動、ハ

ツチが開き。

「スノー ホワイト・ゼロージングウジ・スバル、発進します！」

ブースターに火が点火しスノー ホワイト・ゼロは発進し隣にスノーホワイト・ゼロと同系列の機体が並んで飛行する。

宇宙ステーションの近くにある光が飛んでいた、光の中には赤と青、額にティガのように菱形の、回りが金色の淵に囲まれたダイナクリタルが付き、胸に銀で大きい金色に塗られた溝が流れるプロテクター、その中心にカラータイマーが付いたウルトラマン、ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプが飛んでいた。

「まったく……参った参った……次元震が起きたと思つたらギヤラクシークライシスが起こつたなんてなあ」

少し人間臭いがダイナの変身者も人間なため仕方ない、更には元の世界では行方不明扱いで異世界に流れ着き旅をしていたが光の国に寄つた際にギヤラクシークライシスが起きたと聞き地球へ向かつていた、その元の世界がこの世界と融合したと知り。

「まさかこんな形で帰れるなんてな……リョウ、みんな、待つてろよ……アスカ・シンがすぐに帰還するぜー！」

ダイナは更に飛行速度を加速し地球へ向かうがそこであるものを曰にした。

「アレはスノーホワイトか…………」

その機体はよく知っていた、ガッシュウイング1号の宇宙用の実験機だからだ。

「ネオマキシマ…………まさかな」

ダイナは引き返しスノーホワイト・ゼロに着いていく事に、だが同じように後を着いていくものが…………

【では始めてくれジングウジ】

「ラジヤー！」

まずはネオマキシマエンジンに切り替えそれを起動しブースターを温め飛び続けると。

「ゼロドライブ、起動しますー。」

そしてネオマキシマを越えるゼロドライブエンジンに切り替え、ダイナはそれを見て。

「ゼロドライブ…………！」

かつて自分もその実験機に乗った事があつたなと思いながら追い掛けているとスノーホワイト・ゼロは更に加速していきネオマキシ

マの領域を越えてゼロドライブの領域に達しようとしたその時。

「ガシャアアアアアアツ－－－－－－！」

「つ！」

その後を追う怪獣が現れた、それは青い皮膚が外骨格に覆われ左右の肩から伸びた羽根を展開した宇宙有翼骨獣ゲランダが現れたのだが。

「ゲランダだつて！？」

スバルもゲランダの存在に気付き実験の中止を命令されるがゼロドライブのエンジンを停止したら追い付かれ命の保障がないと思ったその時。

「ジュワッ！」

ゲランダを光が吹き飛ばした、そこに駆け付けたのはウルトラマンダイナ・フラッシュタイプだった。

「まさか…………あの…………伝説の…………ウルトラマンダイナ！」

ダイナが駆け付けたのにホツとし戦闘区域から離脱するためゼロドライブのシステムをゆっくりと落としていく。

「デュワッ！」

ダイナとゲランダは飛行しながら激突するがゲランダはしぶとくスノーホワイト・ゼロを追いかけるため距離が離れない。

(しふてえーな!)

青い手裏剣光線ビームスライサーを放つがバリアで防がれた。

(つー今のは……亜空間バリヤー……!)

普通ではあり得ない能力を持っていたためダイナは驚く。

(スフィア……)

それは宇宙球体スフィアが何かに取り付き得るバリアなため、だがスフィアの親玉グラントスフィアはダイナが倒した、その生き残りと判断し必殺技を放とうと腕を十字に組むが。

(コイツのバリア破つてもコイツが効くか微妙だな……)

だがかつてゲランダと戦った事があり必殺技を放つたのだが倒せずある戦艦が倒した事があり事実上ダイナはこの怪獣に勝った事がない。

スフィアが合成した事によりゲランダは超合成獣ネオゲランダとなつていたのだ。

スフィアは人類が外宇宙に行くのを良く思つておらず全生物を一つにするという野望を持ち行動していたためこのゼロドライブの実験途中のスノーホワイト・ゼロに襲い掛かったのだろう。

「人類の夢の邪魔をさせてたまるかああああああつーーーーーーーーーー

腕を十字に組み青い必殺光線、ソルジエント光線を発射するが亜空間バリヤーで一瞬だけ防ぐが撃ち抜かれゲランダに命中し爆発し炎が巻き起こるがその中から赤い光線ジービームを放つゲランダ。

「うわああああああっ！…………！」

光線はスノー・ホワイト・ゼロのブースターを纏め火花が散り制御不能となる。

「しまった！」

ダイナは腕を胸の前に交差しプロテクターがなくなり銀と青、ダイナクリスタルも青くなつた超能力戦士のミラクルタイプにエンジンするとスノー・ホワイト・ゼロの元にテレポート。

（パイロットは……）

高速で飛んでいたからか光線が纏めた機体の衝撃が強かつたのかスバルは氣絶しておりシステムのチェックすらままならず。

（仕方ねえ！）

ダイナは光に包まれると粒子となりスバルの体に纏うと光は消え、スバルは目を覚ますがこれはダイナが憑依して体を動かしているのだ。

「えっと……新型かよ……『イツの記憶探るか！』

Dスバルはスバル本人の記憶を見て新型の操縦の仕方を覚えると操縦桿を右手で握り左手でシステムをチェック、エンジンを落とそうとするが後ろからネオグランダの追撃が。

「スファイアの奴しつけえな！」

振り切らつとあるシステムを起動させた。

「取り敢えず振り切る！停止したら近くのNAPに拾つてもうれば！」

ゼロドライブを起動させ再び加速、ネオゲランダもそれにしぶとく着いていく。

「いけええええつーー！」

そしてゼロドライブで入れる光の空間に入るがネオゲランダも入つてしまつ。

「ガアアアアツ！」

再びジービームが放たれブースターに命中してしまつ。

「やべつー！」

完全に制御不能に陥つたスノーホワイト・ゼロは暴走し光の空間からネオゲランダと共に姿を消した、いや、この宇宙から姿を消したのだつた、まるで神隠しにあつたよつに……

幻想郷のハ雲邸の近くの森の中では。

「四季様～待つてくださいよ～」

その中、赤っぽい髪の毛を左右小さくツインテールになつており江戸時代の服装みたいな服を着て鎌を持っていかにも死神つか死神の小野塚おのづか小町こまち、名前から女性であるのは明白。

「これでもゆっくり歩いていますが？」

緑色の髪の毛で黒金白と少し田立つ帽子を被り紅白のリボンを付け紺色を基準にした服装の四季映姫しきえいき・ヤマザナドウ、彼女は幻想郷の地獄の閻魔で死者を裁いたりするのが仕事、ヤマザナドウは役職名で幻想郷の閻魔という意味。

二人は普段は忙しいがたまたま休みだつたためもあるがハ雲邸、紫に用があつたりもする。

因みに小町は三途の川から地獄まで魂を運ぶ水先案内人だがサボるためほとんど映姫に怒られてる。

「最近幻想郷が変だと感じませんか？」

「え？ それは前からですけど……確かに最近はすぐ……それには」

一度区切り真剣な表情に。

「半年前、破壊神と次元神が現れるなんて……」

死神も神のためザギとノアの事は詳しきは知らないが名前だけは知つていた。

「ええ、それと怪獣が多く現れるようになつた、少しハ雲紫が絡んでいるのではないかと思ったのでそれを確かめに」

「そのためにあたい達の休暇は潰れるんですね……とほほ……」

中間管理職の悲しき定めなのか、映姫は実に眞面目なため休暇を返上しても真相を確かめにと同時に説教もしにハ雲邸へ向かうのだった。

そして歩いてるその時！

「退いた退いたあ～！」

「ん？ わつ！？」

一台のマウンテンバイクが一人の間を通過した、カズキが確実に乗つていた。

「危ないな～もう、アレ確かに外の世界の乗り物のマウンテンバイクですよ」

「本当に危ないですね、アレに乗つたものを後で見付けだしてお説教を」

少し氣の毒に思つ小町だった。

そしてハ雲邸。

「今回はどう言つたご用件でしょうか？」

紫が居間で対応していた、紫の式神の狐の妖怪で狐耳に帽子を被つたハ雲藍はお茶を出していた。

「近くまで参りましたので」

完全に嘘であったがそれぐらい見通せるし用件は何かわかつていたが。

「それはどうも」

一応返した、するとやはり怪獣などやノアやザギの事を聞かれたため、どうせすぐバレるなら話した方がいいだろうと、だが少し待つてもらう事に、その話をするためにある人物が帰つてくるのを待つ事に、すると。

「ただいま！」

大きなブレーキ音に土煙を上げてマウンテンバイクを横にして停車させるカズキが藍の式神の化け猫の少女の猫耳で帽子を被つた橙を抱いで帰つてきた。

「橙えええええええええん！…………！」

そこで藍が大きく反応、橙が帰つてくるのが遅いと心配した藍が力ズキを探すように頼んだのだ。

「藍しやま～」

「橙！どこにいたんだ？心配したんだぞ～」

藍は駆けてくる橙を抱き上げホツとする。

「じめんなさい、行つたことない道に入つたら迷子になつて……」

「橙が無事でよかつた、カズキ様、ありがとうございます」

「いひつて」と返したら藍と橙は紫達の邪魔にならないため別室に入つたのだった。

「つてあれ？そつちの二人どこかで…………」

一瞬だつたためか顔までは覚えていなかつた。

「さつきそれであたい達にぶつかり掛けたよね？」

二人はマウンテンバイクがあるからすぐにわかつた。

「あ、そういうば」

それを聞いた紫は少しまずいと思つた、実は紫は映姫が苦手である、生真面目、説教魔、理屈っぽい等々が、マウンテンバイクでぶつかり掛けたなんて言語道断、説教対象に。

「そこ」の貴方、上がつて正座して座りなさい」

「え？」

「いいから座りなさい」

「あ、はい」

言われた通り上がり正座して座る。

「貴方は一体何を考えているのですか？あんなものでぶつかつたらどうするのですか？」

目を瞑りながら説教が始まった。

10分後……

「だいたいあんなものが……」

更に20分後……

「ガミガミ」みごみ

そして更に30分後、説教が始まり一時間は経つた。

「それでもつて、いつでつて、聞いてます？」

時間が経つたなと思い目を開けると。

爆睡していた。

寝るなああああああああああああああああああああ一つ……！

1

その事に更に激怒、長くて小町と紫も一緒になつて寝ていた。

「あ、ごめんなさい」「あなたの方もですか八雲紫、小町」

怒りと呆れに見舞われため息を吐くと少し落ち着いて一時間前に話していた話題に戻す事に。

「はあ……まつたくあなた方は」「ストップストップ！また話が戻る！」

そこでカズキがストップを掛けて映姫も確かにと我に返る。

「それでこの二人誰！？」

カズキにはまだそこからだつた、映姫と小町とは面識がないため無理もない。

説明のため軽く10分経過……

「閻魔様と死神かあ……」

ちゃんと理解したみたいだつた。

「それで、アンタ誰なんだい？」
「俺は八雲カズキ」
「八雲つて……ええ！？」

同じ名字、血縁者か何かなのは明白。

「貴方はいつから子持ちになつたのですか？」

「軽く20年ぐらい前?」

取り敢えず20年ぐらい前にカズキを産んだと説明、更に父親は宇宙警備隊隊長のウルトラ兄弟の長男ゾフィーとの間の息子と捕捉。

「あの方の……」

映姫もゾフィーもこの事は知っていた。

「頭に炎が燃え上がつた事や捏造した事は?」

もちろんそんな事は父親にしかないほとんどない。

「隠し子に近い感じに外の世界で育ちましたから~」

「後でもう少し貴方と話さないといけない事が……また言つと話が脱線したままになりますので戻します」

また説教かと思いホツとする三人。

聞かれた事は怪獣の大量発生やザギギやノアの事を聞かれ正直に全て話した、外の世界はこの幻想郷が知る世界ではなく多元世界となり遙か未来となつてしまつた事も。

「そうでしたか」

「あたい達が知らない間にそくなつてたなんて……」

事の大きさに驚愕する一人。

「幻想郷と八雲カズキ等の幻想入りしたもの達は戻れなくなるタイミングスリップをしてしまつたと」

その簡単に纏めた今の状況を述べる映姫の肯定するように頷く。

「アンタも大変だつたね」

「まあ……もひ……気にしてないから」

間が空いて言つてはいるため結構気にしており未練があるみたいだった。

「ちょっと藍と橙の所行つてて」

「う、うん……」

やはり今の話はキツいと思つていたが当事者もいた方が進むと思つたのどどのくらい立ち直つたかを確かめる意味も込めて参加させたがまだ早かつたと自分を戒める。
カズキは別室に行き席を外す。

「アレでもマシにはなつた方なんですよ?

多元世界になつて自分の時代の世界に帰れなくなつた時の荒れようなんて……」

「わからぬもないですが」

「明るく振る舞つても内心は未練と外の世界はどんなのだろうと考えていますから」

カズキの心境について話していると小町は外を覗き空を見上げると。

「四季様、アレ……」

一人も空を見上げるとそこには黒い雲の渦、どこかどこの空間を繋げるゲート、ワームホールが開いていた。

「多元世界となつて次元が不安定になり幻想入りする外の世界の人間が増えた、そういうわけですね」

「はい」

するとワームホールの中から一機の機体が、それは宇宙で行方不明となつたスバルが乗るスノーカーボード・ゼロだつた。

「どうするどうするどうするー。」

Dスバルは焦つていた、昔自分が乗つた機体とは違つシステム等が搭載されているため使い方がわからなかつたのだ。

「機体は昔のなのにシステムは最新型つて！」

このままでは墜落して大惨事となる、そこで。

(体を俺に返せ！)

スバルの意識が戻つたのだ。

「お前、意識が」

(ああ、だから体を、「コイツの事は俺が一番よく知つてゐるー。」)

「わかつた、頼むんだぜ、お前の名前は？」

(ジングウジ・スバル、アンタ、ウルトラマンダイナだろ?)

「話が早くて助かる！」

ダイナはスバルの意識に体を返すと意識が戻ったスバルは凄まじい速さでシステムをチェック。

「機体本体に問題はない…………ならブースターを切り離せば…」

そして、ブースターを切り離すコードを入力すると実験用のブースターは切り離されガツツウイング・ゼロとなり可変翼が展開しスタンバイモードから高機動モードになり墜落していたが一気に急上昇し飛翔する。

「見たかあ！俺の超ファインプレー！」

（あー！俺の台詞うーー！）

ガツツウイング・ゼロは水平に飛行しスピードを落とす。

（お前すぐーな）

「整備士の技術も少しかじつてたからな、システムのチェックと機体の動かし方はバツチリ覚えてるツスよ！」

適当な場所を見付けV-TOL機能でその位置に浮遊すると下部から車輪が三つ出て着地する体制に入る。

（そうだお前、なんでこんな古い機体使ってるんだ？

ゼロドライブの実験機のプラズマ百式があるはずだぜ…）

「俺、このガツツウイングが好きなんツスよ、無理言つてこれを使わせてくれつて頼んだんす」

（気に入ってるからか……わかつた、当分はこのままがいいな、状況が把握できてねえからな）

「当分よろしく、ウルトラマンダイナ」

ガッシュウイング・ゼロは地上に着陸、マスクやヘルメットを取り口ツクピットを開け外に出る。

「てか」「どう？」

辺りを見渡すが回りは木ばかりだった。

「地球に似た景色だけどこんな場所数少ないはずだぜ？」

「どこにいるか確かめようとしたがエラーが出て場所がわからずじまい。

（降りて、探索してみよーぜ）

「賛成」

スバルは後部座席からガッシュブラスターという光線銃と一つのケースを持ち口ツクピットを閉じて降りる。

（ガッシュブラスターか、まだ使ってんだなスーパーGUTS）
「主力の一つスから」

ガッシュブラスターを手に持ち辺りを警戒しながら歩くスバル。

「何が出るんだ……出るなら可愛い女の子が～」

（お前、女好きかよ）

「それが健全な男子の性ツスよ」

ダイナは確かにと思いつつ、自分も何かいかないか警戒して見ていく
と。

(スバル、何か来る)

「え？」

草が揺れる音が聞こえてきてその方向を向きガツツブラスターを構える。

「何が出る？怪獣？化け物？妖怪？それとも…………」

ほとんど同じ意味の言葉だが気にせず引き金に指を掛けると。

「この辺りですね」

と出てきたのは映姫だつた、それに対しスバルは。

大声を出して大いに喜んだのだった。

To be Continued.

EPISODE 03 もう一つの光（後書き）

長くなりそうだったので一話構成に、前回も一話構成にすればよかつたあ…………！

最後なんかフォーゼっぽい事を（笑）

スバルの元ネタはスパロボのタスク・ジングウジと流星のロックマンの星河スバルで性格はタスクとリリなのスバル・ナカジマ似でバカで女好きです。

ダイナは憑依します、もちろんアスカが。

スフィアはギヤラクシークリイシスにより生き残りが何体か紛れ込んだためゲランダに取り付いてネオゲランダとなりました。

次回予告

映姫

「貴方はなりふりかまわず…………」

スバル

（説教臭くて堅物な女の子…………結構好み！）

カズキ

「外の世界…………」

ネオゲランダ

「ギシャアアアアアツ…………！」

スバル

「本当の戦いは……」

ダイナ

「これからだぜ！」

次回【EPISODE 04 目覚めよスバル】

お楽しみに！

EPISODE 04 目覚めよスバル（前書き）

なんか全然タイトルとは違う内容に。

登場怪獣

超合成獣ネオゲランダ

登場

EPISODE 04 目覚めよスバル

「可愛い娘キセー！一度も言わなくていいです！」すみません

なぜか前回叫んだのにもう一度叫ぼうとしたため映姫に止められた
スバル。

「何ですか？いきなり見た瞬間大声を上げて、初対面の方と出会つたらまずは自己紹介、それが基本ですよ？」

「あ、はい」

「少しそこに正座して座りなさい」

言われた通りに正座するとやはりお説教が始まった。

（10分後）

「だいたい最近の若者は…………」
(オッサン臭い説教だな~可憐この辺)

～20分後～

「といふことありがたいのですよ」

スバルは映姫の説教を一いやいやしながら聞いてる、注意しないのは
目を閉じてるからだ。

そして30分後とやはつまた一時間経過した。

「どうわけでして……ん?」

そこじよりやく田を開けスバルがニヤニヤしているのに気付く。

「私は漫才しているつもりはないのですが?」

「いやあ～こんな美人さんに説教してもらえるなんて」

「…………ありがとうございます、ですがそれとこれとは話は別ですよ?」

間が空けてから礼を言つたがそんなので騙される閻魔様ではなく再び説教が始まろうと、これにはさすがのスバルも驚いていた、大抵なら美人とか綺麗とか言えば話は逸れるが映姫は違つた。

(まさかコロッと騙されないなんて…………しかも性格キツくて説教臭くて美人、俺好み〜)
(お前…………)

スバルと同化したダイナは半ば呆れていた。

「それで貴方…………えっと…………」

説教始めたがいいが名前聞いていなかつた。

「あれれ?自分がまずは自己紹介つて言つたのに俺から言わせようとするんッスか〜?」

「揚げ足取らない!」

恥ずかしそうに怒鳴り少し落ち着いて自分の名前を教えスバルも教えた。

「では話の続きを…………」

「俺に発言権なし！？」

そろそろ飽きたため自分からも話そうとしたがまた始めようとしたが口を挟んだ。

「忘れてました、貴方は外来人ですね」

「いや、俺日本人……えーきちゃんも日本人でしょ、名前からして」

「えーきちゃん……まあいいでしょう」

映姫は幻想郷について説教を交えて説明を始めた。

「なるほど…………てことは…………地球…………」

光の空間の中で突然消えたと思ったらワームホールから飛び出して幻想郷に着いたのかと確信した。

「物分かりが早くて助かります、なので貴方は早く外の世界に帰るべきです」

「た、確かに…………」

帰りたいのだが目の前の美人を放つておくのは勿体ないなと思つていたりしダイナにまでバカ呼ばわりされていた。

そこでやつと第三者が会話に入ってきた、それは小町だった。

「四季様～、もしかしてアレに乗つていたのって？」

「彼みたいです」

正座してるスバル見て説教されたなとわかり苦笑するが。

「うつひょ！また美人！」

「あたいの事かい？嬉しい事言つてくれるね～」

小町とは馬が合つようで会話が弾もうとしたが。

「貴方達……」

「ヤバツ……四季様キレた」

小町の経験上キレたらいつもより長い長い説教が始まるだろうと悟るが逃げれるわけもなく説教が始まってしまった。

その頃ガツツ・ウイング・ゼロの元にカズキがやつてきていた、スバルを見付けるよりも先にそっちが見付かったのだ。

「これが未来の世界の機体か」

正確には異世界なのだがカズキに取つては未来だった、機体の装甲を触り考え込み、そして思う、外の世界に出てみたいと、だが複雑だった、変わってしまった古巣に戻る勇気が出なかつたのだ、怖くて。

「やつぱりまだ幻想郷に居た方がいいか」

まだと言つには出る氣はあるがそれがいつになるか誰もまだわかつていない。

「カズキ様」

後ろに藍がやつてきた、一緒にガツツウイング・ゼロとそのパイロットであるスバルを探していたのだ、紫は嫌々だが映姫の言つ事は逆らえず探している。

「藍……」

「どうかなさいましたか?」

ガツツウイング・ゼロがある方を振り向いて表情を隠す。

「何でもない…………何でもな…………」

前を向くつとすると急に抱き締められた、少し懐かしい感じもした。

「ゆうべつでいいんですよ…………焦らずゆうべつ」

藍にはわかつっていた、カズキが焦つていると。

「ありがと…………」

それから離れると。

「昔これでもカズキ様が赤子の頃抱いた事があるんですよ

「だから懐かしいと思つたんだ

納得した、自分のその気持ち。

「では行きましょうか、四季様がこの機体のパイロット見付けたみたいなので

「うん」

二人は映姫やスバルと小町がいる八雲邸へ向かつた、ここに来る前藍が合流したから来るよう促したのだ。

「というわけなんす」

幻想入りする前自分が何やつていたかを話すスバル、中にはダイナの事も出てきたが今自分の中にいるとは言つていない、言おうとしたがダイナに止められたからだ。

「ウルトラマンダイナか…………」

「聞いた事ないっすか？ちょっと前に世界救つて行方不明になつたウルトラマンですよ」

カズキ達が知らないのは無理もない、元々この幻想郷は普通だったり100年昔の存在だったはずなのだから。

「まあいいっす、取り敢えず帰してもらえますか？」

「そうですね、というわけでハ雲紫、彼を外の世界の宇宙に……

…

映姫は言つが紫は少し何か言いにくそつな顔だつた。

「申し訳ないのですが……………この時代の外の世界の地名も覚え切れていないので……………宇宙は一応行けますがちょっとですね…………」

宇宙には少し因縁があるらしく映姫はそれ語る、だが宇宙や地球に何があるかもまだ把握していないためせいぜい地球か宇宙のどこか、帰したら迷子になつてしまつ。

「そんな~」

この時代という言葉は反応しようと思ったが宇宙には帰れない事が分かり落胆していたのだが。

(まあもう少しじこに居れるのか……)

少し嬉しそうだった、紫、藍、橙を見て確信したのだ、この幻想郷には美女、美少女がたくさんいると。

(上手く行けばハーレム完成するんじや)

顔がニヤついていた、それを映姫が見て。

「よからぬ」と考へてますね?」

「ギクッ!」とお決まりの声を上げ一瞬にしてバレ。

「もう少しありがたい言葉を聞かせた方がよろしいでしょ?」

スバルは墓穴掘つたと思いながら説教を受けようとしたその時だつた。

突然何かがすごい早さで突っ込んできた。

「文ー?」

それは鴉天狗で文々。新聞を発行している射命丸文しゃめいまるあやだつた。

「カズキくん大変です!里の上に怪獣が!」

「なんだって!?」

スキマを使い人里へ行く事に、スバルが軽く驚いていると文もその後を着いていく。

「小町、私達も行きますよ」

「やつぱり」

映姫と小町もスキマを通り人里へ。

「怪獣…………まさかな」

ある考へがあつた、自分も幻想入りしたのならば襲つた怪獣もして

いるのではないか。

「俺もちよつと行つてきますー。」

スバルもスキマに入つていった。

「あらあら、元気いいわね～」

紫は残るのだった。

そして人里、上空を飛んでいたのはやはりスノーホワイト・ゼロを襲っていたネオグランダだった。
ネオグランダは品定めするかのようにどこから襲うか円を描くように飛んでいた。

「ありやモネラ星の怪獣じゃねーか？」

ジンは上を見上げネオグランダを見ているとカズキ達が到着し合流
しスバルを見る。

「ん？お前…………まさか」

「な、なんだよ？」

「…………今はいいが、ベリアルの件以来だな」

それを言つたためスバルの意識下のダイナはジンが誰かわかつたの
だった。

気付けばカズキはおらず上空にネクサス・アンファンスが飛んでいた。

「アレは……ウルトラマンネクサス！」

その名を叫ぶスバル、ネオグランダはネクサスに気付き襲い掛かる。

(ジュニッスプレイブ……いや！)

ネクサスは青く腰の辺りに銀のファッシュョンタトゥーが流れるスピードとテクニックが向上し右腕にアローアームドネクサスが着いたジュニッスブルーにスタイルチエンジ、ジュニッスプレイブは本物のネクサスと同化していたため他と同じように使っていたが本物のネクサスと同化を解いたため大量の消耗が激しくなっているのだ、ジュニッスやジュニッスブルーは普通に使える。

(これなら素早く攻撃できる！)

ネクサスは手裏剣光線パークリューフェザーを連射するがネオグランダは亜空間バリヤーを張り攻撃を防いでしまった。

(なんだと！？)

想定外のため動揺を隠しきれず突撃するがネオグランダのジークームが迫る、避けようとしたが里に被害が出るためサークルシールドで防ぎ再びパークリューフェザーを発射するが防がれる。

(予想外だつた！まさかバリヤー使うなんて)

ネオゲランダは突撃し羽根でネクサスを切り裂く。

「ヴワアー！？」

体に火花が散ると今度は逆方向から突撃されまた羽根で切り裂かれる。

「ハアアアアアア…………！」

光線を放とうと両手の間にエネルギーを貯めていくがジービームによる強襲を受け妨害されてしまつ。

「ネクサス大丈夫かよ…」

地上のスバル達は不安になつていて、このまま負けるのではないかと。

（おいスバル！）

（ダイナ？）

ダイナに話しつけられるスバル。

（すまない、俺はこのまま黙つて見ていらざができない）

（まさか……俺にダイナに変身して戦えとか？）

しばらく黙り込むため当たりなのだろう。

（そりゃいきなりウルトラマンになつて戦えなんて嫌だよな……
やつぱり俺が分離して）

ダイナの考えは早く変身して戦つた方が無駄な時間使わなくていいと思ったからであるが、だがそんな了承してくれるわけないと思いつたから離れようと意識を集中しようとしたが。

(いい、戦わせてくれダイナ)

(スバル?)

思つても見なかつた答えが返つてきた。

(俺も)のまま見て『いるなんてまっぴら』めんや)

スバルは女好きだが正義感は常人より遙かにあつた、見ているだけは自分の心が許さなかつたのだ、焦つてきたためガツツウイング・ゼロはハ雲邸の近く、なら自分がすぐに戦うためなら。

(…………すまねえ、恩に着る)

(いいや、宇宙で助けてもらつたからな!)

スバルは決意、すると手に光が集まり茶色く顔が彫られたアイテム、リーフラッシャーに構成され握られる。

「スバル、それは一体?」

映姫に質問されるが。

「そんな事は後!」

「…………カズキを頼んだぜ、ウルトラマンダイナ」

ジンはわかつていたのだ、スバルの中にダイナがいたのが。

「ウルトラマンダイナって……！」

スバルは前に出てリーフラッシュジャーを強く握る。

「本当の戦いは……！」

リーフラッシュジャーを持った腕を下げる。

「（）からだぜ！（）」

意識下のダイナも共に叫ぶとそのまま腕を振り上げ。

「ダイナアアアアアアアアーッ！－！－！－！－！－！」

リーフラッシュジャーのクリスタルが開き光に包まれるとその場から飛び立つ。

「ギシヤアアアアーッ！－！－！－！－！？」

光はネオゲランダを吹き飛ばし巨人の姿、ウルトラマンダイナ・フラッシュタイプの姿となる。

「ウルトラマン！」

「お前がネクサスだつたなんてな」

始めてスバルがダイナに変身しているとわかり驚いているとネオゲランダが体当たりを仕掛ける。

「ショワッ！」

ダイナはフラッシュ光弾という光線を放つが亜空間バリヤーに防がれてしまふが諦めなかつた、今の自分はウルトラマンだと言い聞かせ。

(まだまだ!)

青い手裏剣光線ビームライサーを連射する、亜空間バリヤーに防がれるがそこが狙いだつた。

「シエアツ！」

そこにネクサスが回転キックを背中に仕掛けネオグランダに初めてダメージを与えると同時に赤い力のジュネッスにスタイルチェンジする。

(行くぜスバル！)

(やつてやるうぜカズキ！)

二人のウルトラマンは突撃しネオグランダの体にパンチを繰り出す、亜空間バリヤーを張るがそれさえ破りダメージを与えて殴り飛ばしそこにパーティクルフェザービームライサーを打ち込み追い討ち。

「アレがウルトラマンの力」

「そうさ、最後まで諦めなければウルトラマンは不可能を可能にする！」

ジンも続いてゼロに変身、ネオグランダに急上昇しながらウルトラゼロキックを打ち込む。

(お前やつきのー!)

(おひー！俺はウルトラマンゼロ、セブンの息子だ！)

やはりダイナもティガである光一と同じ反応、ネオゲランダはジービームを放つがダイナのウルトラバリヤーで防がれる。

(合体光線でバリヤー打ち破るぞー！)

((ああー！))

ゼロは左腕を横に水平に伸ばし右腕の拳が光る。

ネクサスは腹部の前で両手を交差し拳が上に向くように曲げその間に青い稻妻が走り両手を挙げるとアームドネクサスに青い光が纏う。

「テヤツ！……！」

「シヨアツ！……！」

腕を二字に組みゼロは金色の光線ワイドゼロショット、ネクサスは青い光線オーバーレイ・シユトロームを放つ。

「シヨワツ！……！」

ダイナはソルジャーント光線を発射、三つの光線は一つとなりカード・ブラスターという合体光線となり亜空間バリヤーを打ち破り、更にネオゲランダの体を打ち抜いた。

「ギシヤアアアアーツ！……！？」

ネオゲランダは大爆発を起こした、ここで初めてゲランダをウルトラマンの光線で倒したのだった。

「やりましたね四季様！」

小町は両手を挙げ大喜び、映姫も心の中で喜ぶのだった。

「まさかゼロがここにいたなんてな」

ダイナの意識に変わったロスバルはジンと会話する、これで宇宙に帰れる目処が立つのだが。

（なあダイナ）
（なんだ？）

スバルはロスバルに話し掛けた。

（もう少しここにいていいか？）
（まあお前が居たいならまだこのままがいいな）

了承してくれたためスバルはまだ幻想郷に残る事にし、ダイナはまだ同化したままに、それが一番いいと思い変身もスバルに任せることに。

「といろでえーきちゃん」

スバルの意識に戻るといきなり話し掛け。

「何でしょうか？」

「これから一緒にお茶しない？」

デートの誘い的な事をするが。

「貴方つて人は……」

先ほどからの女に対する態度にカリカリしていたため。

「おれか」

「そこに廻りなさあああああああああああい……」

説教が始まるのだつた。

To be contained:

EPISODE 04 目覚めよスバル（後書き）

次回はあの似たような怪獣が一體登場。

次回予告

カズキ

「怪獣の像が動き出した！？」

紫

「魔法の森の魔力が原因ね」

にとり

「ウルトラホーク1号出動！」

スバル

「行くぜ光ー！」

光一

「ああ！」

次回【EPISODE 05 怪獣総進撃】

EPISODE 05 怪獣総進撃（前書き）

今回河童が暴走しています、これからも暴走をせぬつもりです。

登場怪獣

凶暴怪獣アーストロン
爆弾怪獣ゴーストロン

登場

幻想郷に新たなウルトラマン、ティガとダイナが現れ三日が過ぎようとしていたある日。

魔法の森の中、そこで魔理沙とその親友のアリス・マーガトロイド、メガネを掛けた森と人里の間にある香霖堂といふ雑貨店の店主の森近霖之助もりちかりんのすけが何かを見上げていた。

「昨日までこんな『力い像なんてあつたか?』

「無かつたわね」

「あつたら『気付く』

三人が見ていたものは一つの鉄でできた怪獣の像だった、片方両手が鎌で長く鋭い角が生えた怪獣、もう片方は前者の怪獣に似ているが角と鎌はなくひらひらした背鱗せりんが生えた怪獣の像だった。

「どうする?」

「そうだな……香霖堂の売り物にしたらどうだぜ?」

「却下」の一言で片付けられ。

「とりあえず……カズキに言つとく?」

「だな」

魔理沙とアリスは博麗神社へ向かう事に。

「それにしてもこれ、一体なんなんだ？」

怪獣の像を見て何かただならぬ不安を感じていた、これがもし動き出したらどうなつてしまつかと思うが。

「そんなわけないか……誰かが手を加えないかぎり」

そんな事は滅多にないと言い聞かせながら店に戻ったのだった……一
体の像が微かに手を動かし目で睨んでいるにも気付かず。

「怪獣の像ねえ……」

博麗神社の縁側、魔理沙とアリスが訪れ四人でお茶を飲みながら怪
獣の像の話していた。

「あんなんあそこに置いたままじゃちょっと怖くて仕方ね、も
しかしたら動きだすかもしけれねーし

動かないとも言い切れない、カズキは何かアイデアないかこめかみ
に指を当てて考へ込む。

「そーだなー……ふむう……」

考え込んでいふ。

「なら運べばいいんじゃない?」

後ろから声が、それは靈夢のものだつた、そのアイデアを聞いた力ズキは。

「なるほど……運ぶ……」

脳裏にヘリコプターが災害で出動し空高く静止しそこから隊員がふら下がりビルの中の被災者を抱えて救出するという場面が。それが人ではなく巨大な物体、それを一機だけではなく後一機増やしてワイヤーとかに巻き付け吊り下げるのだが。

「だけどそんな機体、ないんだよな~」

クロムチエスターとガッシュウイング・ゼロがある、だが小型機なため機体の数を増やすなければならない、ウルトラマンに変身するのは人々に余計な混乱を与えるだけ。

「ダメだ、ぶら下げるのはいいと思うけど機体が足りない」

後ろへ大の字で倒れると天井が見える。

「「機体?あるぜ(あるわよ)？」」

魔理沙とアリスの言葉に大きく反応し食い付いた、それは靈夢も反応。

「多元世界になつちまつただろ?そしたら過去や異世界の解散した

防衛チームの機体が流れ着いて来たんだ、それをペンドラゴンの修理に関わったにとりが立ち会つてその機体を修理したりしているところだぜ

にとりとは、妖怪で河童の少女、河城にとりの事でこの幻想郷の天オエンジニア。

「妖怪の山の地下に確か格納庫つて奴を作つてそこで修理してゐたいだぜ」

「河童の技術は世界一！」

こづしてはいられずカズキは妖怪の山に行く前にパイロットを集めることにした。

「え？ パイロットを？」
「お願い、手伝つて二人共」

まずは人里に行きジンとジンと同居しているスバルに頼み込んだ。理由ひ話すと快く了承してくれて改めて妖怪の山へ向かう事に。

「よく來たね～」

妖怪の山中、そこにある滝の前に河童の少女、河城にとりがいた。

「にとり、どこにあるんだよその流れ着いた機体つて
「まあまあ慌てなさんな」

何かのリモコン出し赤いスイッチ押すと岩肌の一部分がスライドして出入口が現れた。

「」から入れるよ

そのままにとりの後を着いて行く三人、ようやく扉が見え近付くとスライド、幻想郷つてこの河童いれば現代社会並みの街になるんじやないかと思いながら扉を潜つた。

扉の向こう側には広がる鉄の壁が広がりそこに色々な防衛チームの機体が格納され秘密基地状態だった。

「」「「河童の技術は世界一いいつ！」」

三人は叫ばずにはいられなかつた、なんでこんな技術あるのにこんな発達してないとか思つたが禁句だと思い言わなかつた。

「ウルトラホーク1号にウルトラホーク3号……！」

ジンはいち早く巨大な銀と青で尾翼に1と描かれたウルトラホーク1号と小型で尾翼に3と描かれ機首が尖つたウルトラホーク3号に気付く。

「全部流れ着いて来たんだよ……後まだあるよ

次に見せたのは機首が赤く両翼にミサイルが着き尾翼に流星のマークが描かれたジェットビートルに尾翼が二つで両翼に機関砲、銀の装甲に赤いラインが流れるマットアロー1号と同じようなマットアロー2号に両翼と後部にプロペラが着いたマットジャイロもあつた。

「全部にとりが直したんだよな…………」

「そうだよ、改造もしたし後まだ他にも機体は流れ着いてるからそれも直しておぐよ」

にとりはそう言つと格納庫内の設備について説明し始めスバルはス
ーパーギューツは絶対にとりが外の世界にいたら放つておかないと
と思った。

その頃、紅魔館にいる光一は咲夜に紅茶の淹れ方を習つていた。

「淹れ方上手ね」

「まあ家事には自信あるから」

のんびり過ごしていた、魔法の森に怪獣の像が現れた事は知つてい
たがあくまでも像のため気にしていなかつた。

「咲夜～お茶～」

レミリアの声が聞こえてきた、咲夜はすぐにいなくなり紅茶を届け
に行つた。

「怪獣の像か……文々。新聞で見たらアーストロンビーストロ
ンだつたな」

アーストロンとゴーストロンという怪獣は外の世界にも現れた事がある凶暴な怪獣だがなぜそんな怪獣の像が?と光一は思っていた。

「どこの文化のものなんだ」

「こういうものは文化に関わる事も多い、誰が何のために作ったかわかれば苦労しない。」

「嫌な予感するな…………」

「その予感当たつてるかも」

「うわっ! ?」

突然後ろに紅魔館の地下にある図書館の管理人で紫の長い髪でパジヤマが目立つパチュリー・ノーレッジが現れた。

「パチュリーさん! ?」

「場所が悪いわね、あそこは魔法の森、普通の人間がいたら魔力で気分が悪くなったりする、けどもし仮想空間とかが置かれていたらどうなると思う?」

少し考へ出した結論は。

「幻想郷もアンバランスな空間、だから像が魔力を吸収して……まさか!」

光一も気が付いた、アンバランスな空間の幻想郷、もし魔力漂いずっとそれに浸つていると普通の人間は体調を崩す魔法の森に正体不明な像が置かれれば超常現象的な事が起こるかもしれない。

「行きなさい、それが貴方の使命のはずよ」

光一は走りだし紅魔館から出ていった、その後に咲夜が来たがパチコリーが事情を説明してくれたおかげでサボリではないとわかったが外の門番は爆睡していた。

「ジェットビートルとウルトラホーク1号」とマットアロー1号が大型機だからそれでワイヤーで釣り上げて」

にとりからの説明を聞きカズキはジェットビートル、ジンがウルトラホーク1号、スバルがマットアロー1号に搭乗。すると床が動き出しジェットビートルはエレベーターで上がりゲートが開き機体は外に出る。

「ジェットビートル、スクランブル！」

レバーを引き下部の三つの噴射口から火が吹き宙に浮かぶ。

「早苗～お茶～」

「はーー」

山中にある守矢神社では早苗が一人の神の赤い服と綱が目立つハ坂
かかなこ
神奈子と帽子が目立つ盛矢諭訪子のお茶を淹れようとしていたところだつたが。

「地震！？」

急に強い揺れが起こる、すると何かが動く音が響き二人は外を覗く。

「なんじゃこりゃーつーー？」

神奈子は思わず叫んだ、それは山が割れてスライドしてそこからウルトラホーク1号が出てきたからだ。

「すごーい！秘密基地みたい！」

「なんだよこの近未来な秘密基地はー！」

「河童あーー？ 河童が何かしたのかなーー？」

早苗は大喜びだった、合体ロボとか好きなため秘密基地も守備範囲。

「ウルトラホーク1号、発進！」

ジンがスイッチをオンになるとウルトラホーク1号の後部の五つの噴射口は火を吹き飛び立つた。

「飛びましたよ神奈子様！ 諭訪子様！」

「てかこれ戻るのか？」

「まあ？」

「マットアローは妖怪の山の裏側の崖に設置されたゲートから発進した。

三機はジェットビームを前に、後ろに右にウルトラホーク1号、左にマットアロー1号が飛び魔法の森へ。

「二人とも聞こえるか？」

「聞こえてるぜ」

「右に同じく」

通信機が使えるかテストし作戦の説明。

「怪獣の像を一つずつ山の裏側の荒れ地に運ぶ」

「了解！」

「ラジヤー！」

それぞれ違う返事を返すと現場に到着、霖之助はその三機を見ていた。

「大丈夫なのだろうか」

ただならぬ不安を感じながら見送った。

三機が像の上空に着くと下部のハッチが開く。

「ワイヤー投下！」

ワイヤーが降り先には何でも引っ付く磁石が付いており先に鎌と角を持つ怪獣の像から運ぶ事に。磁石は上手くくつ付き上昇して像を釣り上げようとしたその時だつた。

「な、なんだ！？」

急に機体は激しく揺れバランスが崩れる。

「一体どうしたんだよ！？」

「俺に聞くなよ！」

するととにかく通信に入る。

【怪獣の像が動いてるよー】

「はあっ！？」と同時に間抜けな声を上げ下を見ると次に運ぼうとしていた怪獣の像は動いており運ぼうとしている鎌と角の怪獣を引張り色まで金に変わっていた、この怪獣の名は爆弾怪獣ゴーストロン、名前の由来はかつて时限爆弾を抱えていた事であるがこのゴーストロンにはそんな物騒な物はない。

「なんで動いてるんだよ！？像じゃなかつたのか！？」
「切り離すぞ！」

ワイヤーを切り離すとゴーストロンは大きな音を立てて倒れると次は鎌と角の怪獣の像が動き出した、色は黒い凶暴怪獣アーストロンだ、この一体は同種族と言われている怪獣である。

この一体の像はとある惑星で作られ溶かした鉄に細工をして像に流

し込む事で動くのだが今回は魔力が原因で動き出したのだ。

「ギャオオオオオオオン！……！」

アーストロンは体に付いたワイヤーを振り払い一体は人里へ向かい歩き出す。

「マジかよ！ 攻撃！」

三機は機首からビームを放ち攻撃、だが進行は止まらない。

「遅かつたか…………ティガアアアアアアーツ！……！」

光一はスパークレンスを掲げ起動し光を放ちティガ・マルチタイプから一気にパワータイプに変身し一体の前にジャンプして着地し行く手を阻む。

「ティガ！」

スバルが名前を言つとティガは一体の胸部に手を当て押し出そうとする。

（熱い！コイツらの体、まるで熱した鉄みたいに熱い！）

手の平から煙が立ちジュート焼ける音が聞こえる。

「お、お、本当に動きだしちまつたぜー！」

靈夢と魔理沙、アリスが現場にやつてきて状況を見る。

「アレがウルトラマンティガ……異世界だった世界を救った光の巨人」

意味深そうに靈夢は言うがティガは力負けし掛けていたがアーストロンの背中に火花が散る、マットアローー1号の機関砲による実弾攻撃だった、アーストロンの注意はマットアローー1号に向けられる。

「相手は一体だけだ！やつちまえティガ！」

「ん……ハツ！」

ティガはゴーストロンを押し飛ばすとハンドスラッシュを放ち攻撃。アーストロンは口から高熱のマグマ光線をマットアローー1号に向け放つが避けられる。

「やはりあの二体の像……」

「香霖」

三人の元に霖之助がやってきた。

「見た時から感じてた、この怪獣達は元々戦うための像だったのではと」

アーストロンとアーストロンの凶暴さを見て語る。

「どこの誰がどこで作ったなんてわからない、だがこの怪獣達の像は人々から時と共に忘れ去られここに流れ着いたと思つんだ」

「霖之助さん……」

「そう、一番大事なものと共に.....」

するといアーストロンはマグマ光線をマッチアローー叩の左翼に命中させる。

「ひわああああつー!?

スバル！

カズキは叫ぶが「ゴーストロンの高熱光線ファイヤーマグマ」が迫り避ける。

(スバル、変身だ!)

-ああ!! タイガアアアアアア!! ッ!! !! !! !!

スバルはリーフラッシャーを掲げ起動し光を解放しダイナ・フラッシャタイプに変身、機体は丁寧に持つて地上に下ろす。

(ウルトラマンダイナ!)

ティガはその名を叫ぶ。

(その声は光一か!)

(スバ川!)

ここでティガとなつた光一とダイナとなつたスバルは再会。

(話は後だ)

だね

一人はアーストロンとゴーストロンの方を向く。

「二人の英雄ね」

「そうね」

ティガはスカイタイプにチェンジ、ダイナはミラクルタイプにチェンジしスピードで翻弄する。

アーストロンは鎌を振るうがダイナには当たらず顎を掴まれる、バリヤーを手に纏い掴んでいるため熱さは感じないのだ。

「ショワッ！」

そのまま持ち上げ投げ飛ばす。

「ハッ！」

ハンドスラッシュを連射しゴーストロンを近付けさせなくする。

（光ー！）

（ああー！）

ティガは右腕を斜め上に向けティガ・フリーザーという冷凍光線を放ちとダイナは超能力でそれを吸収し強化させアーストロンとゴーストロンに打ち返すと猛吹雪が一体を襲い凍らせる。

（今だー！）

ティガとダイナは飛び立ち互いの肩に手を片方だけ置いて高速回転を始める。

「すゞい風！」

靈夢達は木に掴まり吹き飛ばされないよつて踏ん張りジェットビー
トルとウルトラホーク1号は暴風の圈外に出る。
ティガとダイナを中心に竜巻が巻き起こりアーストロンとゴースト
ロンは竜巻に巻き込まれ宙に浮き回転、すると体が引き裂られてい
く、合体技のストームテンペストを炸裂したのだ。
アーストロンとゴーストロンは体が完全にバラバラになり倒された
のだった。

「まさかお前まで」
「僕の方こそ」

光一とスバルは再会に喜んでいた、だがそこに。

「あなた方……」
「えーきちゃん？」

映姫がやってきた、理由は……

「これ、どうするのですか？」

ストームテンペストにより魔法の森の一ヶ所だけ木々も吹き飛びハ
ゲていたのだ、アーストロンとゴーストロンの残骸も散らばり霧雨
邸とマーガロイド邸にも被害が。

「わたしの家があああああ…………！」

「私の家もおおおおお…………！」

自宅の成れの果てを見て啞然としていた、一人は当分博麗神社で泊まる事に。

「判決を下します」

映姫は白黒つける程度の能力で白黒つけようとしていた。

「あなた方は黒！霧雨邸とマーガトロイド邸はあなた方が修理しない」

「あ、やつぱり…………！」

二人は崩れるように座り込みそれから数日間一日中修理に没頭する事になったのだった。

To be continued...

EPISODE 05 怪獣総進撃（後書き）

因みに今回出たストームテンペストは初代とジャックと違つといひ
はスカイタイプとミラクルタイプの時でないと使えないというのが、
マルチとフラッシュで使うにはまだまだ無理という事です。
感想お待ちしてます。

次回予告

ゼロ

（あいつやピット星人の宇宙船じゃねーか）

桜

「お待ちを」

ピット星人

「やつぱり父親と同じしねー！」

早苗

「エレギング…………？」

ゼロ

（倒したはずなのにー！）

次回【EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ】

EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ（前書き）

登場怪獣

変身怪人ピット星人

宇宙怪獣エレキング

EXエレキング

カプセル怪獣ミクラス

カプセル怪獣ミンティオス

登場

EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ

「トヨワッ！」

ある夜、幻想郷に謎の宇宙人の宇宙船が飛行しており、ジンはそれに気付きゼロに変身し、追跡を始める。それを待っていたかのように宇宙船は光線を放ち攻撃する。

（ありやピット星人の宇宙船じゃねえか）

ゼロが言つにはその宇宙船は変身怪人ピット星人の宇宙船だと分からりかつて地球を何度も侵略しに来たが、ウルトラセブン、ウルトラマンマックスが阻止した。

（攻撃していくつて事は侵略目的だな、させないぜー！）

緑色の光弾ビームゼロスパイクを放つが、当たらず宇宙船から光線が放たれた。

（危ねつー！）の野郎！）

額のビームランプから緑色の光線エメリウムスラッシュを発射、宇宙船に命中、大破はしなかつたが小さな爆発を連続で起こり煙を上

げ山中に墜落していった。

(チツ、森ん中落ちたか…………これ以上の追跡は無理そつだな)

カラータイマーが赤、黒と点滅を始めたためゼロは引き返したのだった。

人里のモロボシ家宅、スバルも同居人として暮らしている。

「よー寝た」

ジンは起きるがスバルは起きない、映姫に命じられた霧雨邸とマーガトロイド邸の修理が終わり徹夜のためほとんど寝ていなく疲れていたからだ。

「いのまま寝かせておくか

そのままにして洗面、歯磨きを済ましてから血圧を出る。

「やべえ…………まで寝てりゃ良かつたか?」

夜中に宇宙船の追跡をしたからか寝不足気味だつたが行かないわけにもいかない、大破していないためまだ何かしですか可能性もある、そのため妖怪の山へ向かう。

妖怪の山はにとりが所々偽装している場所があるためほとんど要塞と化していた、河童の技術は世界、いや、宇宙一かもしだ。

「そういえば1号の発射口、守矢神社巻き込んでたな」

この前のアーストロン、ゴーストロン戦の事を思い出しながら山中に入ろうとしたら。

「お待ちを」

「あ？」

目の前に犬耳や尻尾を生やした天狗の犬走柵いぬばしじ もみじがカタツと音を立てて上から降りてきた。

「なんだ柵か」

「妖怪の山は人間が足を踏み入れるのは禁止されています」

元々妖怪の山は人間が足を踏み入れるのはあまり好ましくないのが。

「ですが、あなた方であれば話は別ですが」

柵もウルトラマンの正体を知っている者の一人でもある、そのためウルトラマン、それに関わる人物の出入りはよしとしている。

「サンキュー、後見張りご苦労さん、はいこれ差し入れ」

ジンが出したのは何かが包まれた風呂敷。

「おはぎ入つてゐから食べてくれ

「いつもありがとうござります」

天才肌なのが一度やつた事はよく覚えてこる、とこりよりは初めてやる事をほほえ壁にこなす事ができ料理も早苗から畠つて作れるようになつた。

「夜中の宇宙船ですか？」

山中の道を歩き出す、榎も知つていた、仲間の天狗からの情報である。

「ああ、飛べないと思うけど……」

そこで追跡を続行しなかつた理由も付け加えた、時間が無かつた。

「てか所々偽装してあるよな

「あはは……やうですね……」

地面を見ると鉄の板が見えたりしていた。

「だけど地底に繋がる空洞の出入口の周辺には手を付けてないみたいですがね」

「地底にもなんかあるのか……」

初めて地底にも土地があると聞き興味を持ち始めるが昔セブンに地底深くに人類が作ったものではない施設がありそこで酷い目あつた

とか聞かされていた、レオには車はものすごく危ないものと聞かされていました。

「…………」

「どうかなさいましたか？」

「いや、何も

少し放心状態だつたが呼び掛けられ我に戻る。

「てかにとりもよくこんな短期間で山を要塞にしたな」

「そうですね」…………最近じや天狗の警備団にも扱い方教えてますから

怪獣も増えてきたからか流れ着いた機体の修理と量産をしているにとり、天狗にも扱えるようにしていた。

「天狗達も頑張って欲しいな
「できる限りは」

話していると二人は森の中で怪しい人影を見つけた。

「何かいましたよ！」

「ああ！」

ジンは先に走りだし後を追うように柵も走り人影を追い掛けるが途中で見失う。

「見失いましたね」

「分かれて探すか」

「はい」

それぞれ違う場所を探す事にしジンはその足で森の中深くに、柵は飛んで上から探す事に決まった。

「ど」行きやがつた……

深い森の中を歩くジン、人影の正体を確かめるべく進んでいく。

「親父からもらつたこれを……」

ジンは銀色の光線銃ウルトラガンXを持ち辺りを警戒する。

「つー」

足音が聞こえ音を頼りにその足音の主を追い掛ける。

(速い……一体)

追い掛けていると湖の岸に到着。

「ここは……」

湖の近くには守矢神社が見えていた、守矢神社が幻想入りした時に一緒に湖ごとしていたのだ。

「綺麗だな……ん?」

右を向くとその先には昨夜追跡し撃墜した外装の一部が焼け焦げ穴が空き中が見えていた宇宙船が不時着しておりそれに入る人影が見えた。

宇宙船に接近し、何も仕掛けがないか石を投げ確かめてから宇宙船に空いた穴から中に侵入した。

「さて……」「……」

箱の中からカプセルを出し放り投げると小さく爆破し霧が発生。

(ミンティオス、頼むぜ)

カプセル怪獣ミンティオスを解放。

(あいよー)

ミンティオスは実態がない霧だが姿を隠したり偵察が得意な怪獣のためその特性を活かし宇宙船の中を偵察させ自分も中を歩き操縦室らしき部屋に入った。

「いじだな……」

操縦室の奥に入つて行くと扉は閉まり閉じ込められてしまった。
「しまつ……」と扉の方に行くが手遅れだった。

「「ウフフフフフフ」」

不気味な笑い声が聞こえてきた、振り向くと柱の陰から赤い眼と黄色い眼をした宇宙人、変身怪人ピット星人が現れた。

「ピット星人……！」

ウルトラガンXを向けるが少し眩がってきてふらつき武器を落と

す。

「「ウフフフフフフフフフフフ」」「
(まさか……催眠ガスを……)

ジンはそのまま倒れ氣絶、ピット星人は左腕に付いていたウルトラゼロブレスレットに手を伸ばすのだった。

「はつーー?」

そして田を覚ますと見慣れた光景が、守矢神社の一室の天井で上から覗くように早苗と桜が見ていた。

「早苗…………桜…………」

「森の中で倒れていたのを早苗さんが」

「一体何があつたんですか?」

ジンは頭はぐらぐらしていたが無理に起き上がり頭を搔く。

「確かピット星人の宇宙船に侵入して操縦室に入つて…………それ

から……」

そこで大事なものが無いのに気付いた。

「プレスレットがない…………！」

変身アイテムのウルトラゼロアイを収納したウルトラゼロプレスレットが無くなっていたのだ。

「まさか…………くそっー！」

立ち上がろうとするが二人に止められる。

「まだフラフラじゃないですか！」

「もう少し休んでからこー！」

だが置いてあつたウルトラガンXを持ち立ち上がろうと。

「頼む！行かせてくれ！」

焦っていた、プレスレットがなく変身アイテムもない、今の自分に何ができるかと。

「ウルトラマンになれない俺に何ができるんだよー！」

その怒鳴り声に一人は震えた、いつものクールだが熱いジンではなく焦りと恐怖に怯えきった雰囲気だった、もう何かを失いたくないような。

「…………もういいです、言つても聞かないなら行きましょうー！」

早苗は折れ行くと決意、桺も行くと同意し三人は神社から出て宇宙船が着陸している湖の岸へ。

岸に到着し宇宙船は森の中に移動していたが確認できた。

「アレですね」

「ああ、行くぞ」

歩き出したその時だつた、湖の中心から水柱が上がりそこに黄色い黒い牛の模様に長い尻尾、黒いアンテナのような角を一本生やした宇宙怪獣エレキングが現れた。

「エレキング…………！」

だが変身はできない、ならカプセルを出し投げると一本の大きな角を生やしたカプセル怪獣ミクラスを放つた。

「頼む、ミクラス」

ミクラスはそのままエレキングに突進し食い止める。

「今之内に」

「私も怪獣の方を！」

早苗は飛んでミクラスに加勢しスペルカード等で攻撃を加える。

「俺達は行くか」

「はい」

ジンと桺は宇宙船の中に潜入していく。

「また来てやつたぜ！」

今度も自分が空けた穴から潜入し操縦室の中に。

「性懲りもなく、今度は仲間連れてきたのね」

ピット星人が待ち構えており後ろのデスクにウルトラゼロブレスレットが置かれていた。

「それを返してもらいましょうか」

柾が刀を抜くとピット星人達は一斉に襲い掛かった。

「ハッ！」

二人は避けるとジンはピット星人Aの背中を蹴り飛ばし壁に激突させるとピット星人Bが飛び掛かるが柾が刀を振るい一閃、それを食らえばいくら宇宙人でも一溜まりもなく避ける。

「すまねえ！」

「いえ、来ますよ！」

ピット星人AとBは殴りつとするがジンは両腕で受け止めジャンプし回り蹴りを繰り出し頭を蹴る。

「くそつー。」

光線銃を構えジンに目がけ引き金を引くが。

「ジンさんー。」

桜は心配し声を上げるがそれを余所にジンは光線をジャンプし足や腰を曲げ避けていく。

「うそー！？」

「ギヤアアアアアツー！！！！！！！」

それに動搖しているとピット星人Bの断末魔が聞こえ横を向くと桜が刀を振り上げて迫っていた。

「ぐ、来る…………」

だがその願いが届く事はなく振り下げる閃されピット星人Aも倒された。

「スゲー」

「いえいえ」

桜はウルトラゼロブレスレットを持ちジンに渡す。

左腕に再び嵌め、二人は外へ出る、その際にミンティオスを回収、外ではミクラスがエレキングに追い詰められ苦戦していた、そのためミクラスを回収しウルトラゼロアイを出し着眼しウルトラマンゼ

口に変身そのままウルトラゼロキックでHレギングを蹴り飛ばす。

「ジンさん取り戻したんだ！」

早苗は嬉しそうにゼロを見る。

エレキングはミクラスとの戦いで疲れ切っていたためエメリウムスマッシュを放ち頭を吹き飛ばし倒した。

「デコツ……」

一件落着かと思つたがその時だった、辺りに紫のオーロラみたいなものが漂つ。

「この光は……！」

「わかりません、けど嫌な予感します」

早苗その予感は的中した、湖の中には蛇のような不得体の知れないものが泳いでおりゼロの回りを泳ぎ回っていた、そして姿を水中から現す。

「そんな…さつきの怪獣は今ジンさんガ！」

(EXエレキングだと…)

それはエレキングだつたが違つた、蛇のような体をした巨大な怪獣EXエレキングだつたのだ、EXエレキングはそのままゼロに巻き付く。

「デコアアアアアアツ！…！？」

そして放電し電流を流しゼロを苦しめていく。

「キキイーツ！」

EX-Hレギングは苦しむゼロを見て嘲笑つかのよひに鳴き声を上げる。

だがそんな事で諦めるゼロではない、ゼロは自分の体からエネルギーを放ちEXエレギングを攻撃し巻き付きから解放される。

レバノンの政治

ゼロは突撃してくるEXエレギングにゼロスラッガーを投げ付けバラバラに切り落とすとその肉片は爆破していく。

「瞬殺……ジンセキス」

宇宙船は飛んで逃げようとしたがワイドゼロショットで破壊された。

「よかつた……戻つてきて」

ウルトラゼロブレスレットを見てそつ然く、そこで早苗が。

「大事にしているんですね」

「…………ああ、これは、俺がもうウルトラマンの名を手羽なさい
よつとする誓つた証だから」

その意味ありげな言葉に疑問にするがジンはそのまま去つていった。

「一体…………」

(すまない…………)れはここにいるみんなに知られたくないんだ…
罪人となり追放された自分を…………)

顔に影を作り表情を暗くして歩いていると呼び止められた。

「桜か」

桜が来たため表情を明るくして応対。

「今日はありがとうな、ブレスレット」

「いいですよ、大事なものが戻つて何よりです

軽く会話を済ませると。

「じゃあまたな桺」

ジンは犬耳が生えた頭を撫でてから妖怪の山を後にして、撫でられた頭を手で触りポカーンと道で立っていた桺を文が見つけたのだった。

To be continued...

EPISODE 06 奪われたウルトラゼロアイ（後書き）

ジンさん主人公差し置いてフラグ乱立（笑）

次回予告

「スファイアだと!?」

ムサシ

「彗星怪獣ドーラ……！」

スバル

「ガツッティングは俺の魂だからな」

？？？

「君の体を貸して欲しい」

カオスリドリアス

「くええええつ！」

ムサシ

「僕は…………よし！コスマオオオオオオオオオス…………！」

「！」

次回【EPISODE 07 光との遭遇】

EPISODE 07 光との遭遇（前書き）

今回はゼロが3月にお世話になるウルトラマンが登場！

登場怪獣

彗星怪獣パワードラゴ

宇宙球体スフィア

カオスヘッダー

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

超合成獣ネオカオスパワードラゴ

カオススフィア

登場

EPISODE 07 光との遭遇

外の世界、スバルが所属していた宇宙ステーション・イカロス3ではやはりスバルが行方不明になり慌ただしかった。

「まだスノーホワイトの反応掴めないか？」

「はい……」

『司令官に話しつけられムサシは浮かない顔で答える。

「心配するな、アイツはああ見えて運が強い奴だ、どこかで生きているはずや」

司令官はそういうが心配はしている、ムサシを落ち着かせようとするとための言葉なのだ、それを言い離れムサシは画面とにらめっこする。

（スバル……）

だがそこに違う反応が数個、これはスノーホワイト・ゼロの反応ではないと完全にわかつていた。

小惑星に偽装した監視カメラの映像を回すと映っていたのは白くて丸い物体の宇宙球体スフィアが映っていた。

「スフィアだと！？」

全滅したと思われていたスフィアが現れムサシは慌てて警報を鳴らし戦闘体勢に。

「非戦闘隊員はシェルターへ避難を」

ムサシはオペレーターとしての役割を果たすため職員の避難誘導を開始と同時に小惑星に偽装した防衛システムを起動させスフィアに攻撃を開始するが逆襲を受け数を減らされて行くが。

【ガツツウイング小隊発進します】

「ラジャー、お気をつけて！」

黄色いガツツウイング1号の小隊が発進しスフィアの迎撃に出た。

「シルバーシャークを機動します」

何個かの小惑星からシルバーシャークという兵器を機動させスフィアを確実に赤いレーザーを発射し打ち落としていく、ガツツウイング小隊も戦果を上げていた。

【怪獣だ！】

ガツツウイング小隊からの報告で怪獣が接近していると報告が、監視カメラの映像を見ると映っていたのは。

「コイツは彗星怪獣ドロゴー！」

赤く硬そうな皮膚に身を包み一対の羽根に手は服の裾みたく大きく中に鎌を隠し持ち赤い眼の彗星怪獣ドラコだがこのドラコは歐米に現れた個体でパワードドラコと言われているのが、

胸には過去の個体にはない発光体が付いており頭部には紫色の突起物が生え更に凶暴さが増しており、手の鎌は更に鋭く長く伸びていた。

シルバー・シャークによる攻撃が放たれたが亜空間バリヤーで防がれてしまった。

「まさか……スフィア合体獣…………」

パワードドラコはスフィアに取り付かれ、更に別の生命体と合体した超合成獣ネオカオスパワードドラコと変化していたのだ、それからまたもやスフィアが現れガツツウイング1号を撃墜してしまつ。

【うわああああーっ！？】

パイロット達の悲鳴が何回も響きムサシの顔は苦痛の表情になつていいく。

「ギシヤアアアアツ！」

ネオカオスパワードドラコは遠吠えを上げると他のスフィアに取り付かれていらないパワードドラコの群れを呼び寄せ小惑星に偽装した兵器を破壊していく。

そして宇宙ステーションに接近するネオカオスパワードドラコ。そこに高速で接近する青い光が現れたがムサシは気付く暇はなく、ネオカオスパワードドラコは口から光線を発射、スフィアに取り付かれて得た能力である。

宇宙ステーションにネオカオスパワー「ドーラ」、スフィアの攻撃は直撃していく。

「うわああああああああああーつ…………？」

ムサシがいた部屋にも炎は回るのだが青い光がその部屋に入りムサシを守るように包み込んでいく、そして宇宙ステーションは破壊されスフィアの目的は果たしたのだった、そして次の目的地は地球、だが日本でも欧米でもない場所であった。

幻想郷では……

「にとり～、それそっちな～」「わかつた～」

妖怪の山の秘密基地、ベースマウンテン（仮名前募集中）ではスバルがガツツウイング・ゼロと切り離したブースターを運んで格納庫で光一とにとりと修理していた。

「光一もわりいな、付き合わせちまつて

「いいつて、僕もガツツウイニング好きだし、それに……」

視線の先にはパチュリーがいた。

「パチュリーさんが興味あるって言つてたからひょいひょいかなつて」

なるほどと呟きガツツウイニング・ゼロの整備を進めていく。

ある草原、風が吹き葉は揺れその葉が鼻に擦るようになたり田を覚ますものがいた。

「ここは……空?」

そのものは宇宙にいたはずのムサシだった、ムサシは起き上がり回りを見渡すが何もなかつた。

「なんで丘にいるんだろ……宇宙にいたはずなのに……宇宙でスフィアに襲撃されて青い光に……ん?」

気付くと手に青い宝石輝石が握られていた。

「なんだろこの石……だけど温かいな……」

取り敢えず輝石をポケットに仕舞い立ち上がりもう一度辺りを見渡す。

「どこの田舎だ？」

ビルも見えなく遠くには人里が見えていた、まずはそこに行こうと歩き出そうとしていたら。

「クエニーニュエッ！」

真上を巨大な羽根を広げた水色の皮膚をし腹部が肌色っぽく嘴を生やし頭部に赤い鶴冠が生えた怪獣が通過した。

「リドリアスだ！」

その怪獣の名は友好鳥獣リドリアス、外の世界でも確認されている怪獣だった。

「だけどなんでスーパーGUTSは出動していないんだ？」

怪獣が出ればスーパーGUTSは出動し危害を加える事がないなら市街地から遠ざけるのだが。

「だけどこれからどうするか考えよ…………」

歩き出す、里に向かつて。

(まづはこじがどこか突き止めないと)

幻想郷を知らない彼に取つてはどこなのかわからない、まづはどこなのかを調べようと人が集まる場所へ。

(それにしてもこんな場所地球にあつたか? もしくは未開拓の惑星?)

そう思いつつ歩きようやく里の前の魔法の森の中に入る、何も知らないため普通に入るがムサシには何も影響はなかつた、何かに守られるようだ。

「ここまで深い森の中、すごいな……」

そう呟いているとその先の草の中に何か隠れていた。

(まさか人間がここに来るなんて……チャンス)

そこに隠れていたのは古そうな傘を持ったオッドアイの右が青っぽく左は赤っぽいからかさお化けの少女の多々良たたら小傘こがさがムサシを驚かそうとしていた、ここに誰か通るまで待っていたようだ。

(そろそろ来る……)

驚くと期待に胸を膨らませ足音が近付き自分の前に来た瞬間。

「驚け~!」

飛び出して叫ぶとムサシは横を向き呆然と立っていた。

「驚け~!」

大事な事のため一回言つた、だが驚かない。

「…………」

しばらく沈黙が続き小傘の田からジワッと熱いものが零れた。

「あーー！」めん！驚いた！驚いた！」

これは良心が痛む、なんとか宥めようと声を上げる。

「本当？」

「本当、だからこゝがどこか教えて？」

「外來人なの？」

まずはそこからの説明が始まりムサシは幻想郷の事を知り小傘と一緒に歩く。

「そんな場所だなんて…………」

「そう、わたしはからかさお化けの多々良小傘」

「お化け……僕は春風ムサシ、よろしく小傘」

「うん、よろしく」

一人は歩いていると里に入り、小傘がお世話になつて居るといつ寺に行く事に。

「いい、いい」「

命蓮寺みょうれんじという寺の前に到着し入つてみると黒っぽい服で金髪っぽい髪の女性や虎柄の髪の毛の少女に船乗りが着るセーラー服の少女に頭巾を被つた女性、ネズミっぽい耳と尻尾を生やした少女と何か正体がわからなそうな少女がいた。

「小傘、そちらの方は？」

黒っぽい服の女性に聞かれて魔法の森で歩いていたのを連れてきたと告げると。

「そうでしたか、私は聖白蓮と申します」

丁寧に自己紹介すると続いてネズミっぽいのはナズーリン、頭巾のは雲居一輪、セーラー服のは村紗水蜜、虎柄のは寅丸星、正体がわからなそなのは封獸ぬえ。

「そんな事が……それは大変でしたね」

宇宙ステーションで何かあつたか教えるムサシ、最初は宇宙ステーションが何かを説明していた。

「はい……ですがなぜか幻想郷に」

「ですがなぜそのスフィアという物はあなた方を……」

「過去の記録だと人間が宇宙に進出するのをよく思わない生命体みたいですね」

生命体と聞き知能もかなり高いと判断。

「それなら話し合えばわかるはずなのに……」

「…………そうですね…………ですが奴等は話し合つべきかすべての生命体を取り込んで一つにならうとしていたんですね」

すべての生命体が一つになる、だがそれはすべての生きるものが同じ考え方しか持たなくなること、それではつまらなく夢もロマンもない世界になってしまふ、スフィアの行動理念も付け加える。

「同じ考え方……それは確かに阻止するべきですね」

白蓮は妖怪や神、仏、人間は平等であるべき、そう考え行動している、だがスフィアがやるのはそれに近くそれに遠い事、いくら平等であるべきでもそれでは意味がない、

一つになつて平等になつても同じ行動しかやらないのならつまらない世界になつてしまつ、ましてやスフィアがその上に立つてしまつため平等とは言えない。

「外の世界ではそんな危機が…………話し合にはどうだったのでしょうか？」

「スフィアの一方通行でしたよ、いっぱい人が犠牲になりました」

話は重くなつてきた、切り替えようと別の話題を。

「そういうえば外の世界にも怪獣がいるんですね」

「はい、中には可愛くて人間に友好なのも」

「そりなんですか、こちらにも現れるんですよ」

先ほど見たリドリアスの事を教え何回か保護された事があると説明。

「怪獣を保護…………それは素晴らしいですね、怪獣もウルトラマンも平等だと私は考えていますから」

「ここにもウルトラマンが…………名前わかります?」

白蓮はこの幻想郷にいるウルトラマンの名前を上げていく。

「ゼロとブリザードは知りませんがティガは闇、ダイナはスフィアを倒した英雄でネクサスとメビウスは昔地球を救ったウルトラマンです」

だがムサシはゼロは知らないがその変身者は知っているが」」でも
だ言つ必要はないだらけ。

それからムサシは博麗神社に行けば外の世界に帰れると知り向かお
うとしていた。

「ありがとうございました」

もつ念ついとはないだらくなと思い挨拶していた。

「あなたと会えてよかったです、ムサシさん」
「いやううう、もつ念ついとはなこと思いこますがみんなの事は忘れ
ませ」と

小傘が案内してくれると通りの事で歩き出したらポケットの中
が青く強く輝いた。

(聞こえるか?)
(誰?)

ムサシは輝石を手に取り回りを見渡すが誰も話し掛けていなかつた、それどころか回りの景色、人が止まつていた。

(君がその手に持つ輝石が私だ)

(そうなの？君は……)

(私は君達から言つウルトラマンだ)

輝石から頭に響く声はウルトラマンのものとわかり驚くムサシ。

(ウルトラマン！？まさか僕が幻想郷にいるのは？)

(そうだ、済まない、あの時助けられそうだったのが君だけだった、仲間を助けられなくて済まなかつた)

(いいよ、君も来るのが大変だつたんだ、だけどなんでスフィアは……)

(スフィアには生き残りがいた、それが集まると同時にある生命体も現れた)

(生命体？)

(パワードドラゴに取り付いていたものだ、あれにはドラゴだけでなくカオスヘッダーというウイルスも取り付いていたんだ)

初めて聞く名に首を傾げた。

(カオスヘッダーとスフィアはもうこの地球に侵入している、いや、この幻想郷にも侵入していると言つた方が的確だ)

(なんだつて？なぜカオスヘッダーとスフィアはこの幻想郷に？)

(幻想郷は外からでは回りは見えない、まず始めにここを制圧しようと田論んでいるらしい)

するところの幻想郷は更なる危険に見舞われる事になる。

(カオスヘッダーは取り付いた怪獣を凶暴化させる、どんなにおとなしい怪獣でも)

(そしたら小傘やみんなが危険な目に! -)

(私はカオスヘッダーから地球上の生物を救うためにやつてきたのだ、だが地球上で活動するには時間に限りがある、エネルギーを抑え活動するには誰かと同化しないといけない)

(それなら僕の体を使って、一度終わったと思った人生、それに白蓮さん達の話だといつでも戻れるみたいだから近いうちに外に帰ればいい、だから僕はこの幻想郷を守るために戦う)

ムサシその決意にウルトラマンは共感した。

(ありがとう)

(僕は春風ムサシ)

(私は…………コスモスだ)

(コスモス…………優しい名前だね)

コスモスは再び礼を言いなぜ今話し掛けたか聞くとカオスヘッダーに取り付かれた怪獣が近付いているという事、いきなりだがいつも人生はいきなりのためムサシは覚悟を決めると回りは動き出す。

「ムサシ?

「ごめん小傘、まだ僕この幻想郷に残るよ」

なぜと聞こうとしたが荒々しい鳴き声が聞こえ魔法の森の方を向くとその上空には頭が紫の突起物に包まれ眼は凶悪なのを表すような赤、嘴と爪も長く鋭くなつたカオスヘッダーがリドリアスに取り付いたカオスリドリアスが飛来してきた。

「リドリアス？」

「か、怪獣！」

小傘は自分が驚かす方なのに自分が驚きムサシの後ろに隠れた。するとガツツウイング・ゼロが飛んできた。

「あの機体……スバルのだ！」

そうスバルのテスト機体だった、ガツツウイング・ゼロはカオスリドリアスの前を通り。

「まさか修理仕立てのコイツをもう使うなんてな」

パイロットはもちろんスバル、カオスリドリアスはガツツウイング・ゼロに注意が行き進路を変え里から遠ざかっていく。

「つてムサシ！？」

ムサシはガツツウイング・ゼロとカオスリドリアスが進む方向に向かい走りだす。

「クエニーハーツ！」

カオスリドリアスは口から青白い光線を放ちガツツウイング・ゼロを攻撃、だが宙返りをし避けられ後ろに回られ縁に光る二ードルレーザーで攻撃するがカオスリドリアスもそれを避け地上に降り立つと上を向きガツツウイング・ゼロを攻撃。

「そう簡単には落とされないぜ！」

それも避けつつレーザーで足下を撃ち威嚇、それに怒るカオスリドリアスは光線を発射、だが命中せず。

すると、紫の突起物が生えたカオスヘッダーに取り付かれたカオススフィアの大軍が飛来した。

「スフィアかよー！」

カオススフィアは光線を放ちガツツウイング・ゼロの邪魔をする。

「くそー！」

それをムサシは見る。

「！」のままじや…………

輝石を見つめると石は太陽の光で輝く。

「僕が戦えて怪獣を救う力があるならその力を貸して欲しい」

そう念じると輝石は輝きを増し手に包むようにすると真ん中に浮かび「ウルトラマンコスモス」と呟き続けもつと強く光り、そして。

「ウルトラマン…………！」

輝石は右手の人差し指に付くよつになるとその人差し指と親指を立て天に向ける。

「ウルトラマン…………コスモオオオオオオオオオオオース…………！」

輝石から更に強い光が解放されムサシを包んでいき巨大化、光が消えると青と銀の光の巨人が立っていた。

「ウルトラマンだつて！？」

その名は、ウルトライアンエスモス・ルガモード!!

けるため押し出していく。

「セアツ！」

押し出すとカオスリドリアスはコスモスを敵と認識し光線を放つがムーンライトバリアという光の壁で防がれそれに怒り爪で引き裂こうと襲い掛かるがコスモスは腕でそれを受け止め回転し距離を取り右手を伸ばし左手を軽く曲げ構え声を出す。

「セアツー！」

カオスリドリアスは声を上げ更に怒るがコスマスは眼から光を放つ、ルナスルーアイでカオスリドリアスの体内のどこにカオスヘッダーが潜んでいると見通すと手から光の粒子の塊、ルナエキストラクトを首に放つとカオスヘッダーは分離し元のリドリアスに戻る。リドリアスは頭を下げお辞儀するとその場から飛び去る。

それを見送ろうとしたガガオススフイアはその瞬をとえてくれず攻撃を仕掛けた。

卷之二

だがそれを耐え抜くと腕を十字に組み青い光線、ルナ・スペシウム

光線を発射する、カオススフィアを打ち落としていき負けると悟つた残りのカオススフィアは撤退した。

「スゲー……怪獣をおとなしくしたと思つたらあのトゲトゲスフィア達を片付けちまうなんて」

ゴスモスはその場から消え立つていた足下にはムサシが。

「本当に僕はウルトラマンになつたのか…………」

空を見上げ駆くと小傘と白蓮達がやってきたのだった。

それからムサシは命蓮寺に泊まる事に、この幻想郷をカオスヘッダーやスフィアから守るために。

To be continued...

EPISODE 07 光との遭遇（後書き）

ネオカオスパワーードリラコの登場は田食の田を迎えた時にでも。メビュートの出番は一応ありますが……………数人で倒すかと。

次回予告

光一

「外の世界に一度戻るわ」

カズキ

「外の世界か……」

紫

「あなた、みんなを連れていってあげたら?」

早苗

「孤門さん達が守り抜いた世界、見なくていいの?」

靈夢

「行つてきなさいよ、私も……………着いていくから……………」

カズキ

「俺、スーパーGUTSに入る！」

次回【EPISODE 08 新たな世界へ……】

感想お待ちしています。

EPISODE 08 新たな世界へ……（前書き）

今回はカズキがやつと外の世界に、そしてアイツの孫も現れます。

登場怪獣

巨大異星人ゴドレイ星人

登場

「ムサシまで」うちに飛ばされるなんてな」

「僕の方こそ、光一とスバルが幻想郷にいたなんて」

光一、スバル、ムサシの三人は博麗神社におり再会を喜んでいた。

「だからなんでここに来るのよ」

しかも居間でお茶を飲みながら寛いでいた。

「あいこちゃん、ここ妖怪の溜まり場なんだ……あんふあんす
！？」

「殴るわよ？」

言つ前に殴つてはその言葉は意味ない、それを突つ込むと陰陽玉が落下來しきそうなため言わなかつた。

靈夢も「こいつのは嫌いではないためお茶とお菓子を用意して出していた。

「やつにえぱひ靈夢ちやへん」

「何よ？ 云つておくけど私はこのバカと付き合つてゐからダメよ」

スバルに話しかけられたため口説かれるかと思つたが違つらしい。

「違う違う、外の世界にいつでも行けるんだよな？」

「…………そりよ」

カズキがいる所でその話はしたくなかった、だが三人は事情を知らない、だから余計な事を言わないでおき。

「カズキ、買い物行つてきてくれない？」

「あ…………うん」

外の世界の話題が出て軽く放心状態だったが呼び掛けられ我に返りメモ帳に買つものを書いてからカズキは出掛けた。

「で、いつ戻る？」

「明日ぐらじには、親に当分戻らないとか荷物纏めたらまたこっちに来るよ」

「…………そり」

スバルはあまり感付いていなかつたが光一は違つた。

「なあ靈夢、なんでカズキはさつき上の空だつたんだ？」

「気付いてたのねアンタは」

「そうだつたか？」

「言われてみれば確かに……」

ムサシも薄々気付いていたようだつた。

「…………アンタ達には教えておくわ、半年前の出来事とこの幻想郷で起きた最大の異変を」

博麗神社から出たカズキは里へは向かわざる場所へ向かつており
そのある場所に到着した、幻想郷の奥地にある妖怪の山とは反対側
にある太陽の烟に。

「…………」

太陽の烟は向日葵がたくさん綺麗に咲いている場所でカズキに取つ
ては姉のように慕つている妖怪の活動拠点でもあるのだ。

「あら、カズキ」

太陽の烟を一望できる丘に座つていると話し掛けの女性が。

「幽香…………」

田傘を差したその彼女の名は風見幽香かざみ ゆうか、花を操る程度の能力を持ち
カズキの母の紫と同等ぐらいかもしけない実力を持つ妖怪だ。

「何があつたの？」

何かある度にこの太陽の烟に来ては向日葵をボーッと眺めている、
彼女もカズキの行動パターンはお見通しだった。

「…………ちょっとね」

「外の世界の事？」

何でもお見通しだった、ほとんどは外の世界の事で思い詰めてここに来るからだ。

カズキは正直に頷くと幽香はその隣に座り日傘を閉じる。

「……」は一年中咲いてるよな……変わらずに

「変わらずに」、その言葉はカズキに取つては重い言葉だった、幻想郷も、自分も、ほとんど変わっていないのに外の世界は百年ぐらい経つてほとんど変わっている、そう思っていたからだ。

「そうね」

「俺は変わったのかな？外の世界が変わったと同時に」

「そんなの関係なしに変わっているわよ、あなたは」

言葉のキヤツチボールは静かに続ぐ、聞こえるのは風が吹く音と草が揺れる音だけだった。

「…………カズキ、あなたあの時泣いた？」

「…………泣いてないと思う、それを通り越すべから哀しかつたって事かな？」

「…………しれないわね」

今日感じた風より強い風が吹くと。

「カズキ、あなたは一度ここから出た方がいいわよ、外の世界の風を感じた方がいいわよ」

「…………だけど」

「だけどもないわよ、昔、もうその人間はいないと思つけどこんな事言つた男がいたは」

懐かしそうに、優しく実の姉のようにカズキに語り掛ける幽香はその男が言つた言葉を口に出した。

「例え怖かつたり辛かつたりする時こそ、逃げるな、闘え」

「逃げるな、闘え……」

「ええ、あなたならずっとそれをやってきたはずよ」

幽香から見たカズキは怪獣達の果敢に立ち向かっていく強い青年だつた、それを言うと本人は否定する、それには肯定した。

「あなたは外の世界から逃げようとしているのよ、変わった世界から、世界や人は変わるものでしょ？」

首を傾げ問うとカズキはそれを肯定。

「幽香、泣いていい？」

「もちろん、私はあなたの姉代わりなのよ」

幽香本人も弟のように思っていた、カズキは泣き出すと抱き寄せ頭を撫で背中を優しく撫でるのだった、数分すると心地よかつたのかそのまま寝になってしまっていた。

「寝ちゃつたわね…………」

「可愛い寝顔ね」

そこに紫がスキマから出てきて顔を覗かせる。

「まったく、本当にこの子あなたの息子？胡散臭くないし、てかそれ以上に純粋で正直者よあなたの子は」

「そりゃ私どゾフリーの息子なんだから」

ウインクし自慢気に言ひと幽香は寝てゐるカズキをおんぶし落ちたメモ帳を拾い買い物に行く所だったのかと思うと紫は藍に買ひに行かせると言いメモ帳を預けその場から歩き出した。

「という事よ、この幻想郷で起きた最大の異変と戦いは」

ダークザギとの激しい激闘とサロメ星人が起こした計画を語ると二人は驚愕しある事がわかつた、カズキには外の世界には帰る場所はない。

「カズキ…………居場所ここしかないのか…………」

「ええ、本当は行きたい、けど怖いのよ、変わり果てた自分の古巣に行くのが」

縁側から空を見上げていると声が聞こえてきた。

「靈夢わーん」

早苗が庭に着地した、買い物の帰りだろ？。

「うひょー！かわい…………あーうおん！」

スバルは最後まで言えずムサシにも殴られた、スバルには容赦ない二人。

「まつたく」

「どうかしたの？」

「買い物帰りに少しお兄ちゃんに挨拶に……お兄ちゃんは？」

同じように買い物に出掛けているから会っているかと思っていたが
会っていないらしくどこ歩いているのか思つていていた。

「おじやまするわよ」

「あ、幽香……カズキ？」

そこにカズキをおんぶした幽香がやつてきた、買い物は藍がすると
伝えておく。

「またかわ……あすとろもんす！」

また殴られた、学習能力ないな。

「賑やかね、いつも通り」

「まあね、悪いわね」

「いいわよ別に」

カズキを縁側に寝かせると男達は男達で話させておき賽銭箱の前に。

「ああ見えて弱いんだから私の弟分は」

「そうね……強がって表に出さないんだから」

太陽の烟で会話を一人に話し幽香は。

「ねえ、もしカズキが外の世界に行く決意したら、私が着いていつ

ていいかしら? どうせ暇だし」

「…………頼んでいい? 最近また結界が不安定だから動きにくくな
りやうなのよ」

「もちろん、あなたはもうカズキの事は諦めているんでしょ?」

早苗に話を振るひと頷き返し今はジンが好きと言える。

「彼は意外にもじてゐから気を付けた方がいいわよ?」

「ですよね………… そうだ幽香さん、もしかしたらお兄ちゃん、写真
持つてると思うんでそれに写った風景と観覧車がある場所に行ける
なら」

「わかつたわ、妹分の頼みも聞いてあげるわ」

「私は妹分なんですね」

弟分の妹分は自分の妹分と同じと言つてお前のものは俺のものと言わ
んばかりのジャイアニズムだった。

「靈夢、弟をよろしくね」

「それはこっちの台詞よ、外に行く時はよろしくね」

それから、光一達三人は外の世界に行き親族に会つてからまた幻想郷に戻り、そして数日後、今度はカズキは外の世界に行く事になり付き添いで幽香が着していく事になりハ雲邸の庭に来ていた。

「この前は買い物代わりにやつてくれてありがとう藍」

「いえいえ、お役に立ててよかったです」

「だからってなんで抱き締めるの？」

なぜか藍に抱き締め頭を撫でられていたがまあそれはそれで気持ちがいいから気にしない事に。

「ところで紫、あなた今の外の世界の地理を理解した？」

「大丈夫よ、昔の地図と今の地図仕入れて照らし合わせたから把握したし宇宙にも行けるわよ、けど今日は私のスキマじゃないし」

そう、今回はカズキがどこまで境を操る程度の能力が使いこなせるかを見るためのテストでもあるため紫は力を使わないのだ。

「じゃあ……」

カズキは精神を集中させ思つがまま、目の前にスキマができた。

「できた……」

「よし、それじゃ行つてきなさい、幽香、後はよろしくね」

「わかったわ」

一人はスキマを通り外の世界へ向かつた。

「大丈夫でしょうかカズキ様」

「大丈夫よ、あの子は私達が思うほど子供じやないわよ、まあまだ

まだ子供だけだし

そして外の世界、メトロポリスと呼ばれる日本の都市の郊外の森の中にスキマが開きそこからカズキと幽香が出てきた。

「到着」

静かに呟いた、いつもなら元気がいいはずだがやはり変わってしまつた故郷に来るのは胸が痛いのだろう。

「行きましょ」

頷くと二人は歩き出し都心を目指す、歩いていく途中無料で配布されている新聞等を取りそれで今は2123年と知る、カズキがいた時代は2021年、本当に100年は過ぎていた。

「本当に100年過ぎた世界なんだ……」

「妖怪で100年なんてあつという間よ、あなただけそつなるかもしぬれないわよ?」

カズキも妖怪とウルトラマンの間に生まれたもの、妖怪以上に生きるかもしね。

「もしかしたら妖怪って気付かないでこの時代に来ていたかもしないわよ？」

「そう……」

自分が妖怪だと知つていれば少しは楽だろうが知らなかつたらどれだけ辛いのだろうと思いつつ今、この時代の事をもつと知ろうと電気屋のテレビを見て地球を侵略するため飛来した凶悪な宇宙人をスーパーGUTSが撃退したというニュースが流れていった。

「これがスーパーGUTS……」

画面に映る機体を見て赤いラインの機体はクロムチェスターに、青いラインはチエスター、黄色いラインの機体は機首に巨大な砲門があるものが空を飛んでフォーメーションを組み宇宙人を攻撃する映像だった。

「前はウルトラマンダイナも居たのにな」

そこに電気屋の店主が店内から出てきた。

「え？」

前にダイナが居た、だがそのダイナは今は幻想郷にいる、どういう意味か詳しく聞いてみると六年ぐらい前にウルトラマンダイナが現れスーパーGUTSと共に戦い、宇宙での戦いにダイナはワームホールに呑み込まれ行方不明となつたらしい。

ウルトラマンメビウスであるビビノ・ミライやジンからダイナとは

共に戦つた事がある仲と聞きM78星雲の世界に迷い込んだと分かった。

「そうだ、聞いていいですか？」

カズキは店主にある事を聞いた、それは憐がいた遊園地の事だった。

「ああ、その遊園地なら知ってるよ」

その遊園地はまだあるらしくアトラクション等は作り直され新しくなっているが自然等はそのままらしい、一人はその遊園地に行く事に。

「まだあつたんだ……」

少しホッとしていた、まだ変わっていない場所がある事に。

そしてその遊園地に到着し園内に入る、アトラクションや建物は変わっていたが配置や道は変わつておらず人々で賑わっていた。

「人が多いわね」

「うん、ここ元々デートスポットに人気だから」

「悪いわね、靈夢じゃなくて」

軽く冗談言つていると田の前で女の子が泣いていた、迷子だろう、放つておくわけにはいかないため駆け寄るうとしたら一人の青年が

颯爽と現れた、その青年の顔を見てカズキは驚いた。

「憐？」

「えつ……」

青年は自分の事だろうと思い反応しカズキを見る。

女の子を迷子センターに送り届けるとレストランで話す事に。

「えつ！まさかあなたが千矢カズキさん！？」

青年はカズキを知っていた、一番驚いたのは100年前ぐらいに行方不明になつた人間がこうして当時のまま戻つてきた事に、そこは深く聞かない事にした。

「俺の名前は千樹燐、千樹燐は俺のじいちゃんです」

千樹燐、彼は三番目のデュナミストだった男でジュネッシュブルーは彼がネクサスとなつた時に使つていた姿だつた。

「じいちゃんは俺が産まれる前に死んじゃつたんですが父さんによく話していたみたいですが、カズキさんはすごい奴だつたと」

自分はそんな男じゃない、と戒めてた。

「そんなんじゃ……」

「あなたはまず自信を持つとこれから始めなさい」

隣で紅茶を飲む幽香に言われ俯きながら「一リラストローで吸い、飲む。

「もつと元氣がある人だったとか聞いていたんですけど……まあいいや」

それから話を済ませ燐に別れを告げて遊園地を後にした。

「…………」

「どうかしたかしら？」

カズキは空を見ながら歩いており不注意だった。

「」の時代があるのは孤門副隊長やナイトレイダーが守り抜いたからなんだよな

孤門一輝、五番田のデュナミスト、ウルトラマンノアにも変身を遂げたカズキの前のデュナミスト。

カズキがいた時代ではナイトレイダーアコニットの副隊長を務めていた。彼やその仲間達が戦っていたため今の時代がある、そう思い始めていた。

「なあ幽香、幻想郷もこの今世界も守るなんて…………」

「できるわよ、あなたなら」

孤門が守った世界、自分が守った幻想郷、この両方を守る、そう決意しようとしていたその時だった。

市街地に巨大な宇宙人が現れた、巨大なハサミの刃のような手に胸の四つの発光体、顔は三つ縦に並んだ発光体が順番に点滅する巨大異星人ゴドレイ星人が破壊活動を始めた。

「宇宙人！」

宇宙人が現れた事により人々は混乱し逃げ惑う、ゴドレイ星人は胸の発光体から紫色の光線を放ち街を焼き尽くしていく。そこにスーパーGUTSの主力戦闘機、ガッツイーグルが到着、赤、青、黄色のレーザーを発射し攻撃するがゴドレイ星人は手でレーザーを跳ね返す。

「今度こそ逃がすな！」

ガッツイーグルにはスーパーGUTS隊長のコウダ・トシユキとカリヤ・コウヘイ、女性の副隊長ユミラ・リョウに科学担当のナカジマ・ツトム、この中では新人であるフドウ・ケンジが搭乗していた。

ゴドレイ星人は前にある街を焼け野原にしてしまった事がありスーパーGUTSは今度こそ倒さなければと思気込む。

「分離して攻撃を仕掛ける！」

「ラジヤー！」と全員返事をするとガッツイーグルは分離、フドウが乗る赤いラインの小型機体 号、コウダとカリヤにナカジマが乗る横に長い青いラインの機体 号、リョウが乗る黄色いラインの機首の砲門が大きい機体 号に分離し攻撃を開始する。

「アレがスーパーGUTS」

カズキはまずスーパーGUTSの戦いを見ていた、ナイトレイダーを継ぐ防衛チームの実力はいかなるものかを。

「ゴドレイ星人の弱点は胸の発光体だ」

ゴドレイ星人は巨大な手で攻撃を防ぐ、だがそこはいつも胸だ、スーパーGUTSはそこが弱点と判断、なんとか手を使わせず攻撃するにはどうするかを考える、

今はウルトラマンダイナもいない、どうすればと思っているとゴドレイ星人は光線を発射、号を靈める。

「うわあつ！？」

「フドウ隊員！」

機体は大きく揺れ操縦不能に陥り墜落を始める。

「つ！」

カズキはエボルトラスターを取り出し、

「孤門副隊長が守ったこの世界も、俺は、守る！」

鞄からエボルトラスターを抜き振り上げると光に包まれその場から飛び去る。

「頑張りなさい」

幽香は光を見送り、ゴドレイ星人は号に光線を放とうとしていたが赤い光球が現れゴドレイ星人を跳ね飛ばすと号の前に止まり巨人の姿となり機体を掴む。

「アレは……」

「まさか……」

「光の……巨人？」

コウダ、カリヤ、リョウの順で喋る、号を助けたのはウルトラマンネクサス・アンファンスだった。

「ウルトラ……マン……」

システムは回復し 号は飛び立つとネクサスは立ち上がり「ゴドレイ星人の方を向く。

「ショアツ！」

構えると走りだし立ち上がったゴドレイ星人にパンチ、キックを食らわしていくがすべて手で跳ね返されていく。

（硬い、コイツのハサミみたいな手は恐ろしく硬い！）

後ろに下がろうとするが振り向くとそこには遊園地が、まだ園内には人が残つており燐や職員が避難誘導を行つていた。

（このままじゃ……）

なんとか遊園地から離そと突進していくゴドレイ星人と押し合いとなるがゴドレイ星人の方が力は強く押されていた。

（ぐつ……！）

するといゴドレイ星人の背中にレーザーが命中し火花が散る。

「借りは返すぜウルトラマン」

フドウはそう眩き二機はゴドレイ星人の背中に攻撃していく。隙ができネクサスはゴドレイ星人を押し飛ばしへジュネッスブルーにスタイルチェンジ、ここは力のジュネッスが有効だと思うがそこはカズキの計らいなのだ、燐の話を聞いたカズキは今回ジュネッスブルーでごり押しで倒そうと、憐のやり方で倒そうとしているのだ。

「シェアツ！」

ネクサスは走り飛び蹴り、パンチと攻撃を加えていき防がれるが遊園地から遠ざけていく。

「フ、ハツ、シェアツ！」

キックを連続で放つていくがすべて防がれたが大きく吹き飛ぶ。

「ハツ、シェアツ！……！」

手を十字に組みクロスレイ・シユトロームを放つがやはり防がれる、防ぐ体勢のままゴドレイ星人は光線をチャージする、前に破壊した街もこの貯めて強力にした光線で焼け野原にしたのだ。

（奴のハサミが硬いなら奴の光線を当てたら）

そう考え強力な光線が放たれるとサークルシールドで受け止めると後退る。

「何をするつもりなんだ……」

ガッツィーグルに合体すると機首にエネルギーを貯めていく。

「ハアアアアアアア…………！」

光線が止まるとバリアで包んだゴドレイ星人の光線を左腕に纏い突き出し放つ青い強力な光線、ナックルレイ・ジェネレードを放つと同時にガッツィーグルはトルネードサンダーという強力な光線を放つ、

ゴドレイ星人は手で受け止めたのだが自分が放つた光線でもあり強力過ぎてハサミは砕け散る。

(よし!)

そして右腕に光の矢が現れ狙いを定めアローレイ・シユトロームを放ちゴドレイ星人を真つ二つに切り裂く。

ゴドレイ星人は両手を下げ後ろへ倒れ爆発、倒されたのだった。

「よっしゃー！」

スーパーGUTSの面々は勝利を喜びネクサスは姿を消した。

そしてカズキと幽香は幻想郷の八雲邸に戻ってきた、紫はいつもより明るくなつていていたカズキを見て安心していた。

「母さん」

「何？」と紫は返すと。

「俺、無茶だと思つ、だけど、俺が守り今も守るこの幻想郷と孤門副隊長やナイトレイダーが守り抜いた外の世界、両方を守りたい、だから」

紫も幽香も分かつた、何が言いたいかを。

「スーパーGUTSに入りたい」「もちろんオッケーよ」

即了承を得られて頭を深々に下げて礼を言つと。

「なら訓練学校に入るため試験受けなきゃね」

カズキはスーパーGUTSに入隊するためにまず訓練学校ZEROに入学するための試験を受ける事になつたのだが、前にナイトレイダーの入隊試験を受けていたためすらすらと入れたのは言つまでもなかつた。

To
be
con-
tinued
.

EPISODE 08 新たな世界へ……（後書き）

因みにカリヤは隊長という柄じゃないと思つたので「ウダが隊長、リョウが副隊長に、フドウ・ケンジは皆さん覚えていますか？訓練学校でアスカと争っていたフドウ・タケルの弟を、彼ならスープーGUTSに入っているはずだと思い入隊させておき 号のパイロットに。

因みにカズキが入る頃にはコウダはいません、参謀になりますので、後ヒビキ隊長はゴンドウ参謀が居なくなつた席に入る形で参謀になつたという設定です。

当分カズキは出ないかもしだれなかつたりするかもしだれませんよ？ジンも入隊させようとしたのですが彼はZAPの史上最強の貨物船のクルーなのでやめました（笑）

次回予告

ムサシ

「リドリアスも元気になつてきたな

白蓮

「怪獣つて可愛いですね」

「ガゴオオオオオオッ！－！－！－！」

ムサシ

「アレは『ゴルメ』！」

コスモス

「絶対に許さない…………絶対に！」

次回【EPISODE 09 爆発する太陽の炎】

感想お待ちしています。

EPISODE 09 爆発する太陽の炎（前書き）

今回はマジギレコスモスが.....コスモスは怒らせたらいけない
ウルトラマン。

登場怪獣

友好鳥獣リドリアス

古代暴竜ゴルメデ

カオスゴルメデ

登場

「リドリアスも元気になつてきただな」

「そうですね」

妖怪の山の裏側、そこに前にカオスヘッダーに寄生されムサシが助けたリドリアスが羽根を休めているのをムサシと白蓮が見ていた。

「これもムサシさんのおかげですね」

コスモスがムサシというのは命蓮寺の妖怪達は知っていた。

妖怪の山に行くと言つたためムサシ一人では危険だと言う事もあり着いてきていたが白蓮自身リドリアスの事を気に掛けていたため一緒にここまで来たのだ。

「そうですか?」

「はい、ムサシさんならカオスヘッダーに取り付かれた怪獣をすべて救えますよ」

リドリアスを救つた事により過大評価する白蓮、その言葉で少し照れて自信を付けるムサシ。

「もつと頑張ります、カオスヘッダーに取り付かれた怪獣達を助け

ていきます！

「その意気ですよムサシさん

微笑み掛けられ頬を人差し指でポリポリ搔きながら更に照れてリドリアスに別れを告げてから命蓮寺に帰つて行つた。

「クエニーツ」

「せついいえばなんでそんなに怪獣を気に掛けるんですか？」

少し疑問に感じた、必要以上に気に掛けているため聞いてみる事に。

「小さい頃、怪獣に助けられた事があるんですね

「怪獣に？」

「はい、ヒドラって言ひ鳥の怪獣なんです」

高原竜ヒドラ、かつて初代ウルトラマンと戦つたが倒されずいざこともなく飛び去つた怪獣で交通事故で亡くなつた子供達の化身と言われておりウルトラマンが逃がしたのは背中に子供を乗せているのを見たため倒さず逃がす事にした怪獣である。

ムサシは小学生の時ハイキングで大室山という場所に行き迷子になり崖から落してしまつた時にヒドラに助けられたらしい、子供達の魂の化身であると言われているため命を落とし掛けた幼い時のムサシを助けたのだろう。

「まだあるんですよ、ハイキングでまた迷子になつた時に、ヤマワ

「ヤマワラワ山脈って所でヤマワラワって怪獣に」

ヤマワラワ山脈に生息するヤマワラワといつ怪獣は童心妖怪と呼ばれており子供や純粋な心を持つ人間にしか見ることができない妖怪として語り継がれている。

「それって運がいいのか悪いのか……」

山で迷子に一回もなるなんて、助けられたからって運がいいのか分からぬいため苦笑するしかなかつた。

「ですよね~」

「そして宇宙でコスモスに助けられて」

今回で二度目、一度あること三度とまじの事だわ。

「しつかりしてやうでビンか抜けてますよね?」

「は、はい……」

しつかりしようと意識するのだがその人間の性はそんな簡単には変えられないためこれから先苦労するのは目に見えていた。

「頑張ってくださいね」

そんなムサシを心から気持ちを込めて応援する白蓮だった。

その頃、地底で何か目覚めようとしていた、古代から生きる暴竜が。

二人が命蓮寺に到着し中に入ろうとすると地震が一瞬だけ起き地面が揺れる。

「地震?」

「そうですね」

「二人共お帰りなさい」

星が気になり中から出てきて丁度一人がいたため迎える。

二人は「ただいま」とか言つと。

「地震あつたけど大丈夫星?」

「はい、中は大丈夫ですムサシ、ですけど唐突でしたね」

先の地震が気になりつつ中に入ろうとしたらまた地震が起ころ、今度は長く揺れ遠くで土が舞い地底から古代暴竜「ゴルメデ」が現れた。

「怪獣!」

ムサシの出番がやつてきた、白蓮と星に「行つて来る」と告げ走りだし変身アイテム、コスマップラックを出す。

コスモプラックを掲げて蓄みたいなカバーが開くと光を解放しムサシはコスモス・ルナモードに変身し巨大化、ゴルメデの前に立ち里に入れさせないように制止する。

(待て！この先は行つてはダメだ！)

ゴルメデに語り掛けるが興奮しているため聞かず火炎弾を連射してきた、コスモスはそれを手刀やキックで切り払いしていき接近していく。

「ハアアアアア……………シェアツ！」

突撃してくるゴルメデの腹に手刀を打ち込み後退させていく、ゴルメデからの攻撃もあるがすべて食い止めていくがある事に気付いた。

(「この怪獣、弱つてない?」)

ゴルメデが弱っているように見えておりこのままではゴルメデを死なせてしまう、そう思つたコスモスは手に光を集めて凶暴化した相手を落ち着かせる光線フルムーンレクトを照射し凶暴化していたゴルメデを落ち着かせた。

(なんで「ゴルメ」は……)

するとゴルメテに不気味な光が纏われる。

(まわかー)

「星、まさかアレは……」

「カオスヘッダー」

ゴルメデはカオスヘッダーに寄生されていたのだ、カオスヘッダーは離れゴルメデの生命エネルギーを吸収し姿を借り実体化、カオスゴルメデとなる。

「シェツ！？」

カオスゴルメデは雄叫びを上げ弱り切ったゴルメデに光線を放つ、
ゴルメデは光線を浴び倒れてしまった。

(ゴルメテ!)

「スモスは『ルメテ』に駆け寄り抱き起こすが息は無く、死んでしまつていた。

「ムサシさんが頑張つて助けたのに……………」
「カオスヘッダーめ……………！」

ゴルメデの亡骸を横にし拳を震わせながら立ち上がりカオスゴルメデを睨む。

「ハアアアアアアアア……………デヤアツ！」

気合いを入れ左腕を最初に挙げて入れ換えるように右腕を挙げ赤い光を全身に纏い青い姿から赤く太陽のような姿に変化し額にサニー

「スポット」という赤いクリスタルに変わっているウルトラマンコスマス・コロナモードに変身した。

「コスマスが、変わった」

「ハアアアアアアア…………『テイヤツ…………』」

コスマスは声を荒ら上げ構えると走りだしカオスゴルメデにキックを食らわせ蹴り飛ばす、ルナモードでは考えられない荒々しい攻撃を繰り出したため白蓮と星は驚く。

「コスマスが…………怒っている？」

感じていた、コスマスは怒り、カオスゴルメデを絶対に許さないという雰囲気を出していたのに。

「テヤアツ…………！」

ジャンプして右足で上段回し蹴りを頭部に食らわせると次は左足で回転して振り向きざまにキックを食らわせ蹴り飛ばしそくに接近し立ち上がった瞬間顎に強烈なアッパーを食らわし腹部に連續パンチを打ち込んでいき背後に回り込み尻尾を掴み振り回して遠くへ投げ飛ばす。

「ハアアアアアアアア…………！」

気合いを入れ両手を上げ赤い光が放たれ前に突き出してエネルギーを圧縮し腕を引いてから思い切り突き出し赤いエネルギー光線を発射するブレージングウェーブをカオスゴルメデに食らわすと粉々に爆発し吹き飛んだ。

「…………」

「スモスは『ゴルメテ』を抱き抱えてござ」ともなく飛び去った。

「ムサシさん…………」

それからムサシは帰つてきた、暗い顔をしながら。

「助けられなかつたんだ…………僕は『ゴルメテ』を…………」

ムサシはもうカオスヘッダーによる被害を出さないことに^誓白蓮達は
そんなムサシを応援するのだった。

To be continued . . .

EPISODE 09 爆発する太陽の炎（後書き）

次回もカオスヘッダー出ますよ、天使面した悪魔が……

次回予告

光一

「誰だ！？」

スバル

「なんで俺、こんな所にいるんだ？」

映姫

「貴方はだいたい……」

咲夜

「天使なんて…………いないわよ、ウルトラマンはいるけどね」

ティガ

「この幻想郷にお前達みたいな悪魔は」

ダイナ

「必要ない！」

次回【EPISODE 10 悪魔の逆襲】

EPISODE 10 炎魔の逆襲（前書き）

タイトルが変わったのは閻魔戦士じゃなくて炎魔戦士でしたので（笑）

間違えました、ごめんなさい、マジでごめんなさい。

登場怪獣

カオスキリュロイド

登場

「咲夜、これいい?」

「いいわよ

紅魔館で光一が咲夜と一緒に掃除をしていた。

「美鈴も毎晩しないでちゃんと門番やつてくれればいいのだけど…

「…」

軽く愚痴を零し苦笑しながら聞いていると外からくしゃみする音といびきが聞こえてきた。

「やつぱり寝てこるわね…」

怒気を放ちながら歩き門へ向かう、光一はこの後起きる事にまたもや苦笑を零したその後に美鈴の悲鳴が聞こえた時だった、悲鳴は途中で止まり様子が変だと走りだそうとしたが体は動かす回りの景色や妖精メイド達は動きが止まっていた。

「な、何が…」

「また君が現れたのか」

すると声が聞こえてきた。

「君がここに現れた所為でこの世界の住人は君達を守護神だと思つてゐる」

「誰だ……正体を見せろ!」

だが声は聞こえなくなり景色が動き出し自分も動けるようになると悲鳴の続きが聞こえた。

「一体今のは…………」

「なんで俺、こんな所にいるんだ?」

「あたいだつて知らないよ~」

ここは三途の川、小町が使う船になぜか死んでもないのにスバルが運ばれていた。

「お説教があるのは確かね」

「お説教のためだけに地獄に行かなきやいけないのー?」

「覚悟しておくんだね」

深いため息を吐き地獄へ向かう遊覧船はどんどんぶらりぶらりと進んでいく、着くまで暇かと思ひきや小町が色々な事を話してくれたため退屈ではなかつた。

「小町つて色んなこと知つてるな

「まあね～」

だが話す時は一方的、死人に口無しとはこの事であるとスバルは実感していた。

「そろそろ着くよ、降りる準備をしたした」

船は彼岸という場所に到着し映姫がいる場所まで歩いていく。

「ここ生者は滅多な事がない限り来れないんだよね、だつてここは元々死者の魂裁いて地獄行きか天界行きか冥界行きつて決める場所だから」

「何！？ 僕なんかした！？ エーキちゃん困らせるような事したかな！？ 答えてよ～まつちゃん！」

まさかここで死ぬような事して裁判に掛けられるのとかあらない事を考え始める。

「死んだら死んだらであたいが送つてやるよ
「嬉しいような悲しきような…………」

この後どうなるか不安にならつ歩いてみると……

「四季様～罪人連れてきましたよ～」
「裁判掛ける気満々！？」
「」苦労様です小町

「ではあたいはこれで」とその場を後にしようとしたら止められた田を離すとすぐサボるから。

「で、なんで俺はお呼ばれ…………まさか俺は実はもう死んでるからここに来れたとか！？」

「違いますよ…………今日は特別に生者であるあなたをここに来させたのです」「

特別にを強く強調しもしかして警められる？とか思いながら話を聞く事に。

「小町からあなたの事をよく伺つのですが」

自分の事だった、小町は自分が知らない所から俺を見て映姫に教えていたんだなと思い自分はいい行いしていると自信があつたが。

「聞くところによればあなたは美しい女性に会つたんびに口説き文句を言つてナンパしているようですね」

雲行きが怪しくなってきた、嫌な予感ばかりしてきた。

「限度といつものもありますよね？ 必要以上に体を触る行為もしてこると小町から聞いています」

余計な事をと思つたが今は田の前の方の話を聞く。

「よつてあなたは性格が曲がりに曲がっています、ですので白黒はつきり付けます」

息を飲む、小町も自然に息を飲む。

「あなたを私の傍に置き私の補佐をしていただきます」

思わず声を上げた、小町もだ。

「上方からも許可を取つてあります、生者をこの地に入れるのは気が引けますがあなたを更正させるためにもあなたをここに置きます」

笑うしかなかつた、お役所の仕事なんてやつた事ないしまさか死者を裁く閻魔様の補佐なんて仕事内容を考えただけでも恐ろしい、嘔吐いたら舌を抜くところを見るのではないかと。

「いいですね？」

とか聞くが閻魔の判決は絶対のため断れずスバルは渋々了承した、映姫の傍に居られるからいかと前向きに考えて。

「手始めに」の書類全部に判子とサインをお願いします」

出して来たのは大量の書類だった、机の上に置いてその上には判子とボールペンが。

「ではよろしくお願ひしますね
「はーい…………とほほ」

小町に救いの眼差しを向けたが「あたいの仕事は死人の魂をここに送り届けるのが仕事だから」と言い残しそそくさと去つた、サボるのは確實だろうと思つたが頼みの綱は切れ、目の前にある大量の書類に判子とサインを付けていくのだが。

「まさか閻魔の補佐をする事になるとは光の戦士も落ちたものだな」

映姫や小町ではない女性の声が響いた、回りを見渡すと回りの景色は止まつたようで動いていた映姫もピタリと止まつていた。そこにフードを被つた女性が入ってきた。

「誰だ？」

このスバルは口説き文句を言わないぐらいその女性を警戒していた、ここは生者は来れない場所、たまたま自分映姫の説教の為に特別な許可があつているがその女性がこの場にいる以上無闇な事はできない、なんでもかんでもナンパしているわけではなかつた。

「お前は誰だ？ なんで俺が光の戦士だと？」

「貴様から感じる光の波動で判る、宇宙に消えた光の波動が」

正体を証すつもりはないらしい、それを察し警戒を解かないスバルは青い光線銃ガツツブラスターを抜き銃口を向けるが不思議な力で弾かれると自分の弾かれ壁に激突してずり落ちると肩を踏み付けてくる。

「私達を倒したいならさつと世人に変身しな」

相手が何者なのか判らない以上無闇な戦闘はできない。

「するもんか……」

「せいぜい強がりな」

女性は消えると回りは動きだし今のスバルの現状を見て映姫は多少混乱する。

「どうしたのですか！？」

「大した事ないから大丈夫」と返しフラフラしながら立ち上がる。

「書類整理今はできそりにないや、幻想郷の方に用ができたから」

リーフラッシュヤーを出すと起動させ等身大のダイナ・ミラクルタiapに変身、テレポーター・ショーンを使いその場からいなくなつた。

「いつもあんなに真剣なら私も文句は言わないんですけどね……小町もそうですし」

問題児の部下ばかり持つて苦惱する上司だった。

「あの声はなんだつたのだろうか……」

紅魔館で未だ掃除中の光一は先ほど自分に話し掛けてきた声の主について考えていた、話の内容からウルトラマンに強い恨みを抱いているのが分かる、もしかしたら以前マドカ・ダイゴから聞いた事がある怪人かもしれない、炎魔戦士の名を持つあの……

「光一、拭き残しがあるわ

「あ、すみません」

考え事に集中していた為掃除が疎かになり窓が綺麗に拭けていなかつたため咲夜から注意を受け掃除に集中する。

「何があつたの？」

普段眞面目な人間が集中していなかつたのを見たら誰でもそう聞くだろう、光一は先ほどの事を話すべきか迷っていたが。

「何かあつたら言いなさい、ここであなたは私が上司なんだから」

その言葉に吹っ切れ光一は先ほどの出来事を咲夜に話した。

「ウルトラマンに強い恨みを抱いている敵ね…………」

「日星は付いてる、おじさんから聞いた事がありかなりの強敵みたい…………僕が勝てるか…………」

不安な表情を浮かべていると。

「勝てるかどうかなんて分からぬわよ誰も」

レミリアは運命を操る程度の能力を持っている、人の運命を見る事もできるが誰もがその運命を辿る事はない、未来は無数に別れていなのだ、木の枝のようだ。

「これから諦めていたら勝てないわよ

最後にそう言い。

「ありがとう、咲夜」

最後に礼を言い再び仕事に戻った。

「スバルはちゃんと仕事をやつてるかな〜」

三途の川の畔、やはりサボっていた、草原に横になつて昼寝をし始めたようとした瞬間だつた。

「な、なんだい！？」

突如赤と青や黄色い光の粒が混じつた渦巻く光が現われた。光は消えるとそこに現れたのは等身大のダイナ・ミラクルタイプだつた。

「ダイナ…………てことはスバル！」

ダイナは光に包まれるとスバルの姿に戻る。

「やっぱサボつてた」

「いやアンタもそれは…………」

スバルもサボりに思われていたようだがどうにか誤解を解く。

「あそこに簡単に行く奴がいるなんてね…………そいつかなりのやり

手だね

「だろ?」と返すと中有の道ちゅううのみちといつ妖怪の山の裏側に位置する道を通る。

「お、屋台だ」

その道は屋台が多く並んでいた。

「ここは生者も来れるからね~ 祭り好きな奴がよく来るんだよ
「まさか地獄の経済状況が悪いからって罪人に働かしてんじや...
.....」

スバルの考えは当たりだった、地獄で責め苦や労働に対して模範的態度であつた罪人の卒業試験的なようなものをかけているが地獄に落とされるレベルの罪人だけあって売上ちょっとまかしたりなどの悪事を働く為、また地獄に逆戻りとループしているらしい。

「何回もえーきちゃんに裁かれるのかよ~」

「そりや幻想郷で悪事するからね、ヤマザナドウは幻想郷の閻魔つて意味だし」

豆知識的な事を言った後に。

「あと元地蔵だし」

「あの道端に置いてあるよ~!~?」

「うん」

「だからあんなに説教臭いのか.....
「まあそれもあるけど.....」

話ながら中の道を抜けていく頃には夜になつており辺りはすっかり暗くなつていた。

「暗いな……」

「いつもより気味が悪い……」

この異様な空氣に一人は氣付いていた、すると妖怪の山から青い火が吹いたと思いきや山ではなくその向こう側から青い火柱が立つていた。

「なんだいアレ！？」

「行つてみるぞ！」

二人は急いで火柱が立つ方へ走りだす。

「アレは……」

紅魔館からでもその火柱は見えており。

「…………呼んでる」

光一は感じていた、その火柱に呼ばれている。

「あの火柱に？」

レミリアに問われ頷くとスパークレンズを取り出す。

「行がないと…………」と呟いた後、光一は走りだしていった。

「光一は勝てるのでしょうか？」

「さあね」

レミリアには見えていた光一の運命が、今はこの場では言わなくてもいいことだろうと口を閉じた。

魔法の森の中、そこに火柱は消え巨大な人型の巨人が立っていた、灰色の骨のような浮き出た模様に胸の発光体、そしてそのおぞましい顔に足に纏つた青い炎が特徴のカオスキリエロイドが。カオスキリエロイドは暴れる素振りを見せなかつた、暴れるを目的にしているようではなかつた。

「アレは…………」

ムサシはその巨人を見て恐怖を覚えた、異様な殺氣に。

「ムサシさん、あの怪獣は…………」

白蓮に問われ過去にキリエロイドという怪人が現れたと教えその怪人に似ていると、そうカオスキリエロイドは炎魔戦士キリエロイドにカオスヘッダーが寄生した姿だがキリエロイドはどういう系列でカオスヘッダーに寄生されたか不明だがその姿となり何かを待つていた。

その待つていた者が目の前に降り立つた。

「チョッ！」

ティガ・マルチタイプがカオスキリエロイドの前に立ちはだかる。カオスキリエロイドはティガを待っていた、キリエロイドは一回現れ一回共ティガに倒されたという因縁がある、その為ティガが現れるのを待っていたのだ。

（キリエロイド、お前達はガタノゾーラが現れた時、世界を捨てて逃げたと聞いているぞ）

まずは話し合う事にした、なぜこの世界に帰ってきたかが判らないからだ、どういう目的なのかが判らない以上無闇な戦いは好ましくないと想い。

（簡単な事だ、我々はここが多元世界になり戻つて来たのだ、この力を手にするために）

手に青い炎を出しそう言ひ、カオスヘッダーの事だろう、キリエロイド達は戻つてくるつもりだったのだ、ウルトラマンを倒す為に、その為の力を手にする為に自分の世界を捨てて力を求め。多元世界になつたのをどこかで知るかもしくはどこかの世界にいた時に巻き込まれた、そのどちらかが原因でこの世界に戻つてきたのだ。

（そうか……その為に、光を受け継いだ僕を倒す為にこの幻想郷に……）

（そう……だがもう一人）

ティガ……自分以外にもう一人、名前が上げるとしたら一人上がつ

た。

(ウルトラマン……ダイナ……)

光を受け継いだ者、ジングウジ・スバル、ウルトラマンダイナだった、ダイナはアスカ・シンが宇宙に消えた父親、アスカ・カズマが光となつたものと同化し変身していた、今のスバルはアスカと同化している形でダイナに変身している、

光を受け継いでいるようなものなのだ、ダイナ……スバルも。

(これまで3000万年前の恨みも晴らせる…………この怒りの炎でええええええええええつ…………!…………!…………!)

カオスキリエロイドは右腕を伸ばして走りだしその右腕を振り上げ拳を振り下ろすが右に移動して攻撃を避け。

「ハツ！」

そしてカオスキリエロイドに胸に手刀を打ち込み、伸ばし切つていた腕を掴み背負い投げを食らわす。

「キリイ！？」

カオスキリエロイドは体を跳ね上げ立ち上がる。

「ギリイッ！」

するとカオスキリエロイドはその場から消えた。

(消え……ぐわあつ！？)

すると背中に火花が散り前のめりへ倒れ膝を付く。

(高速移動……)

カオスキリエロイドは高速移動を繰り出してきたのだ、俊敏さが上
がり更に足に磨きが掛かった為その俊敏さを利用して高速移動をし
ているのだ。

上がったのは俊敏さだけではなくその足に纏う青い炎、青い炎は赤
い炎より温度が高く。

「キリイイイイーツ！…」

「グワアツ！？」

手から火炎放射を放ちティガに追い討ちを掛けた。

「ん~…………ハツ！」

ティガはそのスピードに着いていく為、スカイタイプにチョンジするが。

(遅い！)

(ぐつ…………！)

だがカオスキリエロイドのスピードに着いてこれず打撃を何発も食
らいボロボロになっていく。

(見えない…………どうすれば…………)

スバルと小町はカオスキリエロイドと戦い苦戦するティガを目撃。

「ちょっとヤバいんじゃないのアンタの友達！」
「ヤバいどころじゃねーなありやあ」

リーフラッシュジャーを取り出し変身しようとが空から何かが急降下しキックを放つ、二人はギリギリのところを避け自分達を攻撃した者を直視する、それはティガと戦っているカオスキリエロイドだつた、もう一体いたようだつた。

「まさか強敵がもう一体いたなんてな…………！」

今度こそリーフラッシュジャーを起動させダイナ・ミラクルタイプに変身、スバルはミラクルタイプの方が戦いやさしいようだ、スバルは手品が得意で手先が器用なため奇跡の技が自由に使えるミラクルタイプが好みなのだ、アスカは前に突き進み力でねじ伏せるストロングタイプが好みだが。

「さあ、行くぜ！」

ダイナが構えると小町も大鎌を持ち構えるとカオスキリエロイドはティガと同じように高速移動をしやはり姿を消すが……

「高速移動しているところ悪いけどあたい、距離を操る程度の能力、距離を詰めたり離したりする事ができるのさ」

カオスキリエロイドの背後に小町が居り大鎌で一閃されるが鎌自体

には切れ味がないため切るではなく打撃によるダメージに、因みに鎌を持っているのは死神は鎌を持っていると信じてる人々の為に「死神は本当に鎌持ってるんだ~」という感じ、つまりサービスで持つていてる。

「ギリイツ！？」

一閃された後、バランス崩し勢いが余り転がり込む、止まった後に立ち上ると目の前にダイナが迫ってきておりバク転し距離を離すが背後にダイナがテレビーションで回り上段キックを食らわし後頭部を蹴る。

「ショワッ！」

その後にチョップを食らわす、次に両肩に両手でまたチョップを食らわしていき体を回転させ思い切り足を伸ばしてカオスキリエロイドを蹴り飛ばすとその背後には小町があり。

「ヒツヒツヒツ！」

大鎌を横に振るい一閃しカオスキリエロイドは体がくの字に曲がり地面に落下して大きく弾む。

ダイナと小町はカオスキリエロイドに対抗できる能力があった為、それほど苦戦はしていなかつた。

「キリイイイイイイイーッ！……！」

火炎放射を一人に向け放つ、ダイナは前に立ちウルトラバリヤーで火炎放射を受け止める、威力が強い為圧されていると思いまやそうでもない。

「ハアアアアアアアア…………！」

受け止める火炎放射は光に変換されていき、カオスキリエロイドの攻撃が止まるとその吸収したエネルギーを体内に溜め込んでおきウルトラサイキックというサイコキネシスでカオスキリエロイドを宙に浮かせる。

「キリイイイイーツ！？」

藻掻くが地面には降りれず、また火炎放射を放つがそれが命取りだつた、同じようにウルトラバリヤーで防ぎ、攻撃が止まつた瞬間手にカオスキリエロイドの火炎攻撃を吸収し光に変換されたエネルギーを伸ばした右手からすべてレボリュームウェーブ・ゼロとし打ち出し、カオスキリエロイドに直撃し爆散した。

「見たか？ 僕の超ウルトラスーパー・デラックスマジック！」

変身を解いてスバルの姿に戻る。

「す」「いな～まさかあんなことまで」

「まあな、はい」

すると手から花をいきなり出した。

「手品には仕込みをしておかぬきやな
「こんな事もできるんだ～見直したよ」

見直すなら役所仕事させられる前にやつてくれと言いたいがもう覆せないだろうと泣くしかない、そして後はティガである。

ティガは肩で息をしており身体中傷付いていた、持久力がないスカイタイプでは尚更。

カラー タイマーは点滅しており、タイプ チェンジもさせる暇を与えてはくれない為 パワーにもマルチにも戻れない、どうしたらと思つてはいるが突然回りの時が止まつた、昼間にカオス キリエロイドが時を止めたような嫌な空氣ではなかつた。

「早く敵を倒しなさい光一」

後ろに咲夜がいた、どうやら自分とティガだけは動けるように時間を止めたのだろう。

頷いて返すとカオスキリエロイドがいる方を向いてパワー・タイプとなりその背後に回り込み羽交い締めにすると時間は動き出す、カオスキリエロイドは何が起きたか理解できず藻搔くがパワー・タイプの力の前にはどうする事もできず、そのままバツクドロップを食らい後頭部を強打、立ち上がろうとするが強烈なパンチが腹部に叩き込まれくの字に体が曲がりその後に回し蹴りで頭を攻撃され。

「タアアアアアツ！！！！！」

アームハンマーでまた後頭部に攻撃され前に屈むとかかと落としを背中に食らい地面に叩き付けられる。

カオスキリエロイドを頭が下に向けて持ち上げそのまま一気に落としウルトラヘッドラッシュジャーを食らわせてから両足を掴みそのまま振り回してジャイアントスイングでカオスキリエロイドを投げ飛ばす。

「ん……ハツ！」

マルチタイプに戻ると腕を後ろに引いてから前に伸ばし手を重ね両手をゆっくり横に広げると暗闇を照らす一筋の光が現れる。

「フツ…………タアアアアアツ…………！」

腕をL字に組んでゼペリオン光線を発射、立ち上がったカオスキリエロイドの胸に命中し、光線が止まるとカオスキリエロイドは爆散し倒された。

（終わった…………）

ティガは星が輝く夜空へ飛び去った。

「咲夜」

紅魔館、レミリアは紅茶を入れる咲夜に話し掛けた。

「なんでしょうか？」

「あなたが助けにいかなくても光一は勝てたわよ」

レミリアが見たのはそういう運命だった、ティガフリー・ザーを放ちカオスキリエロイドの足を止めてからパワータイプに戻り猛反撃を食らわしてからマルチタイプに戻りゼペリオン光線で倒すという運命だったらしい。

「そうでしたか」

「ええ、さて、仕事中に紅魔館から抜け出した処罰はござりまじょうか？」

「なんなりと」

「冗談半分でそう言われているのは分かるがあえて言わずレミリアに言葉を返す咲夜。

光一は疲れており帰つてきた瞬間倒れて眠つてしまつた為、部屋に運ばれて寝についていた、またキリエロイドが攻めてくるかもしれない感じつつ……

「今回の働きぶりは評価します」

一方スバルは映姫の所に戻っていた、言われていた仕事をしながら話を聞きつつ、力オスキリエロイドを倒したのは評価されたようだ、すぐに危険な存在だと感じたその感の鋭さも。

「いやあ～まあ、どんなに可愛い女の子だからって危ないのぐりい
は見分け付くよ」

サインや判子を付けつつ返していく、事務仕事は得意じやないと書いておきながら得意だった、理由は始末書をよく書かれる事が訓練学校時代多かつたから。

「少しば見直しましたよ、よくやつましたねスバル」「ならさなられ」

何かを求めるような子供の目で作業を止めて詰め寄る。

「な、なんですか?」

少し動搖しつゝ問ひつい。

「見直したなら俺とテートしよーよーえーきちやん」

その瞬間、自分の発言に後悔した、すぐに調子に乗つてきた為。

「あなたという人は…………罰として」

ドンと出したのは自分の分の書類の山だった。

「私の分もやつてもらいましょう」

To
be
con-
tained.
..

仕切りといつ名のキャラ紹介（前書き）

すみませんが一話から直します、仕切りとしてキャラ紹介を投稿します。
ではキャラ紹介どうぞ。

仕切りといつ名のキャラ紹介

八雲カズキ

年齢／英雄光時 19歳～現在20歳

性別／男

イメージ／＼＼＼三木眞一郎

種族／妖怪／ウルトラ属

好きなもの 博麗靈夢、カステラ、和食〇〇洋食

嫌いなもの ダークザギ、ザ・ワン、トマト、キレた時の八雲紫（
BBAに反応した時）

ウルトラマンネクサスに変身していた青年だが今は分離しネクサスの本当の姿であるウルトラマンノアが残した光でネクサスに変身しているがただその光で変身しているのではなく父親の血、宇宙警備隊ゾフィーの光も受け継いでいるためその光も合わせ変身している。

幼少期は幻想郷の治安が悪く母親の八雲紫の外の世界に住む人間の夫婦の知り合いに預けたが新宿でのビースト・ザ・ワンの事件に

よりその親代わりを失い施設で暗い幼少期を過ごし里親をことじりとく断つてきたがダークザギの事件から一年後、ナイトレイダーの孤門一輝の「諦めるな」という言葉に田に光を取り戻しナイトレイダーに入隊するのを夢見て入隊するが三ヶ月後、紫や参謀のイラスト레이ターである吉良沢優により幻想郷へ誘われる。

そこで博麗靈夢と出会い博麗神社に住むことになり様々な縛を築き上げてきた、だがサロメ星人の計画により様々な世界が融合する第一次ギャラクシークライシスが起こり外の世界の時代が100年以上進みカズキがいた時代ではなくネオフロンティアと呼ばれる時代となってしまい自分の世界には帰れなくなってしまった。

絶望をしたがウルトラマンメビウスであるヒビノ・ミライのおかげ立ち直り本当の母が紫と知り、それから靈夢に想いを告げ恋人同志となりその後ノアに変身しザギとの戦いで勝利しノアと分離、ノアの光を受け取りその後もウルトラマンネクサスとして幻想郷に生き残ったスペースビーストや怪獣と戦い平和を守っているがそれにより靈夢は不安に感じている。

容姿は金髪でアホ毛が跳ねている、服はナイトレイダーのズボンを履き上着は肩に背負うように掛け左腕には通信機であるパルスブレイガーを装着している。

年齢（地球人年齢）／英雄光、現在20歳

性別／男

イメージCV／宮野真守

種族／ウルトラ属／？属

好きなもの 仲間、ハヤシライス、コーヒー、東風谷早苗？

嫌いなもの ウルトラマンベリアル、修行（だけど努力は怠らない）、寒い所、八坂神奈子と洩矢諭訪子（嫌いと言つよりは苦手）

ウルトラセブンの息子の若き戦士、ウルトラマンゼロだが母親が不明のため種族はウルトラ属しかわからない。

左腕にはウルトラゼロアイを収納するウルトラゼロブレスレットが嵌められておりノアからバラージの盾の欠片を授かつたが東風谷早苗に首飾りとして渡した。

光の国で最大の禁忌を犯し掛けたがまだ父親とは知らなかつたウルトラセブンに止められK76星でウルトラマンレオの元で修行し悪のウルトラマン、ベリアルが解放された時、スペースペンドラゴンのクルーと共にベリアルを倒しその後ペンドラゴンと共に宇宙を駆けその際にセブンが別の宇宙で同化したジンという青年の姿を借りている。

サロメ星人の計画によりネクサスの宇宙の幻想郷に迷い込み自分の宇宙も融合してしまうがカズキ達と共にダークザギを倒しその後ペンドラゴンには戻らず幻想郷でゆるやかに平和を守りながら生活している。

容姿は少し長い黒髪の青年で服はいつもZAPの制服をズボンに

上着は腰に巻いている。

Episode · 01【夜戦 ナイトバトル】(前書き)

リメイクスタートです、当分こつちはネクサス、メビウス、ゼロの三人で過ごしたいかと。

登場怪獣

プロフタイプビースト・ペドレオン（グロース）

登場

ここは幻想郷^{げんそうきょう}、東の国、日本のどこかにある不思議な異空間の中にある土地、ここは普通の人間は行き来できず特殊な方法でないと来れない場所である。

ここには人間だけならず妖怪や幽霊も暮らしている。

この不思議な世界、だがあなた方が知る幻想郷とは少し違います、この幻想郷には妖怪だけではなく怪獣という驚異が存在しています、なぜ現れるようになつたのか、それは今から半年前、暗黒の破壊神ダークザギが復活するために送り込んだからだ。

最初はスペースビーストと呼ばれる人間の肉体と恐怖を捕食する種類の怪獣だけだったがある宇宙人の計画により様々な次元の怪獣や宇宙人達が送り込まれ更には幻想郷で外の世界と呼ばれている地球が100年以上も時が経過してしまつたが宇宙人の計画に利用された幻想郷だけはそのままだつた。

その計画でダークザギの復活は早まつたがその破壊神と戦い勝利した英雄がいた、その名は……

ウルトラマンマジン.....

Episode .01

夜戦 ナイトバトル

ある晩、魔法の森と呼ばれる森の中、ここはじめじめしており普通ではない化け物茸の胞子が舞つており、この場にいたら普通の人間では瘴気に長時間は耐えられないため妖怪もあまり近付かないが瘴気に耐える人間にとつては安全であり、その茸の胞子の幻覚には魔法の力の源である魔力を高める効果があるため魔法使いを出すものが好んで住み着くことがある。

だが、妖怪すら近付かない森でも足を踏み入れその胞子を吸収し力を貯えているものがいる、それは…………怪獣である。

「グエエエエエエエー…………！」

どんなに高い木よりも巨大な生物が森を横断していた、ナメクジのようで腰の辺りまで縦で左右に開く口を持ち、頭部に一本の短い触手が生え、両手は無知のようにしなやかな三本ずつ触手が生えており、背中にコブみたいなものが付いたプロブタイプビースト・ペドレオ

ン（グロース）が森の先にある人間が住む人里を目指していた。

「夜中からご苦労なこつた！」

ペドレオンの進行方向に篝に跨り夜空を自由に飛ぶ白黒の服でとんがり帽子を被った金髪の少女が現れた、彼女の名前は霧雨魔理沙、この森に住む魔法使いである。

「グエエエエ～！」

ペドレオンは頭部の触手の間から火炎弾を発射し前方にいる魔理沙に攻撃を仕掛けた。

「おつヒー！」

体を右斜めに向けて移動し火炎弾を避けるとレーザーを放つていく、これは幻想郷で行われる弾幕ごっこで使う攻撃で殺傷性は場合によりできるため今放っているのは殺傷性があるレーザーである。

「キュイイイイーン！？」

レーザーはペドレオンの右肩に命中し火花が散り苦痛の鳴き声を上げると左腹部や右側面の首筋に火花が散る。

「靈夢！ アリス！」

「夜中から物騒なものと戦つてるわね」

そこに黒髪の赤いリボンを付け紅白の巫女服を着た博麗靈夢と金髪の洋風な服を着たアリス・マーガトロイドが駆け付けた。
はくれい れいむ

「アイツは？」

「つちのは今別件で母親の所よ」

軽く会話をしているとペドレオンは大きな鳴き声を上げズシズシと前進していく。

「今はペドレオンを止めないとな」

「そうね…………じゃあジンちゃんは？」

「アイツは…………知らないわ、興味ないし、つちの婿がカツ「いいから」

さづげなくとこづよつは堂々と惣氣の靈夢。

「いや、ジンちゃんが」

「カズキよ」

「てかアリス、ジンはライバル多いぜ？」

なぜか誰がカツ「いいか」と言ひ合ふことなるがペドレオンの鳴き声で目的を思い出す。

「つち今は本当にロイツをどうにかした方がいいぜ」

ペドレオンの方を向くとスペルカードといつ彈幕!ึじで使う物を出し。

「せつせと倒して寝るわよー。」

「おうー。」

「ええー。」

自分達より巨大な相手に挑んでいった。

「これで終わりかあ？」

「はい」

魔法の森とは違う離れた場所にある森の中、そこに金髪の髪の毛でダークブルーの特殊な布でできたズボンと上着を着た青年、この物語の主人公である大型の銃^{トラン}ディバイ^{チャ}ーを扱いだハ^ヤ雲^{くも}力^{カズ}キと狐の大きな尻尾を生やし中華風な服を着て頭の耳を隠すように帽子を被つた狐の妖怪、ハ^ヤ雲^{くも}藍^{らん}が小型のペドレオンを掃討した後だった。

一人は家族みたいなもので藍は力^{カズ}キの母のハ^ヤ雲^{くも}紫^{ゆかり}の式神、簡単に言えば手伝いとかそんな感じである、ハ^ヤ雲^{くも}紫^{ゆかり}とは幻想郷を隠す結界を管理する妖怪であり最古の妖怪でもある、詳しい説明は本人が^ヤ出た時に。

「^ヤ苦勞様でした力^{カズ}キ様、近頃ここ一帯にペドレオンが大量発生していたので森に住む妖怪に危害を加えていたので」
「そつか、だけど藍もご苦勞さん、後は俺がやるよ」

もう終わつたはずと首を傾げる藍、力^{カズ}キは上着のチャックを下

「懐から白く赤と青のラインが入った短剣型のアイテム、エボルトラスターを取り出すと真ん中に埋め込まれたクリスタルが発光していた。

「そういう事ですか」

「ああ、じゃあお休み藍」

「先に休ませてもらいますね」

カズキはエボルトラスターの鞘を握ると抜き上げ光が解放され包み込まれ赤い光の球となり飛び立つた。

「キュイイイイン！」

「いつにもましてしつこにな！」

魔法の森、ペドレオンの進行は止まらずこのままでは里に入られてしまうというギリギリの所だった。

「てかジンはなんで来ないんだよ！」

「多分ねてるわ、あの人寝たら朝まで起きないから」

「なんでお前は人の生活リズム知ってるんだよアリス」

ペドレオンは両手の触手を振り回し接近できなくする。

「あーもう一ペドレオンのくせに！」

キレ掛けている靈夢、だがそこに光の球が飛来しペドレオンにぶ

つかり跳ね飛ばした。

「来たみたいだぜ」

「別件は終わったのね」

光の球が消滅するとそこにしゃがんで頭を前に突き出している状態で地面に着地した胸に赤いY字のクリスタルが付き一つの乳白色に輝く眼がある銀色の巨人…………ハ雲カズキが変身したウルトラマンネクサス・アンファンスが駆け付けた。

「シユウウウウアアアアア…………！」

右腕を上に向かって曲げて左腕を拳にし前に突き出す構えを取る。

「キュイイイイン！－！」

ペドレオンは立ち上がり戦闘意識を見せ高々と鳴き声を上げるとズシズシと走りだしネクサスに立ち向かっていく。

「ショッ－！」

一瞬ピンと腕を伸ばすと走りだしペドレオンとぶつかり合い取つ組み合いとなり押し合いとなる。

「ショアツ－！」

右腕で首筋にパンチを叩き込むとずつしりとした重い音が響き左足でロー・キックを繰り出しペドレオンを攻めていく。

「フ、シユワツ－！」

ペドレオンを持ち上げ飛行機投げをし遠くへ投げ飛ばすと左側で両手を添えその中に青白い稻妻が走りスパークする。

「靈符『夢想封印』！」

スペルカードはそれに書かれた名前を宣言しなければならないため不意討ちなどはできない、靈夢が使用を宣言すると複数の光弾が放たれていく。

「恋符『マスター・スパーク』！」

魔理沙は三二八卦炉という道具を出してそこから超極太のレーザーを発射し最後に。

「魔光『デヴィリーライトレイ』！」

アリスがスペルカードの使用を宣言して光線が放たれるとネクサスは腕を十字に組んで薄いピンクに近い赤で輝く光線クロスレイ・シユトロームを放つた。

「ギュイイイイイイイイイーン……………？」

攻撃はペドレオンを直撃し大きな苦痛の鳴き声を上げ、光線が止まるごとにぐるぐると倒れつつ体が青白く発光し四散しペドレオンは倒された。

「終わった終わった」

「最近自棄に多いわね、ペドレオンの出現率」

ダークザギが倒され約三ヶ月、ペドレオンの出現率が高く昼夜問わず現れ靈夢などの実力者が相手をする日々が続けていた。

「…………」

ネクサスは赤い光を放ちながら薄くなつていきその巨大な姿を消した。

「消えたぜ？」

「大丈夫よ」

靈夢の背後に亀裂が入り空間に中が田だらけの隙間ができる。

「迎えは来てるから、じゃあお休み」

その中に入ると隙間は閉じた。

「じゃあわたし達も帰ろつぜ、お休みアリス

「お休み魔理沙」

一人も血モへの帰路に着いた。

「」は博麗神社、ここに靈夢が巫女として務めている、ここから外の世界にも行けるが一番の問題は賽銭箱がすっからかんなことだけ。

「ふう……着いた着いた」

鳥居の内側に隙間が開き中から靈夢が出てくる、賽銭箱の前にはカズキが立っていた。

「お帰り靈夢」

「お帰りはこっちよ、神社から出掛けでざんくら経つたと思ってるのよ」

カズキはこの博麗神社に靈夢と共に住んでいる、それは元々カズキは外来人だが妖怪の息子でもある、理由は母親の紫が外の世界の人間の夫婦にまだ赤子のカズキを預けたからだ。

外国人とは外から来た人間ということである。

カズキが住み始めたのは約十ヶ月ぐらい前であり幻想郷に送り込まれた時に靈夢と出会い外の世界に返すまで神社に住む事になつたがスペースビーストが現れた事により幻想郷に滞在する事になつたのだが今はこの幻想郷の立派な住人でもありウルトラマンノアからネクサスの光をわけ与えられその光で変身し怪獣やビーストと戦い幻想郷を守っている。

「そういうや朝から藍に連れられて出掛けたままだったな、ただいま靈夢」

「お帰りカズキ」

挨拶を済ませると微笑み合い裏口の方に回りそこから神社の中に
入る。

「お風呂入つてから寝る？ 汗でびしょびしょでしょ？」

「そうする、俺沸かしてくる」

「じゃあお茶準備して待ってるわよ」

数分後、火を起こして湯船の湯を沸かしている間に居間でお茶を
飲んでいた。

「後どんぐらい？」

「後3分」

丸いテーブル、それを挟むように座りまるで夫婦のようだった、
早く結婚しちまえよという話だが。

「どっち先入る？」

「昨日俺だから靈夢先に入つて」

「オッケー」

何気ない話をし風呂を入り寝間着に着替えてそれぞれの布団に横
になり灯りを消して眠るのだった。

俺は思っていた、危険だが穏やかなこの日常を一生続けて外の世界とは関わらないで生きていきたいと。

To be continued . . .

Episode · 01【夜戦 ナイトバトル】(後書き)

このネクサスあまりメタファイールド使わないな…………と思つてたり。

そして今回はアンファンスだけでした、あまりないような、うちにでは。

次回予告

カズキ

「これがここで…………」

靈夢

「またペドレオンみたいよ」

文

「号外～！ 号外～！」

ミライ

「やはり変だ…………何が起きているのだらつか」

カズキ

「『ゴルゴレムなら の出番だ…』

次回『Episode・02【俺の翼
マイウイング】』

Episode · 02【俺の翼 マイワイング】(前書き)

寒いですね、こんな時こそ英雄を聴いてテンションを上げるか青い
果実の疾走感でテンションを上げるか激走戦隊カーレンジャーのO
P聴いて元気出すのが一番です！

登場怪獣

岩石怪獣サドラ

インビジブルタイプビースト・ゴルゴラム

登場

Episode · 02【俺の翼 マイウイング】

Episode · 02

俺の翼 マイウイング

「これがここで……これがそこだな」

ある日、カズキはダークブルーで左右に二つずつタンクを搭載した機体、クロムチェスター の整備をしていた。

「カズキ～、お茶淹れたけど飲む？」

靈夢が空を飛んでやってきた。

「あ、飲む飲む」

スパナとか工具を座席に置き、左腕のパルスブレイガーや使いコックピットのカバーを閉じる。

「油と鉄臭いわね……」

「お茶飲んだら風呂入らうつかな」

カズキも空を飛ぶことができる、並んで飛んでいると博麗神社の境内に入る影が見えた。

「あの速さは……」

「文ね、完璧」

魔理沙も飛行速度は速いがそれをも越える速さの妖怪がいるのだ。

「どーせまた勧誘でしょ？」

「だらうね」

二人は境内に降りると賽銭箱の前に短い黒髪でワイシャツとスカートを着て帽子を被つて首にカメラを掛け肩掛けのカバンを掛けた少女が立っていた。

「どーも～清く正しい文々。新聞の射命丸文でーす」

鴉天狗の妖怪で文々。新聞を発行している射命丸文であった。

「勧誘はお断わりよ」

「そんなつれないこと言わさんなって、これを見てください

一枚の写真を出し靈夢に見せると。

「これはー?」

「あ、」

藍の尻尾に抱き付いて気持ち良さそうにモフモフしているカズキが写っていた。

「カズキ……」

相手が女性なためやはり嫉妬を妬くのか黒いオーラを放ちながら近付いていた。

「あ、いや、だつて藍の尻尾つて気持ちが良いし……………てか藍とは姉と弟みたいな関係……………」

弁解しようと言葉を述べていいくが効果はなくど」からか御祓い棒を取り出しだ。

「待て待て待て！ それでどうするつもりだ！？」
「問答無用！」

数分間、棒で叩かれる音と断末魔が博麗神社の境内で轟いた。

「いやあ、夫婦の仲が宜しいところを見せてもらいました」

ちやつかりと今の惨状をカメラに収めていた。

「まだいたの？ 勧誘はお断わりだから早く山に帰った帰った」
手をぶらぶらさせて帰れと表していたが。

「あややー、まだカズキくんの秘蔵写真があるのにな～」
「ちょうどいよ」
「なら私の話を聞いてくださいよ、カズキくんもいつまでも死んで
ないで」

少し見せられないぐらい血が流れているがすぐに立ち上がる。

「たくいつの間に撮つてるんだよ」
「幻想郷最速の私にかかるべ一瞬通り過ぎれば撮れますよ」

「ヤーヤしながら血漫氣に話す文。

「能力の無駄使いだろ」

「そうね、その胸も無駄使いだと思うからカズキ、境界を操つて私
の所に移して」

因みに今この場にいるパパラッチな天狗の胸は大きいが紅白の巫
女は少しづか膨らみがない、そっちがあまり目立たないからか脇を
出してるのだろ?!

「すごく失礼な説明が……………でどうなの?」
「無理言つな」

境界とは空間の事を差しておりそれを操つたりし空間にスキマを開けて別の場所に移動できたりする、

母親が境界を操る程度の能力を持つていてるため息子のカズキにも受け継がれている。

靈夢は空を飛ぶ程度の能力、文は風を操る程度の能力を持つているが前者の能力は人間の実力者や妖怪なら誰でも、カズキはコツを掴んすぐにマスターした。

「話が脱線してきたので話を戻しますよ」

カバンの中から何枚か写真を出し一人に見せる。

「何よこの写真」

「カズキくんなら気付くかもしません」

「…………ここ、全部今回ペドレオンが出現してる場所だ」

その答えに頷く、そう文が撮影したのはここ数日ペドレオンが出現した場所であるが。

「後…………ザギを倒す前に出現したビースト達の出現場所だ」

ザギが倒される前にも様々なスペースビーストが出現した、今回ペドレオンが出現している場所はカズキがまだ“本物”的ネクサスとしてビーストと戦った場所もある。

「なんで前にビーストが出現した場所にペドレオンが大量発生してるのよ？」

「そこに残った肉片からのビースト振動波に釣られて引き寄せられてるのか？」

ビースト振動波とはスペースビーストが放つ独自の波長である、それにペドレオンが釣られていると推測する。

「妖怪の山にはバグバズンも現れます」

バグバズンとはインセクトタイプビースト・バグバズンでカブトムシ等の昆虫の性質を持つたスペースビーストである。

「バグバズンがな……そりゃデイバイトランチャー量産進んでるの?」

「それはにとりが、何個か生産して天狗達が使用してます」

河城にとり、河童の妖怪の少女、この妖怪の山とは妖怪が住む山

のことで山と言えばそこである、そこに住む妖怪達の独自の社会が成り立つており繩張り意識も高いがスペースビーストの事件以降は人間の住む人里と少し繋がりが太くなつた。

河童は外の世界と同等、もしくはそれ以上の技術力を持っている。

「バグバズンも集中砲火でしたし、これが今日の号外の記事の内容です」

「なんだ、結構今日の記事は為になるじゃない」

「結構お厳しいようで」

「ペドレオンはクラインも出てんだよな」

「」の前藍と撃退したのが小型のペドレオン、クラインであり飛行形態はフリーゲンと呼ばれる。

「小型ビーストは多いわね、クラインやビーセクタとかフログロスやアラクネアとか」

ビーセクタはバグバズンと同じインセクトタイプビーストで人間より小さいが大群で襲撃する。

アンフィビアタイプビースト・フログロス、10m、巨大なもので40m以上越える時もある、火炎弾を放つ事ができる。

インセクティボラタイプビースト・アラクネア、2mか10m以上ぐらいの大きさで視覚は退化しているが嗅覚と聴覚が発達したビーストである。

「小型ならスペルカードを殺す氣で使えば倒せるけど大型になると束にならないとキツいのよね」

基本スペルカードは非殺傷で弾幕“ごっこ”のため殺せないがそれは本人の意志である。

「だから俺やジン、ミライがいる」

ジン、モロボシ・ジンはウルトラセブンの息子のウルトラマンゼロであり人里に今は住んでいる、ミライ、ヒビノ・ミライ、ウルトラマンメビウスであり同じく人里にある寺子屋に住んでいる。

「大型ビーストや怪獣はアンタ達に任せるとわよ」

「ああ」

今日はビーストの出現場所についての話だけだと思いまさや。

「まだありますよ」

次は別の写真を出した。

「混乱すると厄介だと思いましたので記事にはしていないのですが」

その写真には崖の岩肌が何かに噛まれたよつた後があった。

「捕食した後かと…………」

被害者が出た事により悔しがるがもうこれ以上被害者を出さない
為にもその事を伝える。

「「」の歯形、どつかで見た事あるよつな…………」

「めかみを指でなぞりながら脳に記憶した情報を思い出すやうとしていた。」

「田撲者によると近くで巨大な結晶を見たよつです」
「結晶…………「ゴルゴレムか」

インビジブルタイプビースト・ゴルゴレム、別の空間に入り移動
する事ができるビーストである。

「大型ビーストの一様で別空間に逃げ込む奴だ」
「せしたら境界操ればいいんじやないの？」
「まだ母さんみたいに自由にはできないよ、せいぜいスキマで移動
ぐらー」

姿が見えないとなると三の中でも別空間に身を潜めていると判断。

「そのための だよ」

クロムチエスターに搭載されたハイパージェネレータにはネクサスが発生させ作る異空間メタフィールドやゴルゴレムが潜む別空間に突入する事が可能である。

「なるほどね、今日はそれが出番なのね」

「出てきたところをディバイトランチャーで結晶を破壊すれば逃げられなくなるからそこを叩けば」

「大天狗様に提案して今日中には行動できるようにしますね」

大天狗とは妖怪の山で主に管理職を努めており次に偉い。

「お願い、となると夜か……俺達なりのクロスフェーズ・トラップを仕掛けないとならないか」

「ぐる…………何よそれ」

「簡単に言えば囮を置いて罠を仕掛ける、待ち伏せかな？ビーストも餌がないと動かないからな……不本意だけど誰かに頼むか」

ゴルゴレムを別空間で幻想郷内の妖怪の山の待ち伏せしている場所に出さないといきなり引き摺りだしても意味がない、囮を用意すれば確実に近づくと言つことだがリスクが高い。

「…………まあ夜まで時間あるか」

「どんだけのんびりするんですか……」

天狗達さえ貸してくれればいいため細かい所はこちらで組み立てようと考えていた。

「まあゴルゴレムも動くの夜だろ？」

「昼間ならもう襲われて騒いでますからね」

「なら夜まで昼寝しよー」

あぐびをしいかにも眠たそな靈夢は神社の中に入つていつた。

「いつも眠たそですねあなたの奥さんは」

「まだ結婚してないから、まあ眠たそなのは否定しねーが……
つて俺も寝ようかな」

カズキもあぐびをしながら神社に入つていつた。

「夫婦は似るのでしようか…………もししくは紫さんの血?」

疑問に思いつつ黒い羽根を大きく広げ動かし空へ飛んでいった。

「あやや～、こんにひきせ～!!ハイくん
「あ、こんにひきせ文ちゃん」

人里、文はそこに寄りまづ最初に出会つたのは茶髪の髪の毛の青年、ヒビノ・ミライだった、この彼こそがウルトラマンメビウスである。

「良かつた、早く念えて」

「どうかしたの？」

妖怪の山で起きた事件の事を伝えに来たのだ、それを教えるとマライはありがと、と礼を言つ。

「夜にはゴルゴレムの殲滅が行われるので耳に入れておいた方が」「分かった、里はジンくんに任せて山の方に行くよ」

よろしくお願いします、そう返すと文はまた黒い羽根を広げて飛んでいった、まだ新聞を配つている途中だからだ。

「お仕事頑張って~」

腕を大きく振りながら見送りその飛ぶ羽根を広げた後ろ姿を見て。

「立派な翼だな……」

マライは通信機メモリー・ディスプレイを出し眺める、後ろに描かれた炎を。

「…………俺達の翼…………そろそろできたかな」

空を見上げて山の方へ飛んでいく影を見つめていた。

そんなこんな、思い思いの時間を過ごしていくとあと二つ間に夜となつた。

だが山は静かで寝静まつっていた、今回ゴルゴレムを誘き寄せる作戦は文が引き受けた、あちこちで妖怪が出てきたら現れるものも現れないと考えたからだ。

森の中、カズキが乗つたクロムチェスターが着陸しておりコックピットのカバーの横には靈夢と魔理沙が座つていた。

「飛ぶ時は降りてよ」

「わーつてるわーつてる」

「だけど引っ掛けかるかしら?」

不安点もある、昨夜現れたからと出現確率は半々のはず、必ず出現するとは限らないがゴルゴレムは山に潜んでいるはず。

「……………引っ掛けたみたい」

「ゴックピットのモニターにビースト振動波が感知されたのを示す波長を表示した。」

「一人は機体から離れるとクロムチェスターは浮上。」

「ハイパージェネレーター、スキャニングパルス、フェイズ・シンクロナイザー起動」

ハイパージェネレーターはネクサスが作る亜空間メタフィールドに突入するための制御装置でスキャニングパルスはビーストの潜伏する位相座標を突き止める機能でフェイズ・シンクロナイザーは位相空間へ移動するための機能である。

「さて、いきましょつか」

クロムチエスターは加速し光を放ちながらその姿を消した。

「まだですかね……」

被害があつた現場を中心に文は飛び回っていた、ゴルゴレムを誘い出すため。

「文へ！」

靈夢と魔理沙が目の前で待っていた、なぜどこを飛んでいるのかが分かつたのはやはり現場の回りを飛んでおり文は速いため何度も同じ場所を通り過ぎるから一定の場所に立ち止まつていれば合流できるといふこと。

「あやや、見つかったんですか？」

「ああ、もうカズキが行つた」

どこからゴルゴレムが現れるか身構えていると白い霧が漂ってきた。

「霧？」

「なんで霧が……」

霧が発生する条件は整っていない、考えられるとしたら怪獣かビースト。

霧は忽ち辺りを包み三人の視界を奪つた。

「何も見えないわね……」

見えないが音は響く、鳴き声が、足音が、まるで自分達をこの霧の中、獲物として捉えているかのようだ。

「散らばる？」

「一ヶ所に固まつてたらいい的だからな」

そうですね、と繋げると散会し散らばつた、その途端鳴き声の主は三人がどこに行き、散らばつたかを捜索していた。

「ギヤオオオオオオオーン！――！」

位相空間の中、そこは戦場ばかりの空間でどこのを見渡しても縁にしか見えなかつた。

「孤門副隊長も同じ空間に入つたんだよな……」

しばらく飛行していると背中に三個の巨大な結晶を生やし四足歩行の岩石のようで赤い筋のようなものが付いた皮膚に長い首に何個も発光体が付き頭部が尖ったインビジブルタイプビースト・ゴルゴレムが巨大な足を上げて歩行していた。

「ぐ？」

「ゴルゴレムはクロムチョスターに氣付き頭部を上げそこから光線を放ち攻撃を始めた、光線を右左と傾け避けていく。

「クアドラプラスター……アビロック、ファイヤー！」

操縦桿のトリガーを引き左右の四つの砲門からオレンジの光線と無数のミサイルを発射し「ゴルゴレムに襲い掛かる。

「グゴツ！？」

クアドラプラスターは一つの結晶を直撃し破壊すると「ゴルゴレムの体がだんだん透明になり消えた。

「さて、あつちに戻るか」

機体はまた光を放ち消えていった。

博麗大結界内、靈夢達は霧の中をさ迷い、見えない敵から逃げて

いた。

「まつたく…………視界悪いわね…………」

危うく大木にぶつかり掛けるぐらいだつた。

「グゴオオオオオオツ！」

霧の中、近い場所で大きな鳴き声が聞こえると田の前で巨大な何かが光っていた。

「もしかして…………」

更に辺りを金色の光が包み込んでいき靈夢をも巻き込むと赤い大地が広がり空が青く、光り輝いている空間、メタフィールドだつた。

「ショツ！」

ゴルゴレムと対峙するエナジーコアの上部に青く輝くクリスタル、コアゲージが付き赤い体となつたウルトラマンネクサス・ジュネッスが立つていた。

メタフィールドはウルトラマンが戦いに有利となる効果を持つてゐる、ゴルゴレムの結晶は再生するため再生してもここなら位相空間には逃げられない。

「カズキ…………」

視界が良くなり目の前に敵が現れたためお札を自然と出してゐた。

「ハツ！」

一瞬構えると走りだす、ゴルゴレムは光線を放つがそれをジャンプをし避けて落下の勢いを利用し急降下キックを放ち更にもう一つ結晶を碎く。

「ギツー！？」

背後に立ちそこからロー・キックを何発も食らわし攻撃していく。

「グルルウ……！」

そこでゴルゴレムは頭部の下部から口が付いた触手が伸び後ろを向き口から火炎弾を発射した。

「グワアツー！」

火炎弾は右肩に直撃、その威力は直撃した場所は黒く焦げる程だった。

「グツー！」

地面に膝を付くとネクサスを尻尾で叩き付け攻撃いく。

（くそつ……）

メタフィールドの中でも苦戦は強いられる事はよくある、今回はゴルゴレムはかなり強敵だった、伸縮自在の首のよつたな触手による攻撃により。

「ガゴオオオオオオツー！！！！！」

勢いよく振り向きその長く太い首で足払いを掛けネクサスを倒す。

「グオオツー？」

背中が大地に叩き付けられるのしかかられ前足で殴られていく。

「グウウツー？」

腕を顔の前で交差して攻撃を防ぐが当たる所は当たりダメージを食らっていく。

(まさかここまで……)

触手を伸ばし口を下に向け火炎弾を放とうとしたその時だった。

「グゴツー？」

白黒の陰陽玉が落下、口に直撃し更に数枚のお札が触手に刺さり傷口から血が噴射。

「グギヤアアアアアアアアツー！！！！！」

苦痛の叫びを上げつつ後退している。

「靈符……夢想封印！」

最後に夢想封印が放たれ触手の先端の頭に直撃し爆発し頭は吹き飛んだ。

(靈夢一)

それらはメタフィールドに巻き込まれその中にいた靈夢による援護だった。

「カズキ、今よ！」

ネクサスは立ち上がりいつもとは違う構え、右腕を伸ばし左腕を曲げて拳にするとすぐに解き走りだし飛び上がりチヨップを首に叩き込むと蹴り上げて両手で掴む、振り払われそうになるが踏張り腹部に。

「ショアツ！」

ジュネッスピアンチを炸裂、腹部は柔らかいため拳が腹にめり込みゴルゴレムは更に悲鳴を上げていく。

そして首を腕で締め上げるように掴みそのまま振り回し投げ飛ばすと両手を拳にし腹部の前で交差するとアームドネクサスは青く輝きゅつくりと腕を曲げその間に青い稻妻が走り次に両手を上げ。

「ショアツ！……！」

最後に両手をL字に組み右腕から青白く輝く光線、オーバーレイ・シユトロームを放った。

光線は倒れているゴルゴレムに直撃し体が青白く発光すると光線が止まつた瞬間粒子状に四散しゴルゴレムは消滅した。

同時にメタフィールドも消滅し結界内に出るとネクサスは赤いオーラを纏いながら消えていった。

「まだ霧が……」

「なんだよこの霧？」

カズキが隣に並んで飛び霧の事を聞かれる。

「判らないわ…………」

霧が晴れず視界が悪いまま飛行を続けている文は霧の中に浮かぶ巨大な黒い影を見つけていた。

「もしかして別の…………」

羽根を羽ばたかせて進んでいると頭が危険信号を発し急いで右に寄ると巨大な何か、鋏にも見える物が通過した。

「あやや！？」

すると田の前にもその鋏の影が見え一瞬で上昇し避けるがその二つの鋏は追尾してきた。

「追い掛けてきた！」

それを振り切ろうと加速し飛び回るがしつこく追ってくる。

「しつこい…………！」

迂回したりと急な方向転換で振り切ろうと試みるがその鋏は獲物

を狙つた鮫のよつに追つてくる。

「あいや 文じやねーか？」

魔理沙もカズキ達と合流し霧の中、瞬時に動き回る影を見付けていた。

「何かに追われてるの？」

鋏の影も見えていたためそういう考えられ。

「ん、やつこや文、スペルカードを使えば……」

その手があつた！ 、思い出したかのよつにスペルカードを出し方向転換し地上に体を向け。

「竜巻、天孫降臨の道しるべ！」

その前方に向け竜巻を出し霧は竜巻により吹き飛ばされ消滅すると地上に茶色にとぐろを巻いたような体に頭部に耳のような突き出た先端に両手に鋏が付いた伸縮自在の腕の岩石怪獣サドラがおり空腹を表すかのように腹の虫が鳴り響いていた。

サドラは腕を伸ばしました文に狙いを定めていた。

「警戒していたので本気は出しませんでしたがそのくらいの速度な

「うー」

避けられる、その言葉を繋げようとしたら反対方向から同じよう
な鋏が付いた腕が伸びてきた。

「もう一体…？」

なんとサドラはもう一体居たのだ、そう先ほど急な方向転換に着いてこられたように見えたのはもう一体のサドラが方向転換したのを察知し襲い掛かってきていたからだ。

「ギシャアアアアアツ…！…！…！」

サドラ達は完全に狙いを定めてしまい他には注意が向かっていかつた。

「マスタースパークで倒してやるぜ！」

ミニ八卦炉をサドラに向けていると反対方向から鳴き声が響いてきた。

「まさかまだいるの…？」

振り向くとサドラのその巨体が迫ってきておりその大きな足で踏み潰そうとしていた。

咄嗟にエボルトラスターを出すが間に合うか間に合わないか、そう感じた刹那、その自分達を潰そうとしていたサドラの頭部の突起物に赤く光る光線が直撃し火花を散らし巨体はふらつきながら後退した、その突起物は鮫の鼻先のようなレーダーの役割がありそこが弱点である。

「今のは？」

真上をクロムフェスターではない下部が白く、赤とオレンジの

ラインが流れる機体が通り過ぎ上昇すると上部の姿も、炎のようなエンブレムが描かれた両翼に機首が黄色く、後部に一枚の尾翼、鳥のよみうりとも見えるその機体の名はGコヨウガノウインガー。

「//ハイ？」

ロックピットの中//ライが見え後部座席には水色の髪の少女も見えた。

「//といつ？」

その少女は前半らへんにも説明した河城にとりである。

「ひとりちゃん、後は任せるよ」
「いいよー。テストも完璧だしー！」

//ライは左腕を曲げるとブレスレットのような赤い宝石が埋め込まれた赤と金のアイテムを出す。
クリスタルサークルと呼ばれる宝石を右手で1回転させると金色の光を放ち左腕を挙げ……

「メビウカカウカウカウカウース……………」

自身の真名を叫び金色の光に包まれるとロックピットから光の球となり飛び出し文を狙う一体のサドリにぶつかって吹き飛ばしていく。

「//ハイくんー。」

光の球は人型となり光が消え赤と銀の体に菱形の青く輝くクリスタル、カラータイマーを付けた巨人、ヒビノ・ミライの本来の姿であるウルトラマンメビウスの姿を現した。

「セアツー！」

左腕を拳にし上に向か曲げ右腕を伸ばす構えを取る。

「ギシャアアアアアツ…………！」

サドラ達はメビウスの回りを取り囲みこの数に勝てるか？　、と言わんばかりに鳴き声を上げ嘲笑う。

「…………」

だがメビウスはその挑発には乗らず乳白色に輝く眼でかかってこいと布告する、それに気付いたサドラの一体は腕を伸ばし鋏で体を引き裂いて広げると。

「ハツー！」

変身アイテムでもあるメビウスブレスから金色の剣メビュームブレードを出しその腕を切り飛ばす。

サドラは苦しみながら後退していくがメビウスの移動速度が速く、その刹那、サドラの上半身の下半身は別れ、爆発した。

「ハイ速え！」

感心している文が近くに降りてきた。

「ハアアアアアア…………！」

左腕を大きく回しメビュームブレードから光が放たれノコギリ状の刃が四つ付いた輪が生成されると剣を消滅させ右手でその輪を持ちサドラに向けて投げ飛ばしそのサドラの首は切斷されボトッ！、と音を立て頭が地面に落し胴体は倒れ込んだ。

「セアツ！」

構えを取ると走りだしサドラに飛び蹴りを食らわすと首に手刀を叩き込む。

「ハツ！」

素早く回し蹴りを繰り出していく、一回|一回|二回|四回と。

「ハアアアアアア…………セアツ！」

左腕を輝かせるとサドラを殴り飛ばし距離を取る。

メビウスブレスのクリスタルサークルを回転させ金色の光を解放すると両手を挙げていき無限大のマークが現れ消えると腕を十字に組み必殺技、金色の光線のメビュームシユートを発射した。

「ギシヤアアアアアアツ！－！－！－！－！－？」

光線はサドラを直撃、光線が止まるとサドラは力尽き倒れ爆発を起こした。

「//ハイくん！　あの戦闘機なんですか！？」

カズキが聞こうとした事を先に文が聞いてしまい身を引いた。

「アレは…………GUYSガンワインガー、俺達の翼の一つですー。」

元気よく誇らしげに笑顔で答える彼がそこにいたのだった。

T o b e C o n t i n u e d . . .

Episode · 02【俺の翼 マイヴィング】(後書き)

文はアレでしね、ガントローダーのブリンクガーファンー（オイツ
魔理沙は…………トルネードサンダー？

次回予告

カズキ

「これがミライが乗つてた機体なんだ」

ミライ

「GUYS、ガンフュニックス」

ヘイレン

「クエェェェェェェェッ！－！－！－！」

文

「は、速い！」

魔理沙

「振り切れない！」

ミライ／カズキ

「「パーミッション・トゥー・シフト.....マニューバアツ！！」

次回『Episode · 03【不死鳥の翼 フェニックス・ワイン
グ】』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930x/>

東方超銀河伝説 ウルトラギャラクシーサーガ

2011年12月21日18時53分発行